
黒の剣士の物語

暴風雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の剣士の物語

【Nコード】

N4092V

【作者名】

暴風雨

【あらすじ】

番長を倒してしまつてみんなから恐怖される以外は普通の主人公東上真崎は、ある日趣味である天体観測の際、空中にいた黒い穴に吸い込まれてしまう、その先にあったのは魔界に侵略されそうなひとつの星であった・・・

人生を退屈に過ごしていた主人公が、仲間とのふれあいで大切なことを学び、星を救おうとする物語

普通の日常（前書き）

初めて書く小説です

物語りとかもおかしいかもしれませんが数多くの方に読んでいただくとうれしいです

普通の日常

4月25日

春も終わりごろを向け、桜は散り新しい葉が生えてきそうな木を見つめる

今は夜、月はあと三日で満月になるんじゃない？見たいな感じの形をしている

そしてその月の下にオレはいる

その場に・・・4人組の男がぼろぼろになってうずくまっている
どうしてこうなった？

東上真崎、15歳

今年の春めでたく高校生となった

入学して二週間ぐらいがたち、初めてのクラスと先生、生徒たちの
気まずさもやわらいできたころだ

オレもあまり人に話しかけず、教室のど真ん中の席になったことを
うらみながら勉強をもくもくとやっていた、

一週間すればみんな顔見知りになり、いろんなやつが会話をはじ
め、グループができ、

中学のころとはかわらない風景ができあがる

だが、オレに話をかけるやつなどいない、みんなオレを知っている
からだ

中学のころ、オレは偶然たまたま上級生の番長を倒してしまった
そいつは喧嘩があらく、誰か相手を見つければ校舎の裏に呼び出し、
なき誤るまで殴るやつだ

オレはそいつに目をつけられ、校舎裏に行き、喧嘩が始まり、相手
が襲ってきたのでよけたら偶然その場で石に躓いて転び相手がオレ
で足をかけ転び、すぐそばにあった校舎のガラスに顔面を盛大にぶ
つけ病院に送られていった

それがうわさでこじれ、オレがその番長を蹴飛ばしやっつけたつ
いうことになってしまった

ということでオレはクラスではみんなが恐怖し、おびえる存在とな
っている

仲のよかった友達是他校にいつてしまったし、まあ、あまり友達と
かつくろうとか思ったこともない

しかし、オレが強いと思い込み、襲ってくるやつが後をたたないのだ

今はコンビニの帰り、袋を持ちながら自宅に向かう途中、4人組の
男がオレを囲んだ

手にはチェーンやらパイプやら物騒な武器を持っており、服装はな
んかちゃらちゃらした感じの服
そいつらがいつせいにオレを襲ってきやがった

オレはとっさに木の棒で反撃、叔父がなんとか流剣術をやっている
小さいころそれを体のすみずみにまでたたきこまれた俺にとっては
剣術はあるいみ普通の人より上だ

なので木の棒で普通に相手をぼこぼこにやっつけてしまった

また・・・オレのうわさながれるんだろうな

このとき、オレはまだ、普通と呼べる高校生で、特になんの特技とかもなく、このように非日常と呼べる日々を送っているのだが・・・
これがある日、とんでもないことになるとは思ってもいない

普通の日常（後書き）

主人公、東上真崎

身長165センチ

年齢15

顔つきや瞳が女性のように美しく、たまに女に間違えられる
おとなしい性格で年齢が察しにくい
たまにさえないギャグをいう

妹と天然

夜の月光の下で、オレは自分でぼこぼこにした4人を見つめて・・・

「・・・はぁ」

深く、軽いため息をはいた

その後、コンビニ袋を持ちながら自宅であるマンションの前まで来たエレベーターに乗り、最上階である9階のボタンを押す

画面上にアナログ文字で4、5、と上に上がっていく

その間、今日の出来事を振り返ってみた、学校でいつものようにおとなしくして

家に帰ってからPCをやり、おなががすいたのでコンビニまでお菓子を買いに・・・

そして襲ってきたやつらを退治して、今にいたる・・・

なんか、ろくでもない人生だな

そして、9階でエレベーターが停止し、扉が音なくして開く

そのまま歩いていき、軽く町の夜の風景を見ながら自分宅の908号室に向かう

そして、鍵のかかってないドアを開け・

「ただいま」

軽く挨拶を済ませ靴を脱ぐ

すると、廊下の方から早いテンポの足音が聞こえてきた・・・・

「お兄ちゃん！お帰りなさい！」

妹の東上麻衣だった

中学1年生になった妹、性格は明るいほうで髪型は黒のショート

自分で言うのはなんかあれだが・・・・かわいい妹だ

「遅かったね？なにかあったの??」

と問いかけてくる

「まあ・・・・ちょっと変なやつらに絡まれてね」

「ま、またいつものなんだね・・・・大丈夫なの？」

「心配いらないよ、アレだけじいちゃんにしごかれたんだ、そこら辺の不良に負けるやわな鍛え方はされてはないさ、そんなことより・・・・なんだお前その格好・・・・」

オレが突っ込みを入れた妹の格好、それはエプロンだった、別に裸エプロンとかそんなのじゃない、

普通にTシャツにショートパンツの上からエプロンだ

「えへへ。いつもお兄ちゃんご飯作ってくれるからさ・・・今日は私が作ろうと思って！腕にのりをかけてみたんだ！」

「へ、へえ・・・そ、そうなのか」

オレは冷や汗をかいた

結構前の話、オレはこいつが自分で作ったという飯を食ったことがある
だがその味は、お世辞を言ってもおいしいとはいえる代物ではなかった

まあ、小学生で料理は危険というオレの意見で、それ以来料理に関してはなにも言ってこなかったが・・・
まさか中学生になったから自覚がわいたのか、ご飯を作ってしまったらしい

「さあさあ！早く早く！」

「お・・・おう」

オレは小さい声で返事をし、リビングに向かった

そこには、見た目はとてもおいしそうな塩焼きの魚と野菜炒め
そして・・・なんだこの黒い汁は・・・

「びっくりした？それはイカ墨の味噌汁なんだよ！」

なんで普通の味噌汁チョイスしなかったんだこの妹は！？

「お・・・おう、なんかすごそうな味がしそうだな」

オレは目を泳がせながらいすに座った

「じゃあ！ いっただっきまーす！」 「い・・・いただきます」

オレはおそろおそろ、そのイカ墨味噌汁？ に手をそえ、一口。飲み込んだ・・・

「う・・・うまい」

なんだこれ、想像以上だ、てか想定外だ

なんか体があったまってくる・・・イカ墨恐るべし

「でしょでしょ！！ もっと食べてねー！」

元気で明るい妹を見つめる・・・そっか、こいつも子供じゃない
こうして料理して、いつかは結婚して、おいしい料理作るんだよな・
・・・

「な・・・なに？ お兄ちゃん・・・な、なんか顔についてる??？」

妹がオレの視線に気がついたのか、顔を赤らめながら問いかけてくる

「ああ、悪い、いつかお前も結婚とかして料理とかしてるんだろう
なーって思ってた」

オレは微笑ながらそういった

なんか一瞬妹が鶏になった

「結婚かあ……／＼わ、私は……まだ考えてないかなあ……あはは」

「あたりまえだ、中一で結婚考えて付き合ってる相手いるとか俺は驚愕するぞ」

「あ、うんそうだね・・・あはは」

なんか、たまにおかしくなるよな・・・妹は・・・

そう思いながら塩焼きの魚を一口食べると・・・

が@いおgrk「おヴあけrがいお!!!!!!!!!!!!!!?????
な、ななななな!!!!!!!!!!?????

これ・・・あれ！？塩焼きの魚だよな！？

何この味！？

くそ……イカ墨で油断してた!!!!!!

「なんかなんか……絶対人類食べちゃいけない味だこれ!!!!!!!!!!!!!!」

「どうおにいちちゃん!! おいしい・・・?」

妹がオレに問いかけてくる

「お・・・う、最高だ・・・」

「やった!! どんどん食べてね!」

こうしてオレは・・・この食べ物を完食する羽目になった・・・

食事後、風呂に行くといってトイレに駆け込んでなんとか一命を取り留めた

妹と天然（後書き）

東上麻衣

身長154センチ

主人公の妹

兄である真崎をお兄ちゃんといって知ったっており
兄を兄として、一人の男性として好意をもっている
どこか抜けたところのある天然な妹

天体観測

妹の地獄の晩御飯から一時間後

妹はシャワーを浴びてくるといって風呂場にいる

オレはいろいろ疲れてしまったので今はソファーに寝転がってテレビを見ている

さえないバラエティー番組と変なドキュメンタリーしかやってないので特に興味なくボーっと見ていた

(・・・いつものどこにいくか)

ふとそう思い、俺は立ち上がって自分の部屋にある長い黒のバックを担いだ

数分後、ここは俺の住むマンションの屋上
ある日ドアの鍵が壊れてるのを発見して、それ以来オレのお気に入りの場所となっている

そして一番のお気に入りなのが・・・この美しい夜空だ

とてつもない数の星、そして月、たまに見える流れ星
この星空がオレの悩みを小さくしてくれるのだ……………

オレはもってきた黒いバックのチャックを開けた
そこにはオレが貯金までだして買った天体望遠鏡

これでさまざまな星を見て感動するのがオレの趣味だ……

（こうして寝転がってるだけでも十分なのだがな……）

すると、不思議なものが見えた

ほんの一瞬だけだったが……なにか黒いものが流れたような気がする……

UFO!?

……なんてね、気のせいだろ……

オレはその一瞬を忘れ、また天体観測に望んだ

そのころ、気象衛星隊であることが起きていた

「おい！なんだこの黒いのは!？」

「丸いな……台風とかじゃないな……」

「台風にしては小さすぎる・・・それに、速度も速いぞ!!」

「分速1000キロです!! 写真でズームしましたが・・・まったくわかりません」

「くそ・・・これは公開するな! いいな!!」

真崎の知らないところで、真崎の人生を大きく変える出来事が起ころうとしていた

星をじっくり観察し、感動したあと、家に帰宅した

(あ・・・望遠鏡わすれた)

後でとりに行こうと思いながら、なにか飲もうとリビングに出たら・・・

「あ、おかえりお兄ちゃん」

風呂上りなのか頭にタオルを巻いた妹が牛乳を飲んでいた

成長期だな・・・なんか身長伸びてる気がするし・・・

「ただいま」

オレは軽く挨拶をすませ、冷蔵庫のドアを開けた

日にちが変わって0時6分

オレはテレビを見ていて、その隣で妹が眠りかけている

もう寝るか……

そう思ったらふと、屋上に天体観測に使う部品を忘れたことを思い出した

(いくのめんどくさいな……)

そう思いながらも立ち上がり、妹をベットまで寝かせて外に出た

(うー……さむ)

黒のジーンズにジャンパーという今の格好ではさすがに4月でも寒い

(早く帰ろう……)

扉をあけ、屋上の隅にある望遠鏡を見つける

「ふう、あったあった……さて、かえ……」

そのときだった、なぜか下の方から風が吹いてくる……いや、何かに吸い込まれる感覚がする

ふと……上を向いた

そこには・・・大きな・・・穴があった

表現が足りないかもしれないけど・・・とにかく穴としか言いようがない

その穴がごみやちり紙を吸い込んで・・・

やばい・・・そう思って歩き出そうとした・・・

でも・・・何度歩いてても進まない

・・・浮いてる・・・体が浮いてる・・・

なんかいつもと違う風景が見える・・・とてつもなくぐるぐるして
いる・・・

なんだ・・・なんだよこれ・・・おかしくね？

次の瞬間、あたりが真っ暗になった

町の街頭もない、下を向いてもそのないような真っ暗な闇が続く・
・

そして・・・浮いていた感覚が一気に・・・なくなった・・・

重力に逆らえないように落ちている・・・

落ちていく・・・

ずっと・・・

なにもない闇にまで・・・

そしてオレは・・・意識がとんだ・・・

異世界

・・・・・・・・・・

どこだここは・・・

オレは確か・・・・・・・・黒に何かに飲み込まれて・・・・・・・・

落ちた・・・・・・・・

うつすらと明かりを感じる・・・

なんだ・・・・・・・・この・・・・・・・・ひか・・・・・・・・り・・・・・・・・

そっと重い瞳をひらいた・・・

(・・・・・・・・まぶしい・・・・・・・・)

太陽だろうか・・・

強い日差しがかかる・・・

「・・・・・・・・うわぁ!!」

完全に思い出した・・・

オレ自宅マンションの屋上にいたんだよ・・・

そしたら・・・黒い穴に・・・

周りを見渡した

そこは木々がたくさん広がってる

オレは草の上で眠っていたみたいだ・・・

(・・・森?)

おかしい、おかしすぎる

オレはこんな木の生い茂ったところに住んではない
マンションやコンビニや・・・ビルとかがたくさん並んだところに住
んでるんだ・・・

こんな森なんてあるはずない・・・
それにあの時は夜だった・・・

太陽を見る限り今は昼ぐらいだ・・・

なんでこんな草木が生い茂るところで寝てるんだ俺・・・

とりあえず立ち上がる・・・

(なんだ・・・やけに体が軽い・・・)

その不安を考えながら耳を澄ましてみた

なにかの泣き声・・・鳥・・・か？

ギャアギャアという泣き声が聞こえる・・・

鳥とは思うけど・・・なんか違うな

歩こうと一歩足を前に出すと、コツンと何かが足にあったった

びっくりして下を見てみると・・・

(・・・望遠鏡だ)

あの時必死で握り締めてたからなあ・・・

望遠鏡を持ち、歩き始める

何分経っただろうか・・・

携帯を部屋においてたので時間が確かめられない

ずっと歩き続けてもなんの変わりもない木ばかりだ
ぐるぐる回ってるのかと不安になる

(・・・そうだ)

オレは木に登り天辺まで上り詰める

そして手に持っていた望遠鏡であたりを見回した・・・

森ばかりだ・・・

木はだいたい7メートルぐらいの高さはある
結構見渡せると思ったけど・・・そうでもないらしい・・・

そのときだった・・・

いきなりフツツと影がかかった

上を見てみると・・・

「ギャアーギャアーア！」

でかい鳥がいた

明らかに見たことのない鳥だ

てか5メートルぐらいあるんじゃないか大きさ・・・

一言で言う・・・化け物だった・・・

ここはオレの知っている地球じゃない・・・

異世界だ

確信はしてない

だがオレは心のどこかでそう思っていた

なんでこうなった・・・

あの黒い穴がなにかの入り口とか？
でもそんなアニメとかの出来事があるわけない・・・

歩きながらそんなことを考える
考えれば考えるほど頭が痛くなってくる・・・

学校は？妹の麻衣は大丈夫か・・・
そういえば今週の発売の雑誌買ってねえわ・・・
なんだか複雑な気分になってくる・・・

グゥ・・・

腹減ったな・・・

麻衣の飯が懐かしく感じるよ・・・

するの何か不思議な音がするのが聞こえた・・・

音の方向に進んでいくと・・・

ザー・・・

川だ・・・結構流れが速い

見た感じかなり透き通っていてうまそうだ・・・

思わず顔を川に突っ込んだ

ゴク・・・ゴク・・・

「・・・ツプハア」

ものすごくおいしい・・・

こんな水飲んだことないや・・・

・・・あれ？

急にふらつと視界がゆれる・・・

なんか・・・疲れてるのか・・・

そんなことをふとおもい・・・

ザッバーン！！！！

盛大な音を立てて俺は川に落ちた

ミリン・レイ

太陽の光が降り注ぐ地上である一人の少女が歩いていた

名前はミリン・レイ

彼女の服装はロングの白い服に白いハーフズボン
そして頭にはバンダナを巻いていた
手には杖をもっている

彼女はある用事をすませ、ある場所に帰るため、森をあるいていた・
・

「んー・・・今日は結構稼げたなー♪」

彼女は川沿いを歩いており、鼻歌交じりにステップを踏みながらあるいていた

すると川になんか黒い袋のようなものが流れていた

「なんだろう・・・?」

よく目を凝らしてみると・・・

「・・・え!？」

顔が見えた
男の子だ

これは流されてるのかな・・・

「って助けないと!!!」

レイは急いで川に飛び込み流されてる男の子の手をつかんだ・・・
しかし少女の力では陸にたどり着けない

すると少女は・・・

「神速なる風の精霊、セイリユウ!!!」

そう唱えた

すると空中で光のポリゴンが集まり、ひとつの小さいなにかの形を作った

そしてその光がはじけ、そこに現れたのは・・・

「ご主人呼びました??」

かわいらしいキャラクターの緑の羽の生えた生き物が現れた

「この人が流されてるの!!! 私一人じゃどうしようもなくて・・・
お願い! 力を貸して!!!」

「了解しました!!!」

そういうとその精霊は流されている二人の上でぐるぐると回り始めた
すると緑色のような竜巻があらわれ・・・

「ファームタイフーン!」

そう精霊が叫んだ

すると竜巻が激しくなり
二人を飛ばした

「つてきやああああ!! 強すぎ!!」

勢いよく吹っ飛ばされた

ズドンと大きな音をたてて地上に墜落した

「あー・・・ごめんご主人、手加減できんかった・・・」

「それがあなたの悪い癖だよね・・・まあ助かったわ、ありがとう」

「いえいえ! そんなじゃまたね!」

そういうとモンスターはポンツときえてしまい一枚のカードになった

そしてそのカードを彼女が手に取るとすう・・・と消えてしまった

「さてと・・・ここにいてモンスターに遭遇すると面倒だし・・・」

どうしようと考えていると・・・

「ん・・・んあ・・・?」

黒い服の男性がおきた

「あ! ええと・・・だ、大丈夫ですか!?!?!」

「ん・・・あ・・・ひ、人だ!?!?!」

「ふえ!?!」

いきなり立ち上がり、私と目が合うと驚いていた

「あの! いろいろ聞きたいことがあるんだけど!?!」

「えっと・・・なんでしょうか?」

「ここって・・・なんていう星ですか!?!」

・・・

しばらく沈黙が続いた

ミリン・レイ（後書き）

ミリン・レイ

身長155センチ

白い物が好きでいつも白い服を着ている
おてんばで危なっかしいところがある

セイリユウ

レイの精霊

（以後くわしいことは本編で）

アラマス

彼女から、この星のことを聞いた

この星はアラマスという惑星

大昔から魔法、というものがよく使われているらしい
聞くところによると魔法はさまざまな種類があるらしく、それぞれ
の人が自分に合った魔法を使うらしい
例外もいろいろあるみたいなのを説明していたが俺にはさっぱりだ

「あの・・・大丈夫？記憶混乱？」

記憶混乱とはオレの星で言う記憶喪失というやつだろうか・・・

「あのさ・・・えっと、信じてもらえるかわかんないけど、オレ
この星の人間じゃないんだよ」

「。。。。はい？」

まあ、そういう反応だろうな

私は宇宙人ですみたいなことを言ってるようなものだ

まあ・・・この人に言わせてもらえばそうかもしれないが

「まさか・・・魔界の人間？」

「。。。。まかい？」

なんかすごい単語がでてきた
魔界？

この星の近くにあるのだろうか

「えっと・・・その反応だと魔界も知らないみたいだね・・・」

「その魔界とはなんなんだ？」

「えっと・・・どこから説明すればいいのかな」

少女は困ったように説明をし始めた

魔界

それはこの世界とは別の世界の星

だがその魔界が400年ほど昔、魔王というやつのおかげでこの世界に魔界とアラムスをつなぐ入り口を開いてしまったそうだ

そしてそこから強力な魔物、または魔人があらわれたという

そのため一時期、アラムスは崩壊の危機が訪れたのだが・・・

そこに強力な魔法を持つ戦士が現れ、その戦士と仲間が魔物を倒しまわったという

そしてそのものたちを見た人たちは自分たちもと魔法を習い始めたとか・・・

「いまは魔法使いを育成するための学院や集団があちこちにあるの、それでほとんどはみんな魔物退治に力をつけているわ」

「・・・？魔物退治なら、もともと原因の魔王ってやつを倒せばいいんじゃないか？」

「。。。それがそうにもいかないの」

「・・・？」

「その強い戦士がね、仲間136人連れて・・・魔界の入り口までいったの、あ、魔界の入り口の下には大きなお城があるんだよ、詳しくはそこにいったの」

「う、うん」

「魔王の部下にもかなり強い人たちがいてね、戦いは5日に及んだ」

「5日!？」

それはかなりの激闘だっただろうな・・・

「それでも・・・勝てなかったんだ、魔王に」

「す、すごいな・・・」

「だからね、魔王は相手にしないで魔物の撃退に力を望んでいるの、魔王も、力をつけてるはずだし」

なるほどな・・・勝てない相手よりは勝てる相手をつぶすか・・・しかし今も生きてるってことは魔王いくつだよ・・・

「しかもね、魔法を悪いことに使う人も少くないの、いや・・・どちらかといえども多い」

「そ、そうなのか・・・」

「私はおばあちゃんが魔法使いだったからあこがれて、今に至るんだ」

じゃあ・・・この子も魔法とやらを使えるのだろうか・・・

「あ、そういえば自己紹介、まだだったね、私はレイ、ミリン・レイっていうんだ、よろしく!」

「ん? ああ、オレは東上真崎、よろしくな」

「トウジョウ・・・マサキ? 変わった名前、君のすんでた星ではこんな名前の人多いの?」

「まあ・・・住んでるところによっては変わるけど俺のそこはこんな名前だよ」

「そっかあ・・・よろしくね! マサキ!」

こうして自己紹介が終わった直後だった

グルルル・・・

何かのうめく声が聞こえた

少女・・・レイの顔が険しくなり、あたりを見渡していた

「さっき話した魔物・・・気をつけて」

「え？あ、ああ・・・」

気配はオレでもわかる、だけどどこにいるかは不明だ・・・

すると木々の陰からザン！！と黒く大きな影がでてきた・・・
見てみると・・・犬？いや、狼だ・・・かなり大きくて黒い狼がこちらをにらんでる

「ウォンウルフ・・・レベル2のモンスターだよ」

「レ、レベル2？最大はなんだ？」

「レベル15、でも十分この魔物でも人は殺すよ」

「ころ・・・！？」

殺す、すなわち死ぬ

その言葉にかなりの重みを感じた

とても冗談ではないことはわかる

「た・・・倒せるのか？」

「一匹や二匹なら・・・でも・・・」

そういうと木々の陰から狼が一匹、また一匹と出てきた・・・

うそだろ・・・5、いや6匹はいる

「あちゃー・・・こうなったら転送用のエフィネア買っておくんだ

った・・・」

レイがわけのわからないことをいつている

「お、オレも戦ってやる・・・」

「冗談言わないで！防具も武器も持っていないあなたに何ができるの！？」

「こう見えても向こうの世界では十分恐れられてたんだぜ俺は・・・」

その瞬間狼たちの目つきが変わった

「な・・・なに？」

「隙をうかがってるの・・・気を張らないと一瞬でやつらのエサだよ」

オレはいつもじいちゃんのいつてたことを思い出しながら構えた

構えるとき相手をよく見て、呼吸、空気、気配、動き、そのすべてを把握する

そして

「グオオオン！！！！」

相手が攻めてきた瞬間を見計らって・・・

「うおらああああ！！」

相手に攻撃を食らわす

オレは襲ってきた一匹に狼をよけて隙だらけの脇に思い切り蹴りを食らわした

「グラウ！」

狼は痛がり、その場にうずくまった

それがスイッチになったのか、周りの狼はいっせいに吠え出した

「あなた・・・何者？いまの動き早すぎ」

なんでだろう・・・この世界に来たときからなんだか気分がいい
よく見渡せるしどれだけ動いても疲れないし
体がとても軽いし動きたいだけ動ける・・・

まさかこの星

地球より重力とか軽いんじゃないか？
だからオレはこんなに軽々と・・・

それを知った瞬間、オレは狼たちの前に大きく立ちふさがった

攻撃魔法

狼・・・あと6匹

周りを狼が立ちふさがってるので逃げるのは不可能だな

「おい、レイ！どうすんだこれ・・・」

「どうするって・・・魔法とか使えないの！？」

「オレの世界に魔法なんて便利なもんはない！」

「え！？じゃあさっきの蹴りはただの君の肉体能力！？」

くそ！！

たしかこいつ2匹なら倒せるっていったよな・・・
下手したら死ぬんじゃないか・・・！？

「グオオルルアアアア！！」

一匹の狼が襲い掛かってきた

「クッ！！」

オレは軽くジャンプをした
軽く・・・のはずだが・・・
ブオオオン！

2メートルは飛べた

やはりここは重力が軽いんだ

そして狼の真上をとり

「うおらあああ!!」

狼の顔面に4，5発の蹴りを浴びせた

「ガッ!!」

狼は苦い声を出しバタンと倒れた

すると狼は動かなくなり黒く光り始めた

次の瞬間

バン!と音を立てて黒い霧と光のポリゴンがでてきて消えた

「な、なるほど・・・RPGみたいに倒したら消えるんだ・・・」

なんて思っていると狼は次から次へと襲いかかってきた

「ツク!こんの!!」

オレは次々襲ってくる狼をけったり殴ったり、しかし数が多くしかも動きもなかなか早いのでかするかあたるぐらいでクリーンヒットはまったくしてなかった

「・・・空魔の狭間に衝撃をもたらせ・・・“クラッシュ”!!」

なんかレイがそう唱えた

その瞬間、レイの持っている杖の先端が光り始めた・・・

すると一匹の狼の顔の周りに丸い何かがあらわれた

そこはまるでそこだけ空間がゆがんでるように見えて・・・すると

ドン！！！！

とかなりの衝撃が起こった

すると狼の顔面は血だらけになりバン！とさっきのようにポリゴンとなった

「す、すげえ・・・それが魔法か・・・」

「攻撃魔法です！それでも初級の初級、基本の基本！！！！」

「ならおれも・・・がんばらないとな」

残り4匹

オレはステップを踏みながら狼を華麗によけて見せた

そして落ちている太目の木の枝を拾い上げ、狼に体を横に向け、片手で棒を持ち剣先を向けかまえた

「あ、あんな棒で何を・・・しかもあんな構え見たことがない」

一匹の狼が横からオレに向かって飛びついてきている

オレは一気に体をひねり狼の下をくぐりながら、狼の顔、お腹、背中、横腹に棒をたたきつけた

さすがだ・・・体が思いの用に動く
しかも早い・・・いけるぞ

「す．．．すごすぎ．．．早すぎよ!」

そういうながらレイは狼の攻撃をぎりぎりよけながらツツコミを入
れていた

「焦熱の炎を! 闇なる敵を燃やせ!! “バースト”!!」

そう唱えた瞬間、一匹の狼が爆発した
大きな爆発ではないが十分にダメージを食らっているようだ

「チャンス!」

オレは一気に駆け込みひるんだ狼に休む間もなく棒を振り狼を叩き
飛ばした

そして狼はポリゴンとなり消えた．．．

あと二匹．．．．．

そのときだった

狼二匹は耳をぴくぴく動かし森の方を向いた

「．．．．．?」

狼はジーと木の奥のほうを向き．．．そしてキャンキャンと泣き逃
げていってしまった

「な、なんだ・・・?」

「ちょっと・・・冗談でしょ?」

「どうした?」

レイは衝撃的な表情をしながら森の奥を見つめていた
そしたら・・・

ドシン・・・

ミシミシ・・・

ドシン・・・

何かの足音らしき音が聞こえてきた
聞こえてくるたび、木々の葉っぱが落ちてくる
そしてその奥から現れたのは・・・

巨大な体、顔は豚

一言でいうと豚ゴリラだった

明らかに2メートルは越している・・・

「うそでしょ・・・?なんでレベル4が・・・」

そう答えレイは言った

「レベル4・・・ギガントブルム・・・」

オレの異世界初日はとても衝撃的なことになりそうだ

覚醒

目の前に巨大な豚ゴリラが立ちふさがる

名前は・・・ギガントブルムとかいったっけ？

その化け物を見てレイは衝撃を受け、その場に立ち尽くしていた

「おい！おい！！レイ！あいつはなんだよ！！」

「ギガントブルム・・・体長2メートル60センチ、重さは3トン・
・人間の数十倍の腕力を持って・・・かなり攻撃的な魔物よ・・・」

「まじか・・・」

オレは再びギガントブルムを見た

ギガントブルムは俺たちを警戒するようににらんでる

「フゴフゴ・・・ブン！」

においをかいでいるのか、鼻をぴくぴく動かしている
そして・・・

「フゴオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！！！！」

大きな雄叫びをあげた

「うお！！！！」

「キャア！」

オレとレイはその迫力と衝撃に圧倒されてしまった

ドシン・・・ドシン・・・
ゆっくりと近づいてきた

「ど、どうしよう・・・やばい、私もう魔力ほとんど残ってないのよ!!??」

「くそ・・・」

ダッ!!

オレは近づいてくるギガントブルムに向かって走り出した

「マサキ!？」

そしてギガントブルムの顔面に木の棒を3発叩き込んだ

「フグ!？」

しかしギガントブルムはなににもなかったかのように脇を通り過ぎた
オレを見ていた

「う・・・うそだろ？」

まったく食らってない、手もとを見てみると棒がぽっきりと折れて
しまっていた
やばい・・・

「に、にげてマサキ!!!!」

レイがそう叫ぶ
オレはとっさに背を向け走りだした・・・が

ドン！！！！ドカ！！！！

・・・なにがおきたのか

ギガントブルムが片手でオレを吹き飛ばし、オレは吹き飛ばされたところにあつた木に背中から思い切り叩きこまれた

「・・・・・・・・！！！！ゴウ・・・・！」

一瞬息ができなかった

オレは思い切り咳き込み、その場にうずくまった
なんて腕力だ・・・半端ないぞ・・・

ギガントブルムはゆっくりとオレに近づいてきている・・・
やばい・・・・

「“バースト”！！！！！」

ボゴン！！！！

ギガントブルムの顔面が軽く爆発した

「はあ・・・・はあ・・・・」

見るとレイが足を震えさせながら、目に涙をためてギガントブルムに立ちふさがっていた

杖をやつに向け、息を荒くしている

きっと今すぐ逃げ出したいかもしれない

しかし、オレがこうしている、オレを助けようとしているのだ
オレが動こうとした、しかし体が動かない、

さっきの攻撃か、それか恐怖か、あるいは両方だ

「きゃあ！！！」

するとギガントブルムが彼女の胴体をわしづかみ持ち上げた

なんて大きな手だ・・・そしてレイを持ち上げ強く握りしめた

「あ・・・がっ・・・」

レイは涙を流し、よだれがたれ、息もできないようだ

「や・・・めろ・・・」

オレは必死に立ち上がろうとした
しかし、やけに震えてうごけない

ギガントブルムはさらに強く握りしめ、レイを苦しめた

「あ・・・ああ!!」

「や、めろって・・・いつてんだろうがああ!!!!」

すると・・・

ブン!と何かが聞こえた

やけに左手があつい・・・

その思った瞬間

ゴオオオオオオオオ!!!!

どこからか、黒い何かがオレの手のひらで渦巻いた
それはぐっと丸くなり、黒い玉が現れる・・・

(・・・え?)

なぜだろうか、とてつもなくすごい力を感じる
オレはゆっくりとその玉をつかんだ

するどそれは黒く光だした・・・

そして丸い形はブォン！と別の形へと変形をした・・・

「こ・・・れは」

黒い剣だった

片手剣のようでけっこうな重さだ

・・・これなら

オレは体の震えをわすれ立ち上がり、手を伸ばしながらレイを苦しめてるギガントブルムに向かって走り出し、伸ばしきったその腕にオレは黒い剣を思い切り振り落とした

「グゴ!？」

すると、ドスンと音を立てて、腕が落ちた

そしてギガントブルムの切り口から、どす黒い血が噴出した

そしてオレは切り落とされた腕のそばに倒れているレイに向かって走り出し、レイを抱き上げ、ギガントブルムから距離をとった

「おい！大丈夫か!!」

オレはぐったりしているレイに向かって叫んだ

「げほ!! けほけほ!!」

レイはしばらく咳き込んで・・・

「な・・・なんであなたトーチがついてるの!？」

「と、とーち？」

この剣のことか？

そんなことを考えてると・・・

「ブオオオオオオオオ!!!!!!!!」

ギガントブルムがなかり切れている
片腕がなくなってしまう、暴れて、血が飛び散っている

「さて・・・やってくる」

「まって! あいつ桁違いに凶暴なんだよ!？」

「大丈夫だ、多分」

「多分って!!」

「やってみないとわからないものさ」

オレは剣を構え、今すぐにでも切りかかる準備をしている
なんだかこの剣を握ったときからすごく落ち着くなオレ・・・

オレは息を吸い・・・駆け出した

「ブガアアア!!」

ギガントブルムが片腕だけで殴ってきた
オレはそれをぎりぎりのところでよけ、

胴体に向け、縦一線に切りつけた

そして、勢い欲血が噴出し

ゆっくりと倒れた

「・・・ふう・・・」

そしてギガントブルムがポリゴンとなって消えた

その瞬間に、オレの片手に持っていた黒剣も光だし、ブンと消えた

しばらくの沈黙

「えっと、ありがとうな、レイ、無理して助けてくれて」

「あ・・・む、無理なんかじゃないよ！それに助けられたの私だし・・・」

「あのさ、トーチっていつてたっけ、それはなに？」

「えっと・・・トーチっていうのはね、魔法使いの中でもほとんどいない、心に魂となる武器をやどしていることなの、普通は、私みたいに、普通の武器を心にしまうんだけど・・・」

そういうとレイは持っていた杖を光の玉に変え、その玉はすう・とムネのなかに消えた

「ほら、こうして普通の武器は心にいれることができる、普通の光を出して武器は取り出すものだけど・・・マサキのはどこからか、黒い影になって出てきたから・・・トーチに違いないよ」

トーチが・・・魔法が使えないような俺でもだせるんだから出せる人は大勢いるはずだけどな

「さて・・・と、なあ、お前どこに向かってるんだ？」

「あ・・・えっと、都市にだよ、都市ランブドラ」

「ランブドラ？」

「うん、魔法都市、7割が魔法を習う生徒たちなんだよ。学園は全部で7校。それにさまざまな技術の機械があるんだけど・・・学園とか、機械とかわかる？」

「学園や機械あるの！！？？」

まじか・・・異世界でも機械技術はあるんだな

「うん、いろいろ便利だよ！それでお金を使ってさまざまなことをするんだけど・・・」

「お金？」

「えっと、ほら！」

レイはコートの裏側からなにか袋をとりだし、その中から妙な模様の入った丸い金貨らしきものを見せてくれた、その金貨には5と書かれてある

「これは5ベルだよ、それでこれが100ベル、これが300ベルで・・・」

次々と金貨を紹介してくれるレイ

「な、なあ、ひとつの食事を買うのにいくら？」

「んー・・・安いので50ベル、高いので4000ベルかな」

なるほど、なかなかのものだな

「さて！さっそくいこう！早くしないと日が暮れちゃうよ！！」

「うお！ちよつとまでまだ体が痛い！！」

レイは笑顔でオレの手を引っ張って走り出した
なんだかとても楽しそうな顔をしている

そして、オレも魔法都市というものがとても楽しみになってきた

この日、オレは別の世界で不思議な経験にみまわれた
オレは元の世界にもどれるのか、この世界でどのようなことをするのか

・・・なぜこの世界にきてしまったのか
いろいろ脳裏をよぎったが・・・まずはランブドラに向かおう

オレは、この先の運命を、まだ知るよしもなかった

魔法都市ランブドラ

都市ランブドラに向かい始めて1時間

戦った痛みもたいぶいえてきたころだった

太陽が沈みかけ、うっすらと赤くなりかけたところだった

「ほら見て！あれが魔法都市、ランブドラよ！！」

「……うおお……」

《魔法都市ランブドラ》

オレの想像をはるかに超えていた
まず面積がかなり大きい

ここから見てだいたい3キロ先か、俺たちは森をすこしぬけ、がけ
の上にいる

そこからみるランブドラはかなり大きい
建物が数多く建っており、建物の中央には大きい城のような建物がある

沈みかけている夕日にその都市はとてもすばらしい景色になっていた

「きれいだねえ」

「ああ……だな」

がけを降りて、都市の入り口までいく

ガヤガヤ・・・

さすが都市、なかなか人が多い
見てる限りほとんどが青少年だ

大人は商店などにいる・・・生徒が都市の7割とかいってたっけ

「すごいでしょ？」

「ああ・・・これが都市か・・・」

「ここは西部だよ、中心部はもっとすごいんだから！」

「なんだって！」

ここでも西部が・・・おそろしい

「私の家は南部にあるんだ。今から学園に行ってクエストの報告に
いってくるけどくる？」

「えっと・・・オレは入れるの？」

「基本生徒だけだけど・・・私が何とか説明する、その前に・・・」

レイがオレをじーと見つめてきた

・・・？なんだ？

よく見ると周りの人たちもオレをちらちら見ている

「その、マサキは服装が変わってるからみんな気にしてるんだよ」

「え! !」

そっか・・・オレのことはことなる風習なんだな

いまのオレの服装は黒のジャンパーにズボンだから・・・

「えっと、この世界来たばかりでお金ないんだったよね」

「ああ、うん」

「じゃあお金もらいに行こう!」

「え! !? もらえるの! !? ?」

「うん、換金所、魔物倒したからね」

「ああ・・・なるほどな」

レイに案内されて換金所まできた

丸っこい建物で屋根がきのこのような形をしていた

中に入ると不思議なおいがした

建物には花瓶や絵、いろいろなものが置いてあった

そして机、その後ろには大きな金庫

机のイスにはおばあさんが座っていた

「おやおやあ・・・レイちゃんじゃないか」

おばあさんはにやっと笑いレイを見た

「こんにちは。もうこんばんはになるのかな？」

「どちらでもよい、そちらにいる男の子はだれかなあ？見たことないねえ」

オレはおばあさんに見られあせった

「あ、っと真崎っていいいます」

「マサキ？変わった名前に変わった服装だねえ・・・他国のもんかい？」

「えっと、マキさん、この方は別の世界からきたんだって」

「ほう・・・ほお・・・別のせかいねえ・・・」

おばあさん（マキさんというらしい・・・）は信じられないという
ような顔になった、まあ当たり前か

「もしや・・・あの伝説の方の、後者なのかもねえ・・・」

「伝説の方？」

「あのねマサキ、魔王と戦った人の話をしたでしょ？」

「あ、ああ」

「その人もね、異世界から来た人なの」

「ま、まじか!!!!」

つまりその人もオレと同じ地球にいたのかな

「それはそうと・・・換金きたんだろお？」

「あ、はい！」

「それじゃあ、そちらに座ってごらん」

オレとレイはいわれたとおり、おばあさんの指定した場所に座り

「目を・・・つぶってごらんなさい」

目をつぶった

すると・・・

「“記憶回路”」

おばあさんが小さい声でそう唱えた

すると・・・不思議なようにオレが見て体感した記憶が巻き戻しされるかのように流れてきた
不思議に思うと

「目をあけてよいぞ」

おばあさんがそう、目をあけるとそこには変わらない風景がのこっている

「おどろいたのう、おぬし、なぜトーチを扱っておる、それに森でぬしが起きた後の記憶がさぐれぬ」

さぐれない？やっぱり異世界のせいなのか

「本当に異世界の人なんだね・・・」

「それはそうと、うり、レイちゃんは5600ベル、マサキ殿は2000ベルじゃ、すごいではないか、あのブルムを倒すとは」

「あ、どうも・・・」

お金をもらったあと、店をでてレイに聞かれた

「本当に異世界からきたんだね・・・」

「うん、まあ、きちやったもんはしょうがないさ、とりあえずは服と飯と寝床だ」

「そうだねえ・・・まず服を買いにいこう！」

そういうと歩き出したレイにオレはついていった

しばらくあるくと、いろんなデザインのならんでいる服屋についた

「どんな服がいい？火属性防具？それとも雷対応がいいかな・・・」

「あのさ、黒い服ないかな？」

「黒い服・・・？黒好きなの？？」

「あ、うんまあ、いつも黒い服ばかりだよ」

そういつてオレはきよときよとと店内を見回す

「あ、これがいいな」

オレはその服を手を取った

黒くて肩幅の出た服、中はパツパツな感じの服で上に黒のロングコート
の服を着るタイプ

そしてズボンは伸び縮みするような黒のズボン

今のオレにはぴったりの服だ

「ねえ・・・これでいいの？なんの防御もないやつだよ？？」

「攻撃食らわなくちゃいいだけだよ」

「そんな簡単に！！」

オレは値段をみた

1500ベル

「これくさーい」

「決めるのはやくない！？」

10分後

オレは買ったばかりの服に着替え、町を歩いていた

「なんか違和感あるけど・・・まあ、いつか」

「まったく・・・いつ死ぬかわかんないよそれじゃあ」

「大丈夫、オレは死なないよ」

レイの意見で次は学園に行くことになった

オレのことを説明するため学園に行くらしい

オレも学園に通うってことなのかな

「大丈夫だよ、学園の人は一部を除いていい人たちだから」

「い、一部って・・・」

そして町の角を曲がったところに、巨大なもんが現れた
かなりの大きさだ、5メートルぐらいあるんじゃないか・・・

「こっちは正門なんだ、朝と夕方の2回だけ開くんだよ、まあ個人で出入りするためにはこっちから」

するとレイの歩いていく先に小さな扉があった
そこから、くぐって中に入っていくと・・・

「うわぁ・・・」

さつき崖の上で見たときはすごいと思ったが・・・こうして目の前にたつとすばらしい

庭にはたくさんの木々や草木、女神の像の噴水があった

そして学園とよばれてる城は正面の大きな建物から回りにその城の

半分くらいの建物がいくつもたっている、そしてその小さい建物はすべて通路のようなものができていて、中心の城につながっている

「さあ！まずは先生のところにいこう！」

「あ、ああ・・・」

オレは学園に向かって、大きな一歩を踏み出した

ミツキ先生

オレは学園の中にはいり、すたすた歩いていくレイについていく
学園の中は見渡せば見渡すほど美しいところで、とても太くて丈夫
そうな柱、数々の扉など、オレはとてもわくわくとしていた

「なあ、いまからどこにいくんだ？」

「職員室だよ。私の担任の先生のミツキ先生のところに行くんだ！
ちょうど依頼が終わって私も報告しなくちゃいけないところだし」

「依頼？」

「あ、マサキにはまだ言ってなかったね。依頼、もしくはクエスト
は一般市民の人たちやさまざまな軍隊の人とかから依頼がくるの、
果物の収穫を手伝ってほしいとかから魔物退治まで幅広く専門とし
てるんだよ！」

「へえ・・・でもそれだと危険なものもあるだろ」

「うん・・・毎年何人が死者がでるんだよ・・・だから人数やそれ
ぞれのレベルが決められていて、受けれるのと受けられないのがある
んだよ」

「そ、そうなのか・・・」

死者か・・・ゲームとかそんな感覚に思えてきてたけど、ここにき
て現実に戻されたな

そりゃあ死んだらまたはじめからはじめられるわけではない、死ん

だらおしまい・・・か

「10人以下がチーム、それ以上が団体のメンバーで、名前とかつけてグループを決めるの！そのメンバーで、さまざまな依頼に挑戦するんだよ」

「そうなんだ？じゃあレイもどっかの団体やチームに入ってるのか？」

「ううん、私はまだソロ、誘ってくれる人とかもいるん・・・だよけど・・・」

そういうかけてレイはしゃべるのをやめ、目の前を向いた・・・

「うわ・・・」

小さい声でそういった、その視線の先には・・・

「はーい！レイちゃん！！依頼は、もう終わったのかい？」

話しかけてきたやつは身長はそこそ高い、髪型はものすごい派手な金髪

いかにもナンパやろうって感じがする

「か・・・カイさん、ま、まあ終わっていま連絡にいくところです・・・」

「そうかいそうかい。もう、例の答えは決まったかい？」

「いえ！ですので私はあなたのチームに入るきはないんですよ！」

「そう硬いこといわない・・・で・・・」

そういうやり取りをそばで聞いていた俺にやっと気づいたのか、そのカイとかいうやつはオレを見つけた瞬間、鋭い目つきでにらんだそしてそっと近づいてきて・・・

「なんだきみは、見ないやつだな、レイちゃんのなに？」

「えっと・・・なについていわれてもなあ・・・」

オレは答えに戸惑った

異世界からきたオレにとっても親切にしてくれてここまで案内してもらった仲とかいったら信じてくれるかな？

オレが答えに迷っていると、レイはなんか意味ありげな笑みをして・・・

「私！このマサキさんとチームを組むことにしたの！だからあなたのチームには入れないわ！！」

レイはオレの横にたち、オレの肩にぽんと手を乗せると、満面の笑みでそう答えた

「な・・・なんだと！！？？？どういふことだ貴様！！！！」

「は？いやそういわれても・・・」

むしろオレもあんたと同じリアクションしたい

「じゃあ！そういうことだから！！！」

そういうとレイはオレの腕を引っ張ってあるきだした

オレは引っ張られながらちらっと後ろを見ると、さっきの男が哑然とした表情で突っ立っていた

しばらく早歩きですすみ、ようやく腕を放して開放してくれたレイにオレは聞いた

「なるほど・・・仲間に誘われるけどあんな人たちばかりと」

「う、うん、ごめんね、勝手なこといっちゃって・・・」

「いや、別にいいよ、あれくらい言わないとあの男もあきらめなかったんじゃないか？」

「そ、そうだね、ありがとう」

そういうとレイはほかの扉とはすこし違う大きな目の扉の前でとまった

「ここが職員室だよ、ちょっと待っててね」

レイは職員室へと入っていった

しばらくまっ待っていると、レイがでてきた

レイともう一人、髪の長いポニーテールの背の高い女の人だ

「この人はミツキ先生、私の担任の先生だよ」

「セワ・ミツキだ、君がマサキだな」

「あ、はい、東上真崎といいます」

口調は男のような感じで、とてもクールで響き渡る声だった

「ここではなんだ、会議室に向かおう」

そう言うと歩き出したミツキ先生にオレはついていった

《会議室》

「さて、異世界から来たという話、だね」

「はい、多分昨日から今日にかけてなんですが・・・あの、今日は何日ですか？」

「5月の1日だ」

オレがああ黒い穴に吸い込まれたのは4月下旬だったから、オレは数日は眠っていたのか？

「まず、君は自分が異世界の人間だというのは控えたほうがいい、それを危険分子とおもい、命を狙われる可能性が高いからな」

「そう・・・ですか」

「普通の学生として、明日からこの学園に通ってもらおうとしよう、

先生方には話しておこう」

「え!？」

明日から!?! 早くない?!

するとレイはオレの耳元で小声でいった

「ミツキ先生はいろいろと手が早いんだよ」

なるほど・・・でも明日は・・・準備とかあるし

「準備はなにもしらない、明日はその服でこい、魔法といっても自分の得意な分野を学ぶだけだ、後は自由にしろ、いっとくがばれないようにしろよ」

「は。はい、わかりました・・・」

こうしてオレは明日から学園の生徒となることになった
会議室を出た後オレはふと思った、

「・・・オレどこで寝泊りすればいいんだろ」

どこか、寝やすいベンチをさがそうか・・・そう思った

ハイサキ・ミサ

オレは考えに考え、公園らしき広場のベンチに寝ることにした

レイはうちにおいでと誘ってくれていたのだがさすがにそれじゃあまずいと思ったので御礼と別れをいって学園をあとにした

300ベルで売っていたハンバーガーみたいな味のするサンドイッチを食べながらベンチに寝転がる

もうすっかり暗くなった空を見上げた・・・

大きな星が二つもある

青っぽい星に赤い星

明らかにオレの知らない星だ

ほかにも粒のように光る星がたくさんある

オレは本当に異世界に来たんだな・・・

「オレはここで、何をすればいいんだろう・・・」

しばらく星を見上げていたら、オレはいつの間にか眠ってしまっていた

・・・まぶしい

なんかまぶしい・・・

朝・・・か・・・

オレはそっと重いまぶたを開けた・・・

「・・・・・・・・今何時だ・・・・・・・・」

オレは起き上がった

いつもの布団、部屋、目覚まし時計・・・・・・・・

そっか・・さすがに夢だよな・・

あんな非常識な世界ありえねえて！

「はぁ・・安心し・・た!?」

オレは手がすべり、ベットから落ちた

ゴン！と頭を打ち、はっ！と目をあける・・

・・空、青い空、

下は砂の地面・・横にはベンチ・・

「・・・・・・・・なんだ・・夢・・か」

がっかりしたような安心したような、とてつもなく複雑な感じがした

オレは起き上がってうんつと背伸びした

骨がぼきぼきとなる、さすがにベンチは眠りにくいな

近くにある時計を見る

6時50分を過ぎたあたりだ

たしかレイは・・

（いつも7時30分には集合するから、遅刻しないようにね！）

あとミツキ先生も・・・

（お前は転校生としてうちに迎えるから、早くこいよ）

とかいってたっけなあ・・・

オレは学園に向けて歩き出した

《第4路地》

・・・どこだここ

やばい、学園は中心にあるから普通に学園向かって一直線に行った
ら・・・迷った

見事に迷子だ、この年になって恥ずかしい・・・てか道が複雑すぎる
る・・・

オレは行き止まりの道をなんども繰り返し、なんども後戻りした
何分足っただろ・・・やばいな

オレは後戻りしてすこし早歩きで走り出した
曲がり角を曲がったところで・・・
ドン！！

「うお!？」

「うわ!？」

オレはだれかとぶつかった

相手は結構華奢な体をしていた、俺は軽くのつもりが相手はしりもち
をついて倒れてしまった

みるとニット帽をかぶった子がいた、髪は灰色で服は細身の緑色をした服だった

「あ！ごめんなさい、大丈夫か！？」

オレはその子に手を向けた

「いたた・・・あ、ごめんね！ありがとう」

その子はオレの手をとるとよつと、と掛け声を出して立ち上がった

「あ、その・・・道を聞きたいんだけどさ、学園どこかしらない？」

オレはその子に聞いた

「あ、学園向かってるの？僕もだよ！見ない顔だね？転校生・・・とか？」

「あ、うんまあ・・・それでちよつと迷っちゃってね」

「そうなんだ！それじゃあ僕に任せて！こっちだよ！！」

オレはその子が歩いていく方向に向かってついていった
なんかこの世界に来て人についていくことが多くなったな

10分後

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えっと」

オレたちは二人して目の前にある壁、すなわち行き止まりで立ち止まっていた

オレは確かにこいつについていったのだが・・・

「あ、あれ・・・おかしいな・・・あ！こっちだ！そうだこっちだよ！！」

こんどはその子は別の道を指差してあるいていった
オレはその子に何も言わず、だまってついていった

10分後

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・なんといえばいいか・・・・・・・・ごめん」

俺たちは再び壁の前で立ち止まっていた

そっか・・・この子も迷ってたんだな

「あ！！そうだよこっちだよ！」

「いや・・・いいんだ、無理はしないでいい、俺が悪かったんだ・・・」

「そんなかわいそうなものを見る目で僕を見ないで！！」
とりあえず、また指をさした方向に進んでいった

すると、ようやくついた
学園の門の前だ

門は全開に開いていた、昨日レイがいていた朝と夕方の二回のうち一回は、これか

「な、なんかごめんね・・・時間無駄にしちゃって」

「いや、なかなか面白かったからいいよ、さんきゅーな」

「そ、そう!？」

その子は満面の笑みを見せた

「僕、ハイサキ・ミサ! 君は!?!?」

「あ、オレは東上・・・」

そういいかけて口を止めた

何せここではオレの名前は普通の名前ではないらしいから、怪しまれるとまずい

「ま、マサキ! マサキっていうんだ!」

「へえ・・・初めて聞く名前だ、よろしくね!」

「お、おう」

名前とこの顔でオレはいろいろ惑わされるけど、たぶんこの子、男の子か?

「なあ、ミサってさ、男？」

「なっ!!」

ミサは驚愕の顔をした

あれ・・・間違えた？

と思っただら、ガシ！と両手を強くつかまれ・・・

「僕をはじめて男と知ったのは君が始めてだ!!」

「ああ・・・そう」

男の子というより、男の娘、だな・・・

ミサと別れて、俺は職員室に行った
時間は7時26分、ぎりぎりだな

「遅い！何してたの!？」

職員室についた瞬間怒鳴られた

「ま・・・迷ってました」

「その年になって迷子か！子供め！」

いや、そりゃあ子供ですがね・・・

「お前の名前はヒガシノ・マサキだ、わかったな？」

「いいですけど・・・なんでそんな名前？」

オレと先生は教室に向かっていた、今日からオレが新しくすごす場所だ

「マサキの名前と・・・ここの世界の標準名をかけた、いい名だろう？」

先生はにいつとわらった

こうして笑うといい人そうなのに・・・なんでいつも機嫌悪そうな顔なんだろう

「なんか失礼なこと考えてないか？」

「滅相もございません」

こういうやり取りをしながら、階段を3階まで上り、3番目の扉でとまった

「いいか、今日からお前はこのクラスで授業をうけることになる、席もあるし中には学ぶべき資料と原稿が入っている、目をしっかり通しておけよ」

「は、はい」

ここにきて一気に緊張が高まる・・・

「いくぞ・・・ヒガシノ・マサキ!!」

「はい!!」

オレは先生とともに教室に入った

「今日からこのクラスの一員になる、ヒガシノ・マサキだ! みんな仲良くな!」

「おお! 転校生!」

「かっこよくない?」

「どんな能力!」

いろんな人が騒ぎだした

クラスの中は緑の髪とか白い髪とかかわった服とか、体格のでかい人もいる

そして前の一番端っこの席に、レイがいた

レイは笑顔でこっちに小さく手を振ってくれている

そういえばこの先生が担任っていったな

「お前の席は窓際が一番端っこだ、わからんことは隣に聞け」

なんていい加減な先生だ

オレはゆっくりと後ろの席に歩いていく、その際いろんな人がオレ

をちらちら見てくる

オレが後ろの席まで来て、席に着いたときだった

「やあ！マサキ！」

聞き覚えのある声・・・オレははっと顔を上げ、隣の席をみた

「ミサ・・・！！！」

オレの学園生活は楽しくなりそうだ、そう思えた

ミサの力

偶然にもレイとミサ、二人と同じクラスになり、おまけに隣がミサという奇跡

なにかと緊張していたが、うまくやっていける気がする

勉強にはさまざまな先生が教えにやってきた

力のこめ方、魔法の基本、さらには魔物の種類や特徴など
きつとこの日以外にもたくさんの基礎を説明してきたんだろう

それは、死者も出ているという危険な生活などに慣れていくためだろう

いろいろと、複雑なものだ

「お昼休み」

お昼休みはみんなが食事を始めている

オレはポケットに手を入れて中に入っている金貨を手にとった

200ベル

・・・さっき自販機みたいなのを見つけたけど、あれはひとつ180ベルだった

こんなんじゃないあ、飯は代えないな・・・

「やっほ！マサキ！」

悩んでるとレイがとことことオレの席にやってきた

「お金ないんでしょ？はい！」

そういつてレイは赤い包みを渡してきた

「・・・これは???」

「お弁当だよ？どうせ作るならと思ってマサキの分も作ってきたんだ！」

「へえ・・・ありが・・・」

ゾクウツ・・・！？

オレは周りを見渡した

近くにいた男子たちが目をそらす・・・

そっか・・・昨日のから見てレイは人気者なんだな

その人気者とオレが食事とくれば・・・嫉妬だつだろう

するとそこへ

「マサキ！僕の弁当も少し分けてあげるよ」

ミサがやってきた

「うお！ありがとう・・・」

なんか二人のやさしさが心にすごくしみる・・・

このお昼、オレは二人の優しさに包まれながた食事をした

《魔法練習場》

午後は魔法練習だ

実践で相手を作ってゲートの中で戦ったり、ゲート中はどんな怪我をしてもそれがすべて無効化される、つまりは再現だ

そのほかに岩場や水、風の強いところなど、自分たちでおのおの練習できるメニューがそろっている

みなすでにそれぞれの分野で魔法をだしていて、どれもすごいと思うが強そうには見えなかった

「どうする？ 僕は岩場いくけど・・・」

「オレはよくわかんねえからミサについてくよ、レイは？」

「私は回復系の魔法と、精霊召還の強化したいから」

「精霊？」

「あ、マサキはあの時気絶してたから知らないんだっけ、私の精霊は3人、風の精霊に水の精霊、あと鳥の精霊だよ」

「いろいろいるんだ・・・精霊っていうのは捕まえたりするとか？」

「契約、だね。上位の魔法では普通の魔物を捕まえる術もあるとか」

「へえ・・・」

見てみたいな・・・精霊

「岩場練習所」

練習場はがらんとしており、誰もいなかった

「マサキはなんの武器を使うの？」

「ン？オレは・・・」

オレは手に力を込めた

たしか・・・力を手のひらで練る感覚でだすんだっけな

そしてこのまえのように黒い剣が現れた

「この黒の剣だ」

するとミサは驚いた顔をして・・・

「そ、それトーチ！？はじめてみた・・・」

「ミサは？」

「僕は・・・」

ミサは目をとじた、すると胸の間から光がすう・・・とでてきた
その光は二つに分かれ、その光をミサは両手でつかんだ

すると手が激しく光だし、気がつくところには手にぴったりとはまった銀色の手袋をしていた

「ハンドハンマーだよ」

そういうとミサは岩のほうに向き、腕を構え、岩に向かって力いっぱいパンチを放った

すると岩はかなりの衝撃を受け、ひびが入りぼろぼろと割れた岩が地面に落ちた

・・・なんてパワーだ、かなりの衝撃でさっき見てたクラスの人たちの魔法に比べると結構上のほうの実力じゃないか!?

「す。すげえな・・・」

「・・・これね、お父さんの形見なんだ」

「お、お父さんの?」

「昔、最強といわれた魔物と戦って、死んじゃったらしいよ・・・」

そういうミサの目はとても悲しそうだった・・・

「オレさ、魔王を倒そうと思ってるんだ」

「・・・え!？」

オレは自分がやろうと思っていることを口にした

「それでさ、仲間が必要なんだ。最強の仲間が」

「え、えっと。。うん」

「だからな、ミサ、仲間になってくれ、オレの仲間に」

「・・・・・・!？」

魔王討伐

人類は無理だと確信した依頼

さつきちよこつと見てきたが、依頼の紙に書かれていたのは賞金1000億ベルの張り紙

魔王の力はとてつもなく強大

「魔王討伐なんて・・・・無理に決まってるよ・・・・」

「無理なことはない、力をつけるんだ、それで戦ってかつ」

マサキの目は本気だった

それを見て、ミサは真剣な表情になった

「オレに力を貸してくれ、俺たちでチームをつくらう!」

オレは手を差し伸べた

ミサは驚きを隠せてない

震えた手で・・・・オレの手を握ってくれた

この日、異世界で二日目、仲間ができた

魔王討伐に向けて、俺はまた一步前進できた

ミサの力（後書き）

ミツキ先生

身長172センチ

破壊魔法を得意としていて口調は男

しかし仕事以外になるととても親しみのやすい人である

ハイサキ・ミサ

身長159センチ

特殊能力不明

マサキがレイを除いて初めて学園でできた友達

ニット帽が特徴で女に間違えられることの多い男の娘

挑戦状

ミサが仲間になった

聞くところチーム（10人以下）で強大な敵や依頼をこなせば個人の名前が履歴に登録される

団体は（10人以上）がそのような依頼をこなすと、団体名だけが登録される

「そうなんだ、じゃあ10人以下のほうがいろいろと有利っぽいな」

「うん、将来的にはね」

「よし・・・じゃあ後8人！仲間を増やそう！」

「・・・もしかして10人だけで魔王倒す気なの？」

「ああ、なんかそんな感じのほうが面白いじゃん」

「・・・ぷ・・・ぷはははは！！」

いきなりミサが笑いだした

「い、いや・・・お、面白いねマサキは・・・ぷくく・・・」

「そんな笑わなくてもいいのに・・・」

「ふう・・・ごめんね」

一通り笑ってミサは謝罪した

すると後ろのほうから

「後8人じゃなくて、7人！の間違いでしょ！！」

ミサが膨れっ面でたっていた

「え？」

「え？じゃない！私もマサキの仲間だって言ったじゃん・・・」

「ああ・・・あれナンパ野郎まくためじゃないのか？」

「むう・・・私昨日の戦い、アレ初めて人と協力して戦ってたのに」

「まあ、レイは回復と召還魔法使えるらしいから・・・仲間としてはかなり戦力になりそうだな」

「でしょでしょ！！私をどんと頼りなさい！」

なんかふらふらしてて頼りない感じするけどな

仲間・・・か

オレはふと地球にいたころの生活を思い出していた

廊下を歩いてるだけでちらちら見られ、目があうと相手はそらし、

友達なんてできなかった

でも・・・この世界に来て、不思議な経験をして、仲間という響きのある人たちができた

オレは心底よろこんだ

「勝手に仲間なんて・・・僕がゆるさないよ」

オレが考えてる思考をぶち壊すようにある男がいつの間にか立っていた

たしか・・・昨日のナンパ野郎だ

「よく聞きたまえ・・・俺は入学当時からレイちゃんのことを誘っていたんだ、なのにいきなりふわりと現れた君にレイちゃんをとられてたまるか！」

もともとお前の物じゃないだろ、それに誘い断られてたくせに・・・

「・・・そうか、でもレイはお前じゃなく俺を選んだ、それに・・・お前よりはレイを大事な仲間として認めることが俺はできる」

「ふえ！？わ、私選ぶとかそんな贅沢な！！」

横でレイが赤面してなにか口走っているけど俺は無視して続けた

「断られても誘い続ける・・・しつこい男は嫌われるものだぞ」

「んだと・・・もしレイちゃんが魔物に襲われたりしたら、お前は助けることができるのか！？」

「少なくともお前よりはあるよ」

俺は挑発するように冷たくいった

「上等じゃねえか・・・貴様と俺、どっちがレイちゃんにふさわしいか勝負といこうぜ・・・！？」

「ああ、かまわないが？」

そういうとやつは高笑いした

「クハハハハハハ！！！！貴様のその美形な顔、ぐちゃぐちゃにしてやる……」

「美形じゃないぜ、カククン」

「誰がカククンだ！カイだカイ！！かしか合ってねえよ！」

そういうとカクは走ってミツキ先生の所にいった、きつと戦いの了承をとろうとしてるんだろ

それを見ていたらミサとレイが心配そうにいった

「大丈夫？あの人……ああ見えも中級魔法いろいろ使ってくる人だよ？」

「確か……1学年でランク50位以上とってた」

「……まあ、相手に不足はないさ」

するとカクが戻ってきた

「了解、とってきたぜ……始めようじゃねえか！！」

すると近くにミツキ先生が来て……

「ばれないようにしろ」と小さい声で言ってきた

「特別フィールド！ディサイン！！」

そう先生が唱えるとドーム型の丸い透明な空間が現れた

「この中だと、怪我もしなければ死にもしない。ただし、痛覚だけは来るから覚悟しとけ」

そう聞いて俺は中に入った

中は妙にうす暗く感じた

周りを見ると戦うのに興味があつたのか、ギャラリーがぞろぞろと集まってきた

「さて・・・マサキ・・・とかいったな、手加減は無用、いざ・・・勝負！！」

そういつてカクは両手をひろげ胸からでてきた光の玉をコントロールする

そしてその光が別の形へと変形し、それをカクはつかんだ
その光がはじけ武器があらわになる

「レインランス・・・」

そういった、手には槍、遠距離や接近の攻撃を得意としてそうだ

「いい武器じゃないか、カク」

「カイだっつーの。いくぜ・・・灼熱なる力、その武具にやどれ！
“バイス”！！」

そう唱えるとさっきの槍が炎に包まれた
見た感じ炎の槍だ・・・

「いくぜ・・・おらおらおらあ!!!!」

カク・・・カいは槍を放ってきた

鋭い槍と暑い炎、俺はぎりぎりのところで交わした

「まだまだあ!!」

カいは続けて突きを放った

俺はよけ続けたが炎のおかげで顔のあちこちを焼けどしたような痛みが襲う

俺は動きのタイミング、癖、呼吸

やつのすべてを見た

そしてもう一発突きが放った瞬間

「んな!?!」

槍の下をくぐり、ノーガードであるカいの腹と顔面にパンチを食らわした

「んぐ・・・、なかなかいいパンチじゃないか・・・」

結構ひるんだが、ノックダウンというわけにはいかない

さすがベスト50、楽に倒せはしないか・・・

しばらく攻撃をよけ、パンチをし、また攻撃を繰り返した
5分ぐらいたったかたってないか・・・そんなときカいは言った

「なぜ魔法を使ってこない!」

もつともな意見だ

俺は攻撃をよけパンチを放っただけ、魔法を一切使っていないや、使えないのだが

「別に、作戦だ作戦!!」

俺は勝手なことをいって攻撃をよけ続けた

6発よけたときにカイは攻撃をやめた

「・・・ふん、拉致があかな・・・」

そういうと右手を前にさしだし

「効力なる炎を、相手を焼き払え・・・“ファイヤーボール”!!」

そう唱えると足元に魔方陣らしき模様が現れ、光りだした

するとカイの頭上でどこからか炎が集まりだし、それは丸くなって巨大な炎の玉となった

俺がそれを黙ってみていると・・・

「くらええ!!!!」

カイがその炎を放った

さすがの大きさにこれはよけられない食らったらただじゃすまないだろうな

そんなことを考えていると、炎が直撃、爆発した
そして激しい土煙があらわれた・・・

「ふふふ・・・あっけなかったな」

カイはそういうと勝利の笑みを浮かべた

「あつついな・・・まったく」

「・・・はあ？」

カイはだらしない声を上げた

土煙から、倒したはずの敵であるマサキの声がした

しかもその声からはほんとうに暑そうでだるそうなそんな声だ
焦りなど微塵も感じていないようだ

すると土煙がぶん！晴れた

そこに、黒い服を着ていた男、マサキの右手に黒い剣が握られていた
マサキはとっさにトーチである剣を出し、そしてその剣で魔法をガ
ードしていた

「さすがだな、かるく振っただけで風が起こるんだから」

「と・・・トーチだと!？」

カイは驚いた

いや、勝負を見ていた人たちも驚いていた

見ず知らずの転校生が転校初日、50位以上のカイを相手に互角に
戦ってトーチまでも扱っている

そんなのを見て驚かないわけがないだろ

「・・・ふふ、どうやら俺は貴様を甘く見ていたようだ・・・」

カイは不気味な笑いをすると俺の方に向いた

「マサキ・・・貴様を倒す、俺の全力をかけて」

「・・・あっそ、望むところだ」

俺は剣を相手に向け、深く構えた
そしてしばらくの沈黙のあと・・・

ダッ！！！！

二人同時に駆け出し

ガキーン！！！！

槍と剣が、ぶつかった

挑戦状（後書き）

ロウリン・カイ

身長179センチ

特殊能力不明

武器ランス

ナンパ野郎で振られた回数数知れず
しかし実力はある

魔人剣

ガキーン！！

ザン！！

剣とランスのぶつかり合いが続く

相手のランスは長い上に炎をまとっているため、時折かすったりやけどをしたりする

相手は不気味な笑みを浮かべ、俺の隙をうかがってる

「どうしたどうしたあ！ トーチそんなに扱えてねえみてえだな！！」

「・・・・・・・・」

ここはいったん距離をとろう・・・

俺はステップを踏みながら後ろにとび相手との距離をとった
その瞬間、カイのまっぴんぱんといわんばかりの顔をした

「いっけえ！！！」

そういうとカイは槍の矛先を俺に向けだ

すると槍を包んでいた炎が槍のさきに集まり、巨大な炎のボールとなった

さっきのファイヤーボールより数倍でかい・・・

そう思った瞬間、ボールは放たれた

でかい・・・

どうよけるか不明だ

俺はとっさに剣を横に構えガードの体制をとった

そして・・・

ボガァァアアン！！！！

炎が直撃した

爆破は予想以上のものだった

俺は勢いよく吹っ飛び地面にたたきつけられた

「・・・・・・・・！ごほ！」

再現としてもかなりリアルな痛みだ

一瞬気を失いかけた

「これが俺の必殺技・・・・・・・・“バースショット”！！！」

必殺技か・・・

さすがだ・・・かなりの威力で今までとは明らかに違う

「技というのは魔力の使い方と武器との愛称、それを組み合わせ作るものだ・・・うまくいけばいくほど強い技が生まれる・・・俺の場合はこれだな」

そして俺にランスを構え突撃してきた

俺は勢いよくジャンプをしてそれを何とかかわした

「ほう・・・・・・・・俺の必殺技を食らって動けるのか、さすが俺が目をつけた相手だ」

「そいつはどうも」

正直まづかった

なんとか動けたのはこの世界の重力のおかげだろう
地球でこれを食べたら俺は地面にはいつくばっていただろうな

「まだまだいくぞ・・・」

そういうとまたランスは炎に包まれた
もう一撃食らうとまずいな・・・

「さあさあさあああ!!!!」

俺はやつの攻撃をよけ続けた
こうなったら・・・
俺はランスをよけて相手の懐に入った

「ああ!？」

そして勢いよく剣をふるい、カイの横腹を切り裂いた

「んぐう!？」

リアルだと血が噴出するだろうが・・・いまはそうはならないだろう
しかしカイにはそのリアルの痛みが襲っているだろう

「や、やるじゃないか・・・それで本気か・・・?」

まったく本気出していないとか口が裂けてもいえないな

「いいだろう・・・もう一度・・・!!」

すると炎がまたもや矛先に集まりだした
またあの攻撃か・・・

必殺技・・・俺にもあれば・・・

（技というのは魔力の使い方と武器との愛称、それを組み合わせ作るものだ・・・うまくいけばいくほど強い技が生まれる・・・）

・・・あいつ俺にヒントくれてるじゃねえか
たしか魔力は武器に練って力をつけるらしい
魔力は力と考え、力を武器に注ぎこむように・・・

俺は剣を後ろに構え、鞘はないが居合い切りをする構えをとる

この黒剣に・・・力を・・・するとかすかに、剣が黒く光るのが見えた

「「バースショット」!!!!」

すると巨大な炎が放たれた
一直線に俺に向かってくる・・・

まだだ・・・まだ・・・

そのとき、剣がカツ！と光りだした

俺は思い切り、剣を振り切った
すると切り裂いた空中から黒い斬撃が放たれた
するとその斬撃は炎を切りさいた

「んな!？」

そしてその斬撃が・・・カイを切りふきとばした

「ごほああああ!!??？」

カイは勢いよく吹っ飛び、地面にたたきついた

たたきついたカイはぴくりともうごかない、近くまで言ってみてみると気絶しているようだった

「・・・・ふう」

俺は一息ついてから剣を消した

その瞬間、周りからものすごい歓声が上がった

みんな驚いているようで俺はみんながなにいつてるかわからないが、とても気持ちのよい感じだった

「あー、勝者マサキ」

ミツキ先生が軽くい加減に勝敗を決めた

すると俺とカイを囲んでいたステージがぶんと消え、ミツキ先生は頭を抱えてどこかへ行ってしまった

俺はそれをぼーっと見ていると、レイとミサが駆け寄ってきた

「すごいよマサキ!なんなのあの技!？」

「僕すごい興奮しちゃった!あんなの見たことがないよ!!！」

「えっと・・・」

とっさにやったからな、でも、アレが俺の必殺技なのかな
だとしたらどんな技名に・・・

「あ、あれは魔人剣！魔人剣って言うんだよ」

とっさに適当につけた名前だった

「魔人・・・剣？」

「そ、そう、魔人を切り裂く剣、略して魔人剣！」

「へえ・・・なかなかかっこいいね！」

「すごくいいと思う！！」

ものすごい単純な二人でよかった・・・

そして実習が終わり、帰りの時間

俺はぼうつとしていた

今日のあの技・・・まだ未完成な気がする
なんだか不思議な感じだったな・・・

しばらくするとミツキ先生が来た

「マサキ、ほら」

そういうとミツキ先生は銀色の何かを投げってきた
俺は思わずそれを両手でキャッチした

「・・・・・・・・鍵？」

妙にかわいいキャラクターのついた鍵だった

「お前部屋ないだろ？だから寮の部屋を手配しておいた、部屋の引き出しにはお金が入っている」

「お金！？」

「ああ、ないだろ？1万ベルいれてあるからチェックしろ、普通は渡されないが、まあお前のことを考えて私が入れておいた」

「あ・・・・・・・・ありがとうございます！」

なんか怖そうな先生だとずっと思ってたけど、とてもいい人じゃないか・・・・・・・・

「ちなみに！今日の出来事は記録に書かれる、あまり目立ちすぎるなよ」

「は・・・・・・・・はい」

さすがに今日の出来事は学園中に広がってしまうだろう
とてつもなくいやな予感がする・・・・・・・・もしや、地球にいたころのよう
に番長を倒したことでいろんなやつに狙われたりとか・・・・・・・・

「それじゃあ、寮へと案内する、ついて来い」

いつものように大雑把なことを言い放ち、歩き出した
俺は先生にだまってついていった

廊下を曲がったり進んだり、扉を2つ開けてまだまだ進み、長い通路をまっすぐ進んで、ようやく寮にたどり着いた
寮の部屋数はとてもなく、円状になっている建物に対し、扉がずらりとならんでいた

驚いてる俺に対し、先生は気にも留めず歩き出した
するとひとつの扉の前でとまった
扉を見ると402と書かれていた

「ここがお前の部屋だ、だいたい物は準備されている、服もできる限りはそろえてあるからな」

「あ、ありがとうございます、そういえばこのキーホルダーってこの学園のイメージキャラかなにか？」

「いや、それはまよちゃんシリーズの第6弾についてくるものだ、私のものだったが、あげるとしよう」

なにそのかわいいシリーズ！？もしかしてミツキ先生かわいい物好き！？

「あ、ありがとうございます・・・」

「今は4時52分だ、7時から夕ご飯だから、下に下りて来い、お金をわすれるな」

そういい残し、先生は去っていった

・・・いろいろ不思議な人だ

部屋の鍵を開け、扉をゆっくり開く

「・・・うわあ」

きれいな部屋だった、けっこう広くて一人で寝泊りするには十分なものだった

部屋にはベット、ソファ、机、机の上にはテレビのようなものがある

部屋にあるもうひとつの扉を開けると、そこは風呂場にトイレだったとてもいい部屋だった・・・今日からここで寝泊りするとなると、とてもわくわくする

俺は早速シャワーを浴びようと思い、服を脱ぎはじめた・・・

風呂から上がって、着替えを済まし、早めに夕食を食べようと下に降りた

すでに数名の生徒が食事を始めており、食堂とよべるその場所には、嗅いだことのないおいしそうな香りがした

俺は先生がくれたお金で400ベルのフギブチの煮込みハンバーグというものを頼んだ

味はどちらかというと豚肉に近いハンバーグを俺はおいしくいただいた

おなががいっぱいになり、散歩を始めた俺
すっかり暗くなった外に、昨日のように巨大な星二つと数々の小さ

な星を見上げた

地球では見られないすばらしい光景だ・・・俺は歩きながら夜空を時折みて楽しんだ

そして大きな噴水の場所に来た、お昼は水が噴出していたそこは、夜は水は出てなく、水溜のところに水がたまっているだけだったきっと夜は稼働停止してるんだろうと思い、水を出していた女神を見つめた

すると、女神が伸ばしている腕の先端に、人がいた髪が長い、男の人だ、片手には日本刀らしき刀、そして男は俺に気がついたのか、俺を見るとジャンプしてすたっと俺の目の前でとまった

沈黙が続く、男は鋭い目だったが、とても美しい目をしていた肌色の髪、肩まで伸びている

男はそっと口を開いた

「・・・お前はマサキか？」

「え!？」

なんで俺を知っているんだ!？

「今日、転校してきた男」

「あ、ああ・・・」

そりゃあ知らない顔を見ればまずはそこをつくだろうな

「俺は・・・リド、お前・・・強いかな？」

「は？」

そういうとそのリドと名乗る男は言い放った

「俺は強い男が好きだ、しかし、入学して強いとうわさされるやつらはみんな違った、簡単に切れた、この刀も喜んではない・・・」

何を言ってるのかさっぱりわからなかったが・・・次の瞬間驚きの行動をした

鞘に入った日本刀を・・・ゆっくりと抜け出した

「勝負しろ、俺と」

刀を構え、星で光る刀ととの男は、絵になった
でもそんなのんきなことを考えてる暇はまったくなかった

斬撃のリド

なぜこんな展開になったのかまったくわからない
相手は刀を構え今にも襲ってくるような威圧感を放っている

「な、なんでこんなことを!？」

俺はとりあえず争いごとを拒むために話を切り出した

「俺は強いやつが好きだ、ただ強いやつと戦いたい、それだけだ」

なんて喧嘩屋だ・・・

さて・・・どうしよう

「かかってこないならこちらから行くぞ!!」

そういったリドという男は刀を構えこちらに向かい走り出した

「はっ!!」

剣を大きく振り切ってきた

「うお!？」

俺はぎりぎりのところで後ろに半歩さがり攻撃をかわした
しかし俺の前髪がほんの少しはらりと切り落とされていた
冗談じゃないぞ・・・今回は痛みが自我にくるからきられたらただ
じゃすまない

そんなのお構いなしにリドは次々と剣を振るってくる

俺は何とかよけ続けたが、最後に大きく振りかぶったのが腕にかすり服が切れ、切れ口から赤い血が流れていた

それを見た瞬間、とてつもなく血の気が下がった

やばいだろこれ!!

しかしわかったことがひとつある・・・

こいつ・・・刀扱いなれていない

いうならばど素人だ、がむしろに刀を振ってくるだけ、だから攻撃があたらないのか

「気づいたか？さすがだな、俺は刀に関しては素人だ、だが、今まで俺はたくさん強者と戦い、勝ってきた、なぜかわかるか？」

「？」

「俺の特殊能力が刀を必要とするからだ」

特殊能力、人それぞれ違った能力のことだ

しかしその能力はまったくの前触れなので、いつ自分で気づき使いこなすのかわからないとか

「これが俺の特殊能力だ、ふん!!!」

そういつて刀をふった

すると空中が切り裂かれ、斬撃が生まれたのだ

俺は咄嗟に横に飛び出して一直線にくる斬撃をよけた

すると斬撃はそのまま直進を続け、木を切り裂いて消えた

木はそのままゆっくりと倒れ、ドシンという大きな音を出した

・・・ありえない、あんな普通の刀の振りで斬撃が生まれるわけが・

「俺の能力“斬撃構成”、どんな振り方をしてても斬撃を生み出す能力だ」

な、なるほど・・・特殊能力っていうのはこんないい加減な能力なのか・・・

「さあ、貴様トーチ使いだろ、早く出してこい」

「くそ・・・」

できるだけ実戦ではトーチは使いたくない

今日のあの技、簡単に人を殺せそうだから・・・

俺は横に走り出した。するとそれに反応しリドは刀を連続でだして攻撃した

しかし俺はかなりのスピードで走っているので狙いがつけられず、すべての斬撃をよけきった

そして地面に落ちている無数の石を俺は走りながら拾い続けた

「何をする気だ!？」

俺は石をリドに向けおもしろいぶん投げた、するとリドは驚きの表情をして石を刀ではじいた

やはりこいつ、石すら切れないレベルだ、いける

俺は今度は上に石を二個投げた、するとリドは一瞬上を向き、俺の方に向きなあった

その一瞬の隙が俺はほしかった
俺は力いっぱい地面を蹴り上げ、とんだ
重力は弱い、俺は3メートルほどとんだ
咄嗟の行為でリドは俺を見失った
空は暗く、周りも光は少ない
そして何より、今の俺の服装は黒
簡単には見つけられないだろう

俺はリドの真後ろに着地
ザツッと草を踏む音がし、リドは咄嗟に後ろを向いた、それを狙っていた

俺はその振り向いた顔面狙って力いっぱいのパンチを放った

ゴス!!!!!!

とてつもない鈍い音

そして俺は手が痺れ、握りこぶしを和らげる
殴られたリドは後ろに吹っ飛び、頭を地面に打って動かなくなった
近くにそっと寄ると・・

「・・・う」

かすかに意識はある

鼻と口から血を流し、頭を打ったため意識が朦朧としているのだろう
しかしそんな状態であっても刀は決して放してはなかった

「・・・ふう」

俺は一息ついてリドが目を覚ます前にその場から逃げ去った

部屋に戻ってすぐさま切り口をふさいだ

ふう・・・なんかここに来て命何回落としそうになっただろうか
あいつ俺の部屋知らないよな・・・

念のため俺は鍵とチェーンを閉め、ベットに飛び込んだ
ベットは俺の部屋の感触に似ていて、俺はすんなりと寝ることができた

次の日の話だった

俺は時間ぎりぎりに教室到着

朝起きるの遅かった上に迷いに迷って近くにいた女子生徒に聞いて
なんとか教室に到着した

「おはよ、マサキ」

「おはよーミサ、今日は早いんだな」

「僕は毎日遅刻ぎりぎりなわけじゃないんだからね」

するとミサは俺の腕に巻いてある包帯に目を向けた

「え！？どうしたのその怪我？？」

「え？ああこれ？昨日変なりドって男に勝負挑まれてさ・・・」

「リ、リド!？」

ミサが驚きのリアクションをする

「知ってるのか？」

「知ってるも何も、“斬撃のリド”っていう通り名で、いろんな人がリドにやられていてさ、学園では危険扱いになってる人だよ!？」

「ほう、昨日の口ぶりからやっぱりいろんな人襲ってたのかあいつ・・・」

「で、でもリドに襲われて怪我それだけ!？普通は回復魔法の先生に診てもらわないといけないくらい重症をする人ばかりなのに・・・」

「ああ、ぶん殴って逃げたからな」

「はあ!？」

ミサはまた驚きのリアクション、オーバーだなあ・・・

「まさか殴るまで行くとは・・・本当、マサキにはいろいろ驚かされちゃうな」

「そうか・・・？まずはそのリドとやらを教えてくれないか？」

「ああ、うん」

そういつてミサはリドに関することを説明しだした

「“斬撃のリド” 特殊能力が斬撃を生み出す能力で、年は僕たちと同じ、なんで人を襲い続けているかまったくわからない不思議な人なんだよ……」

「そうなのか……」

悪者なのか？ 見た目はそんな気がしたけど

「でもこんな証言もある、森で魔物に出くわした女子生徒がリドに助けられたとか……街中で悪い人たちに襲われた住民がリドのおかげで助かったとか、だからリドはある意味、人気の高い人なんだ……悪い人かどうかわかんないよね」

「そうなのか……学年は一緒に、クラスはどこ所属なんだ？」

「はい」

「……」

それを先に言えよ、いろいろ抜けてる人だなミサって……

その瞬間だった

ガラッ！！

教室の扉が勢いよくあいた

そこにたっていたのは……昨日俺を襲った相手、リドだった
顔には傷テープ、鼻っ面おもしろい殴ったからな……

教室がリドの顔を見てがやがや騒ぎだす、まあ、こんな顔してきたんだ、驚いているだろうな

リドは俺を見つけると周りのことなどお構いなくずんずんと俺に迫ってきた

片手には昨日のように刀、服は簡単なシャツにズボンはグレイのズボン、そして腰には上着のようなものを縛っていた

そしてリドは俺の前で立ち止まった、俺はリドのほうに向く、きつと昨日の仕返しだろうか

俺はリドを見つめ、何をする気が伺う・・・

するとリドは驚きの行動にでた

刀を横にして地面に置き、俺に片膝と腕をついて頭を下げたのだ
そしてそれだけではなかった

「お願いがある、俺に・・・力を貸してくれ」

リドは冗談じゃなく、本気でそういつていた、まるで助けを求めているかの用に

「お、おい。俺にそんな趣味はねえよ、顔あげろ」

リドは顔をゆっくりと上げた
長い髪が顔を覆い隠してよく見えないが、顔を上げきったとき、その表情が伺えた

とてつもなく悲しそうで、不安でいっぱい顔をしていた

俺は冗談じゃないと確信して、リドを見つめた

斬撃のリド（後書き）

カルド・リド・エルマ

身長176センチ

特殊能力 斬撃構成

目つきが悪く灰色で長い髪をしている

武器は刀を使うが扱いなれてはいない

周囲からは恐怖に思われているが実はとてもやさしい人

陸 空 海

あれから時間がたち、今はお昼休み

俺は人の少ない学園内のしずかで休める場所にリドをつれてきた
あの表情、そしてうわさされる行動からは、普通ではないことが彼の身に起こっているのかもしれない

俺はベンチに座り、リドも黙って隣に座った

リドは何も言わない、きっと俺が何を聞きたいのか十分にわかって
いるはずだ

しばらくして、リドは重い口を開いた

「・・・俺はこの学園の郊外にある森のはずれにある家でくらしていた、結構裕福な家庭で問題なく暮らしていたんだ。だけど、一ヶ月前の話だ、ある3人組みが家に押し入ってきた」

「3人組？」

緊迫したムードが流れる

とてつもない話に俺は息を呑んだ

「俺は必死に戦った、だがあの三人の連携技にはまったくかなわなかったんだ・・・」

連携技？

「どんなやつか心当たりはないか？」

そういうとリドは言った

「ある、いろんなところに惜しいって強盗してる3人組、『リーク
カイ』っていうチームだ」

「リークーかい？」

変わった名前のチームだな・・・

「陸、空、海の三つの能力を生かしたチームだ」

なんか聞くととてもなく強そうな人たちだ・・・

「そいつらは今も俺の家に立てこもっている・・・両親を人質にと
ってな」

「!？」

なんてやつらだ・・・人としてゆるせねえ・・・

「だから俺は強いやつを探してたんだ、一緒に戦ってくれる強いや
つを、そんなときにお前が現れた」

「俺？」

「お前は俺を一撃で倒した、かなりの強者と見た、たのむ！俺と戦
ってくれ！」

リドはさすがのような目だった

そんなリドの頼みに俺は・・・

「ああ、戦ってやるよ」

俺はそう返事した、まったくお人よしだな俺・・・

「・・・！本当か？」

「ああ、だけどお前が思っている以上に俺はそんなに力を持っていないぞ」

「いや、俺の目に狂いはない・・・」

そんなこと言われるとすこし照れる

そのとき、授業開始5分前の鐘がなった

俺とリドは教室に向け走り、リドは授業が始める寸前に俺の近くに来てあとで続きを説明するといって席に戻っていった

俺は授業中ずっと考えていた

自分自身、それほど協力な力があるとは思っていない

毎回偶然に、流れるがまま戦ってきただけなんだ

今回は命がかかっている、俺、リド、そしてリドの両親

敵はどんな力をつけているのかわからない、全力を出さないと・・・

放課後となった

俺とリドは郊外の出口にまで来ていた

リドはもう一度細かく説明した

「まず、一人目、大地の能力を使うゴウラ、こいつは腕力がとてつもなく強い」

ゴウラ、頭の中で体格の大きいムキムキの男をイメージした
なるほど、強そうなやつだ

「二人目、空の能力、ソラ。スピードの早い女だ」

女・・・か、確かにスピードが得意のイメージがある

「最後に・・・海的能力、ウォル、剣士で海的能力をそのまま使う」

ふむふむ・・・なるほど。

・てかりドの説明結構難しいな・・・戦って見ないとわからないか・・・

しばらく歩いて15分がたった

魔物が出てくることもなく、そのまま突き進んでいく

「そういえばさ、リド、お前武器を体にしまわないんだな」

「ああ、俺はこうして手に持ってた方が落ち着く」

そういうとリドは剣を強く握って・・・

「まってる・・・オヤジ、お袋」

そしてついに、リドの家までついた

大きな家だ、まるで城のような広さだ・・・さすが裕福は・・・つてまて！

「お前これはいくらなんでも大きすぎないか!？」

学園ほどではないが、普通の家と比べるとはるかに大きい

「まあ、な、オヤジは気に入ってるらしい」

そういうと開いたままの門をくぐって中に入っていた

屋敷の庭は荒れていた、木々が碎け落とされ、所々地割れしている
まっすぐ進むとそのまま正面玄関についた

扉はぼろぼろで片方の扉は完全に碎け落ちていた

「俺が出て行ったところより・・荒れている」

そういうトリドは中に入っていた

中は広場で大きな階段がある、中も荒れていた、花瓶は割られ、あちこちに木材の破片が落ちており、人の絵が描かれてある絵画はぼろぼろになっていた

「おい！！！！でてこい！！力をつけてきた！仲間も作ってきた！！今度こそ！まけねえぞ！！」

そう叫んだ、部屋に反響して奥のほうで声が跳ね返ってくる、しばらくすると階段に一人の男がいることに気がついた

「いやいやあ・・・本当に着たんだね」

髪の黒い男、すこし痩せていて悪者とは思えない顔だった

「へえ・・・すごいね、逃げ腰はものすごかったのに、てっきり戻ってこないかと」

さらに右側には女が立っていた、ソラとかいう女だろうか
身長は高くはないが、なかなかの美人で、一瞬見とれてしまった

「あれ？なかなかかわいい人連れてきてるジャン、強そうに見えないなあ・・・」

女は俺を見るとそういった、弱そうで悪かったな

そういうと今度は左側からドシン！！と大きな音を立てて大柄の男が立っていた

「ガッガッガ！！戻ってきたがりドゥ・・・またつぶされたいが？」

こいつが大地の能力者？わかりやすいな
なかなか特徴がある話方で腕の太さはとてつもなかった
大きさは2メートルほどありそうだ

「さて・・・、二人だけなのかな？それじゃあ、はじめようか！」

そういうと男は早速体の中から片手剣を取り出した
それに続き女はムチ、男は固そうな鎧を身にまとっていた

それぞれが別々の武器で、すぐに戦闘を開始するようだった
それを確かめた瞬間、いきなり片手剣の男のほうから大量の水が噴
出してきた

「わぷっ！？」

「なっ！？」

俺とリドはそれに流され、外にほうりこまれた

俺はすぐに立ち上がり、入り口のほうを睨んだ
すると入り口にあった扉はドッカァン！という音とともに破壊され
た、破壊され土煙とともに一人の大男、ゴウラとかいったか、が扉
を持ち上げていた、扉の大きさは俺の3倍ぐらいはある、それをゴ
ウラは軽々と片手で持ち上げていたのだ、それにそれを思い切り投
げつけてきた

「うお!？」

俺はジャンプしてかわしたが、まだ膝をついていたリドにその扉が直撃しそうになった

「リド!？」

俺は思い切り叫んだ、するとリドは刀に手をかけズバッ!!!!

扉を半分に切り裂いた能力をかすかに使って刀の刃に斬撃を纏ったのか・・・

俺は地面に着地し、相手3人が並んでこちらに近づいてるのを見つけた、

そして俺は、トーチである黒い剣を召還した

「ほう・・・トーチか、なかなか骨のありそうなやつだ」

「へえ? 以外ねえ」

ウォルとソラの二人がそういつてくすくす笑っている

俺は構えて相手の攻撃を待った、すると予想外の攻撃がきた

「「サンダーダンス」」

ソラはムチを持ったまま、ダンスを踊りだした、するとムチは四方八方に錯乱し、そのムチは雷を纏ってびりびりとうなり出した、攻撃を見切れず、俺はムチが直撃し雷で感電した

「ぐあああああああ！……！！！！！！」

感電

とてつもない衝撃と破壊力、強すぎる

「アースクラッシュ”！！！！」

休み時間もなく、しびれて片足を突いた俺に向かってゴウラも魔法を唱えた

すると俺とリドの周りに岩が盛り上がり、囲むように巨大な壁ができ逃げ場を失う

「しまった！？」

逃げ場がどこにもない、なんて技だ

すると、岩の下から水がつぎつぎ流れ出した、あのウォルとかいう男の能力か

それはとてつもない勢いで俺は脚がつかなくなり、しょうがなく上に泳いでいった

リドも泳げるらしくそのまま岩の壁に向かって泳ぎだした

これだけ水がたまってしまえば泳いであの岩の壁を越えられる

そう思った矢先、あることが頭をよぎった

・・・あの女の雷！

気づいた時には遅かった

ソラは壁の上に立っておりムチを水につけると・・・

「雷鳴」

と唱え、ムチが雷を出した

ビリビリビリビ!!!!!!!!!!

「・・・!?!?!!!」

電気を通し、雷の攻撃が水を伝わってきた

声が出ない

しびれて動けない

このままでは確実にやばい

二人とも・・・命があぶない

俺は雷のせいで意識が朦朧としてきた・・・

どう・・・す・・・る

「悪を灼熱の炎で焼き払え!! “バースト”!!!!!!」
どこからか、そのような術式が唱えられた

その瞬間、ムチ使いのソラに炎の爆発が起こった

「きゃああー!!」

女は後ろに半歩よったおかげで、岩の壁から落ちていった
俺は何がおきたかわからず、雷の脅威が脱し、辺りを見回そうとしたとき・・・

「ハンマースラッシュ”!!!」
ものすごい衝撃が岩の壁を襲った

岩の壁が砕け、中にあった水がいつせいに流れ出した
俺とリドも一緒に流れ、地面についたとき、片足を突いて、息を整えた

「はぁ・・・はぁ・・・」

この攻撃、魔法・・・なんで・・・

「まったく、森へ向かってるマサキを見て心配して来て見れば!!」

「友達である僕に相談なしにこんな危険なところなんて、バカじゃないの!」

俺の友達であり、仲間・・・

そこにいたのは、いるはずのないレイと、ミサ立っていた

海鳴りのウォル

レイとミサ

思わぬ二人の参戦で俺は言葉がでなかった

「それで、あの三人組は何なの？」

レイは三人組を見つめて聞いてきた

「あ、ああ・・・詳しいところはあとで言いたいんだけど・・・悪者とだけ言っておくよ」

「おい、誰だこいつらは？」

リドが二人をにらんで言った

「俺の大事な仲間だよ・・・大丈夫、実力は俺が認める」

「ほう・・・」

リドは納得した様子で再びあの3人を睨んだ

「何？2人増えるの？僕はかまわないよ」

ウォルは剣を構えながらにやりと笑った

「ガハハハハ！！おもしれえ！！」

敵もとくに何も言ってこない、それほど自分たちの力に自身がある

のだろうか

「うふふ！よくもやってくれたね！！」

ソラという女がムチでレイを攻撃した

レイはそれを何とかかわすとソラとの距離をとった

たぶんさっきの魔法攻撃で切れてるんだろうか、レイを集中して攻撃している

「あの女の人私は私が戦うから！」

そういうとレイはソラのほうに走り出し、ムチをよけて杖で反撃に出た

レイの力を信じよう、きっと勝てるはずだ

「それじゃあ僕は・・・」

そういうとミサはゴウラを見た

「んだ？俺のあいではおまえが？」

「うん、そうなるね」

ミサはあせる様子もなく相手に向かって拳を構えた

「いくどチビ！！！」

そういうとゴウラは左手拳を握り思い切りミサに殴りかかった
ミサも左手を握り思い切りパンチを放った

そして互いの拳がぶつかり合い、かなりの衝撃が起こる

あの二人、かなりの力だ・・・ミサも安心できるはずだ

「・・・俺たちは・・・」

俺とリドは残り一人、ウォルが相手だ、やつは余裕の表情だ

「ん？二人が相手するの？勝てるかな？」

そういうと剣を振り上げ・・・地面を蹴り、一気にこちらとの距離をつめ始めた

リドは刀、俺は黒剣を構え、やつの攻撃に備えた

「波乗りステップ」

そういうとウォルは足元に波の動きをした水を出した

それに乗流れるようにステップを踏み、動きが先読みできない

するとウォルはにやりと笑い、俺とリドの間をいつの間にか通りすぎていた

ザシュッ！

「!？」

ウォルは通り過ぎた際に俺とリドのわき腹を切り裂いていた
きられる痛み、とてつのない圧迫感が俺を襲う

「ふふふ・・・僕の特異能力“海鳴り”。限度はあるが一部水を海のように扱うことができる・・・この敷地には水が豊富だねえ・・・あちこちから水が湧き出すような感覚だ」

そういうとあたりから水が湧き出し、俺とリド、ウォルを囲むように波が立った

特殊能力・・・たしかにほかでは見られないような技だ

「はぁぁぁ!!」

リドは負けじと剣を振るった、斬撃が次々と現れ、ウォルに向かって直進する

「無駄だよ・・・“津波ジャンプ”」

そういうとウォルの目の前に巨大な波ができた、ウォルはそれに乗ると空高く舞い上がった

そしてリドの斬撃が波に飲み込まれた

そのまま上空にいるウォルは何やら両手を広げていて、それをグツツと握った

その瞬間に周りを囲んでいた波の壁が閉じ始めた

このままだと波に飲まれ俺とリドは溺死だ

俺は黒剣を振り上げ、懇親の力をこめ・・・

「“魔人剣”!!」

剣を振り下げ黒の斬撃を出した

すると斬撃は波の一角に直撃、その部分の水がはじかれた、俺とリドはそのチャンスを逃さず、波が押し寄せるぎりぎりのところで脱出した

俺とリドがいた場所は波が勢いよく地面をたたきつけたところで、

ザッパーンという音とともに、波濤きだたった

「かなり強い・・・」

俺は地面に着地したウォルを見つめた

「ははは。これを脱出したの君が始めてだよ・・・まだまだこれから！」

「・・・くそ」

リドはとても悔しそうに拳を握っている
ウォルは再び剣を構え、次の攻撃を行おうとしていた・・・

海鳴りのウォル（後書き）

ゴウラ

身長189センチ

頭が悪く力はとてつもなく強い
しゃべり方が特殊で、大地の能力を使う

ソラ

身長159センチ

見た目はかなり美しい少女
ムチを武器に使い、空に関する能力を使う

ウォル

身長170センチ

特殊能力海鳴り

優しげな表情からは裏腹にかなり残酷な人物
水を海のように扱うが限度があるため、あまり使わないようにしている

燃え上がる女二人

リドとマサキ、そしてウォルが激しい戦いを繰り広げている中
女同士の戦いとなったレイとソラも、女とは思えないほどの激闘を
繰り広げていた

「はぁぁ!!」

ソラがムチを器用に扱い、レイの隙あるところに次々攻撃を加えて
いた

「くっ! ふっ!!」

それに負けじとレイもムチをぎりぎりのところでかわし、あるいは
杖でガードした

「“バースト”!!」

時折、レイは呪文を発動し、ソラに攻撃を加えているのだが、

「ほっ!!」

ソラはムチを地面にたたきつけ、その衝動で大空に舞い上がる
その姿はまるで小鳥が空で遊んでいるように感じた

「はぁ・・・はぁ・・・」

「あらあら? もう息きらしちゃったの?」

魔法を使いながら戦っていたレイは、魔力を少しずつ失っていき、早くも疲れが見え始めていた。対するソラは、ムチだけで戦っていたため、精神的な疲れは見られず、余裕の表情だった。

「・・・ヒーリング”！！”」

「あ！！」

レイは魔法名を唱えた、それにソラはしまったという表情。レイが今唱えたのは回復魔法、大きな回復はしないが、十分疲れは取れるぐらいの回復力だ。

「油断したね！！」

「くっそ・・・“サンダーダンス”！！」

ソラはムチに雷をまとい、踊った、そして踊りふられたムチの無鉄砲な攻撃がレイを襲う、レイはあわてる様子もなく、魔力を練った。するともっていた杖を地面にトンとつけると・・・

「“リファイン”！！」

っと唱えた

すると地面からレイを囲むように衝撃波があらわれた。ビジビジビジ！っとソラは攻撃を続けたが、衝撃波は破られず、攻撃をやめた。

「なるほどね・・・回復系とガード系が得意なの・・・」

「まあね！小さいころお母さんに体の隅々まで叩き込まれたんだから！！！」

そういう終わってレイは杖を持ち直し反撃に出る
杖に光をまとい、攻撃力を上げる、そしてその杖を振り上げ、思い
切りソラに向かって振り下げた

「っ！！！」

ソラはムチを両手で伸ばし、杖からの攻撃を防いだ

「ふう・・・びっくりした、ちゃんと攻撃魔法も備えてあるのね・・・」

「守ってばかりじゃ拉致があかないでしょ？」

二人はそのような会話をし、バンッと後ろに下がってお互いの距離
をとる

「こうなったら・・・アレを使いますか・・・」

そういうとソラは両手を伸ばし上に上げた

「空を舞う美しき風を・・・“マニユア”！！！」

そう唱えると空中で小さい鳥のような精霊が現れた

「どうしたの主人、めずらしく苦戦？」

その鳥はソラの肩に止まるとそう聞いた

「まあ、苦戦といっておく、あの子を倒して!!」

「わかった」

うなずくと鳥は空高く舞い上がった

ただでさえ小さい鳥がどんどん小さくなっていき、やがて空中でぴたりととまると・・・

羽をたたんでくちばしをレイの方に向け、急降下しはじめた

「な!？」

そのままとてつもないスピードで落ちている鳥は途中ぐるぐると回りだした

すると鳥の回った速度で周りに風がまとい、いつしか竜巻のようになっている

「・・・“降下タイフーン”」

鳥はぼそつといった

レイはあわてて杖を横にもち、ガードの体制をとったが・・・
ズドドドオオオオオオオオ!!!!!!

ガードとはお構いなしに、レイはタイフーンの餌食となった
そのまま吹っ飛ばされ、後ろにあった壁に激突、壁は木っ端微塵に吹っ飛び、レイはその場にうずくまった・・・

「・・・・・・・・つく・・・・・・・・」

「へえ? タフなんだ、あれくらって意識あるとか・・・」

「――なる・・・か・・・ぜの・・・」

「え？」

「風の精霊！！“セイリユウ”！！！！」

レイは力の残る限りで、そう唱えた

「ご主人よびました？」

かわいらしい精霊の登場だったが場の場の雰囲気としては最悪だ

「ご、ご主人！？」

セイリユウはぼろぼろで倒れているレイを見つけ驚いていた

「セイリユウ・・・私の魔力あなたに託すから・・・暴れちゃって」

「わ、わかったよ！！」

うなずくとセイリユウはソラとマニユアの方に向いた

「ご主人こんな目にあわせて・・・ゆるさないもん・・・」

「なかなかかわいい精霊じゃん！私の精霊にならない??」

「ご主人は僕の命の恩人・・・ご主人がピンチの時は全身全霊をかけて戦う・・・！！」

「そっかぁ・・・マニユア、やっちゃって」

「わかった」

そうとうとマニユアという鳥は再び空高く舞いあがり、そのまま急降下した

「“落下タイフーン”」

先ほどのものすごい威力のある技だ、食らえばただじゃすまない

「僕に風の攻撃・・・きかない」

するとセイリユウは口を大きく開け・・・

「“カマイタチ”!!!!」

とう叫んだ

するとセイリユウの口から白い風が勢いよく吹き荒れた

その風はマニユアのタイフーンを巻き込んでそのまま吹き飛ばした

「あああああ!!!!!!」

マニユアは風の中でぐるぐると回りその風はあちこち動き回ってソラのたっている場所にも吹っ飛んできた

「え!?!? うそ!!!!!! わ! きゃあああああ!!!!!!」

ソラとマニユアは風に巻き込まれたあとそのまま壁に直撃した
直撃した衝撃で風はやみ、そこにはぼろぼろになったソラとマニユ

アが気絶していた

「は・・・はは・・・本当手加減できないんだから・・・」

そういうと魔力を使い果たしたレイはガクつとその場で気を失ってしまった

腕力VS威力

レイとソラの迫力ある戦いのほかに、ミサとゴウラの戦いも、かなり互角の戦いをしていた

ゴウラはかなりの腕力を持っており、次々ミサに攻撃をする、ミサはスピードと威力ある

攻撃をかわしつつゴウラに攻撃するが、ゴウラの硬い鎧にはびくともしなかった

そのような攻撃を繰り返し、まったく決着がついてなかった

「はぁ!!」

ゴウン!!

パンチが鎧にあたり響きわたる

「むだむだ・・・がぁ!!」

ブンツツと風を切るパンチが放たれる

それをミサがぎりぎりにかわし、かわされたパンチは地面に激突、地面はかなりの衝撃を受け、割れた

「はぁ・・・はぁ・・・」

ミサの体力はもうなくなりかけていたのに対し、ゴウラはまだまだ余裕の表情

「ぐははは!!!!くらえ!“アースクラッシュ”!!」

ゴウラは素晴らしい地面に力いっぱいパンチを放った

するとミサの左右から岩が向きあがり、その岩がミサをはさむようにせまりはじめた

ミサは咄嗟に左側の岩にパンチを放ち叩き割った
そして何とか攻撃を回避してゴウラに向けかまえる

（はぁ・・・やっぱり僕には無理なのかな）

あるひとつの出来事が頭をよぎる

それはあの実習練習のとき、マサキが華麗に戦い、あのカイを倒した姿

戦いや依頼などやらず、ただ父のように強くなるため、隠れて練習してきたミサ

そのミサにとってマサキはまさに憧れの人となった

あのようにかっこよく戦ってかっこよく勝つ、そのような戦いをしたかった

しかし目の前の敵に攻撃すら食らわせない

（やっぱり僕には無理なのか・・・）

そんな言葉が頭をよぎってしまう

「なにをボーっとしてんだがぁ!!」

隙だらけのミサに向かってパンチを放つ

ミサはわれに返り、とっさに反撃のパンチを放った
しかしそのパンチにまったく力は入らず・・・

ガスッ!!

パンチ同士が重なった瞬間、力でミサの拳ははじかれてしまった
そしてノーガードのミサの体に・・・

ドゴッ！！！！

鈍く、力の入ったパンチがクリーンヒットした

「！！？？」

何が起こったかわからなかった

そのまま吹っ飛び、華奢な体が地面に何度もたたきつけられながら転がり続けた

ようやくとまったミサの体はぼろぼろで、どこもかしこも擦り傷だらけ、かぶっているニット帽も飛んでいき、帽子に隠れてた長い髪がばさっと降りる

「んが？お前女だが？？かみなげえな」

これは・・・この髪は・・・

ある記憶が頭をよぎった

母は黒い髪だった

父は灰色の髪、美しい母の顔と父のたくましい髪をミサは受け取った

ミサはこの二人の遺伝子である髪と顔をもらったことを誇りに思っていた

父はもうこの世にはいない

しかし、この髪が、父のことを思い出させてくれる

お父さん

（いいか、ミサ、力ってのはな、自分が弱気になると必ずつかないものなんだ）

弱気・・・

（自分の心に、力を想像するのさ、そうすれば、きっと力がつく・・・
わかったな）

「ありがとう、お父さん」

ミサは長い髪を下ろし、そのまま痛みを我慢して立ち上がった

横腹がとてつもなくいたい、多分、肋骨かなんかが折れてしまったのだろう

でも、大丈夫だ・・・

僕には力があるのだから

その瞬間、ミサのハンドハンマーが光りだした

いける

「んだ？まだ動けるのが？」

ミサはゴウラに向かって走り出した

「んぐ？“アースクライス”！！」

ゴウラは地面にパンチを放ち、その瞬間、ゴウラの拳がついてる地面から岩が浮き出した、その一歩前から岩がでる、それを繰り返すすごい威力の岩がミサに遅いかかる

しかし、ミサはあわてず、同じように地面にパンチを叩き込んだ

「“メガクウェイク”」

そう唱えると、岩・・・といっても、ゴウラの発動した岩とはまったく大きさが別で、ミサの岩はゴウラの3倍はあると思われる岩だった

その岩同士がぶつかり、かなりの衝撃が起こる、しかしミサの魔法は動きをやめず、そのままゴウラの岩を碎きながら迫っていった

「んな・・・！？ごぶがあ！！！」

ゴウラはまともに岩の攻撃を食らい、後ろに倒れこんだあわてて立ち上がると静かにこっちをにらみながら立っているミサに恐怖を感じた

「んな・・・なめるなあ！！！」

ゴウラはミサにパンチを放った、ミサはそのパンチを横から殴りはじき返した

「な!？」

「いくぞ・・・!」

ミサはゴウラの懐に力いっぱいパンチを放った
先ほどまではまったく効かなかったパンチ、しかし今回ののは明らかにレベルが違った

ゴウラの鎧はビキビキとヒビが入り、ゴウラは吹っ飛んだ

「う・・・ご」

そのままゴウラは地面にたたき落ち、そのままうずくまった・

「な・・・んだ、この力・・・あんな男がら・・・どこにあんな力があるんだが・・・」

「・・・まだまだ」

ミサはゆつくりとゴウラに歩み寄る

ゴウラはなんとか立ち上がり、最後の力を振り絞ってミサにこれまでに以上のパンチを放った

しかし、ミサはそのパンチをも殴り返した

「んが!!」

今度はゴウラがノーガード

その懐にミサは・・・

「必殺・・・!!」

思い切りパンチを放つ、しかしそのパンチは数々の残像を残しながらのパンチだった

ミサはすばやくパンチを放ち、何発もの突きを生んだ
そして・・・

「ハンマースラッシュ”!!!」

何発ものパンチをゴウラの懷に叩き込んだ

「う・・・ご・・・があ・・・は!!!!!!」

ゴウラは言葉が出せず、ミサは最後の一発を叩き込んだ

「グルガアアアアアア!!」

ゴウラはそのまま何メートルも吹っ飛び、建物の壁にたたきつけられた

そのまま地面に落下し、ぴくりとも動かなかった

「・・・勝った」

小さくつぶやくとミサはそのまま崩れ落ちた
あちこちが痛むがいまは勝利の喜びを感じたい・・・

「・・・勝ったよ・・・お父さん」

（よくやった！ かつこよかったぞ！ ミサ・・・）

どこからか父の声が聞こえた気がした

拳を空高くにかざし、ミサはそのまま眠るようにして気を失った

海の脅威

ウォル、リド、そしてマサキ

この三人も全身全霊を賭け戦っていた

マサキとリドは本気を出していたのにもかかわらず、まったくの互角で戦い続けるウォル

彼の表情にあせりや恐怖はまったくなく、はじめから軽い笑顔の表情を崩さなかった

「な、なんだ、こいつの余裕・・・」

リドはかすかだが恐れを抱いた

しかしマサキはそんなの気にせず攻撃を続ける

「ふはは・・・面白いよ・・・最高だ・・・“波乗りステップ”」

魔法を発動、そのまま流れるようなステップを踏む

「ふっ!!」

マサキは力いっぱい足を踏み切りジャンプした

そしてステップを踏みながら剣を構えるウォルの攻撃を難なくよけた

「さすがに一度やった技は見切っている、一度見ただけで攻撃をかわせるなんてすごい観察力と行動力だ・・・」

「その技にはリズムがありすぎだ、流れを読めば簡単によける」

「ほう・・・僕の技は自己流でね・・・初めて見た人は驚きでそんなこと考える暇はないはずだが」

「悪いけど初めて見るものばかりでもう驚いてはいられねえよ」

そういつてマサキはウォルに向かって駆け出し、剣を振りかざしたウォルも剣を振り切り、両者の剣がぶつかり合う

キンン！！！！

高らかな音を響かせ、つばぜり合いになり、どちらとも力技で押し出そうとしていた

「なかなか、見所のある人だとは思っていたけどね、まさかここまでとは・・・」

そういつてウォルは後ろに向かってジャンプし、マサキと距離をとる

「僕もそろそろ、本気で叩き潰さないといけないなあ・・・」

そういつてウォルは地面に向かって剣を突き刺した

すると、剣をさしたところを中心に魔方陣が現れたマサキの勘からして魔方陣が現れる魔法はとてつもなく強力な技だ、そのためか、魔力を練る時間が長いため、その間は時間がかかるのだろう

「大いなる海の力を・・・」

マサキは走り出し、剣を振り上げ攻撃に出ようとするが、距離はけっこうある

間に合うか・・・

「その力の一部をわれに与えたまえ・・・」

そう呪文を唱えた瞬間、魔方陣が青く光った
そして・・・

「“ブルースラッシャー”！！！！」

そう高らかに言った

その瞬間にマサキの足元に円状の水が浮き上がり、それはマサキの周りをとてつもない速さで回転しあがった、マサキは水に囲まれ、逃げ場を失い、どうするかと頭をよぎった瞬間・・・

カッ！

足元にもものすごい威力の水の粒が空高くに吹き荒れた、その粒に巻き込まれ、マサキはズシャズシャとあちこちを切り裂かれた、そしてその威力で上空に舞ったマサキにとどめをさすように、上にたまっていた水がマサキにたたきつかれた

「ぶごあ！！」

マサキは地面にたたきつけられ、その上あちこちを切られ、血がだらだら流れ始めた

痛みを我慢し、なんとか自力で立ち上がる
立ち上がったマサキを見て、驚きの表情をするウォル

「さすがだね・・・予想をはるかに超える行動をとるよね・・・」

立ち上がっただけ、はっきり言ってまったく動けない
足がこれ以上動かない、やべえなこれ・・・

「まあ、いいや、さっさと死んでくれるかな？」

そういつてウォルは走り出した、剣を向け、そのマサキの体めがけて剣を突き刺そうとした瞬間だった

横から巨大な斬撃が、ウォルに向かって飛んできた
それをウォルは軽く後ろに飛んでよけた

「・・・いまさら何をする気なの？リドくん」

「ありがとう、マサキ、お前のおかげで目が覚めたよ」

先ほどまで、地べたにはいつくばっていたリド

恐怖し、負けたことを思い出し、戦うことをあきらめていた瞬間に
マサキのあの勇敢な姿を見たリド

リドは鞘からぬいた状態の刀を構え、ウォルの前に立ちはだかる

「いくぞ・・・戦う準備はもうできた」

「弱い君に何ができる」

リドは軽く刀を二回振った
すると小さな斬撃が生まれ、ウォルに向かって飛んでいく
ウォルは大きく剣を振り、斬撃を碎いた

「こんな攻撃でなにができ・・・」

そういいかけるウォルの目の前には、とてつもないスピードで走り、
数十メートルある距離を一瞬で近づいた
そしてそのウォルに向かって大きく刀を振った、

「つく!!」

ぎりぎりのところで下にしゃがみ、攻撃をよけたが、リドは空中で
刀を振った勢いを利用し、そのままくるっ回ると、ウォルの顔面め
がけて思い切りけりを食らわせた

「がっ!!」

ウォルは後ろに倒れこみ、リドはそのまま地面に着地した

「な、なんだその力・・・」

口から血を流すウォル、リド突然の変わりように驚いていた

「これから、一切の感情をすてる・・・いくぞ」

リドは思い切り縦一線に刀を振り切った
すると大きな斬撃が生まれウォルを襲う、

「くそ!!」

ウォルは手をバツと広げると、分厚い水の壁を作った
しかし、その水の壁は斬撃が、すぱっと切り裂き、ウォルはよける
暇なく肩を切られた

「リ・・・リドってこんなに強かったのか？」

「ただ、恐怖を感じていただけだ、はじめにこいつらと戦って負けたのは初めてだったからな」

負けたことに恐怖を感じてたのか・・・

「一騎打ちといこうじゃねえか、・・・ウォル」

「まったく・・・面白い人たちばかりだなあ・・・」

そういうとウォルは後ろ斜めに剣を構えた
剣は水が渦巻き、かなりの威力がありそうだ

「この一発に賭けるよ・・・」

するとリドは、刀を鞘にキンッと音を立ててしまい、腰に刀をあてて、状態を前に向けた

静かな時間が流れた・・・

そして同時に

「「必殺」」

駆け出した

「ウオータースプリクト」！！！！」

ウォルが剣を思い切り振る

ガキーン！！！！

二人が重なった瞬間にそう大きな音が響き渡る

リドは一瞬刀を振り出して、攻撃した際にまた鞘にしまった、いわゆる居合い切りというやつだ
そしてウォルは振り切った刀を空高く上げていた

バキーン！！

ウォルの剣が砕け・・・胴体から血が噴出した
そしてその場でウォルは倒れ、リドは静かに言った

「一刀斬切り・・・」

リドの必殺技はウォルの武器と胴体を切り裂き、かなりの力ある技
だった

リドは俺の方に向き、にこっと笑った

この勝負、リドの勝利で終わったのだった

決戦後

リドがウォルを倒して数十分が経過していた

マサキは怪我の痛みが大分慣れてきて何とか動けるまでにはなった

「大丈夫か？」

リドが聞いてくる

「ああ、これぐらいならなんとか、てかお前あんなに強かったんだな・・・」

「あの時は3対1だったし、それに負けたことが怖くてな・・・」

トラウマというやつだろうか、もしかしたらこいつ本気を出しまくれば学園上位まで行きそうだな

「あ！ミサとレイは！？」

俺は残る敵二人をミサとレイがあいてしてくれてるのを思い出した

「ここにいるわよ」

そこにいたのはレイが戦った相手、確かソラといったか
ソラの足元にはミサとレイがぼろぼろに倒れていた

「ま・・・まさかお前!!」

マサキはソラをにらみつけた

「ま、まってまって! 私このレイって子に負けたの!」

「え・・・?」

「気絶して、目を覚ましたらこの子達が倒れてたのよ! どっちも体力と魔力切れ、まったく無茶な子達よ・・・」

ソラはあきれたような顔をして額を押さえた

「せめてお礼言ってほしいわ、回復魔法ですこしは楽にしてあげて
るのよ?」

見ると二人は怪我はしてるがもう傷は収まっているし、服の汚れや
擦り傷しかしていない

「そ、そうか・・・ありがとう」

「どういたしまして、久々に楽しかったわ」

「楽しかったって、お前こいつらの仲間だろ? こいつらは回復させ
ないのか?」

「もう魔力がほとんどないの、それにこいつらは仲間じゃなくてた
だつるんでただけ」

「つるんでた？」

「そう、私はいろんなチームに入り込んでるのよ・・・美しい空がみたいから・・・」

「は？」

なんか不可思議なことをいうソラ、その瞳はさびしげに見えた

「このチームは違うってわかったから、私はまた別のところに行くわ！」

「え？ああ。。。」

そういつてソラはステップを踏み、外へといった
その瞬間に、レイは目を開けた

「おお・・・おきてたのか？」

「う。うん・・・」

レイはなんか深刻な顔をしていた

「どうかしたか？」

「いや・・・あの人戦いでまったくいいほど本気を・・・
だしてなかった」

「は？」

「その・・・マサキはまだアレだからわからないかもだけど、あの魔力がとてつもなく大きすぎなの・・・多分、戦いはわざと気絶して終わらせてる感じがして・・・」

「な、なんだそれ？」

「それと回復魔法、私とミサは魔力がほとんどなかったのに、それを完全に回復させた・・・あんなの聞いたこともない回復魔法だよ」

「・・・」

ソラ・・・不思議すぎる女だった・・・

学園に戻った俺たちを待っていたのはとてつもなく大きな罰だった

「よう！何してきたんだ？」

「「「「・・・」」」」

魔法都市ランブドラまで戻ってきたマサキ、レイ、リド、ミサを待ち構えていたのは学園の入り口にまっていたかのような表情（とてつもなく切れた笑顔）のミツキ先生だった

その後3時間、俺たちはウォル戦のとき異常の恐怖を味わったのを言うまでもない

4日後

俺がこの世界に来て一週間がたった
さすがに現実の世界では麻衣が心配してるんだろ

そんなことを考えている俺、それを励ますようにレイはいつも大丈夫！と応援してくれていた

ウォル戦から次の日からの話だった
ある2つの話が生徒の間で噂となっていた

リドがおとなしくなった

あの戦いからリドはまじめに授業にでるようになったし、暴力的でもなくなった、まあそれは強いやつを探すためだったのだが・・・
簡単に言ってしまうと悪い噂がさっぱり消えたのだ
そして、その悪いところが消えたリドは、完全にいいリドなので、女子の間ではかなりの人気ある人となっていた・・・そしてもうひとつの噂・・・

教室の斜め右あたりにあるリドの席

その席でリドは静かに座っている
何を考えているかまったくわからない

結果、両親は家の地下に閉じ込められていたそうだ

食事は満足に与えられて折らず、やせ細っていたそうだがリドとの
再会で大いに喜んでたとか

そして、リドの家は壊滅状態なので、今はランブドラ西部に住んで
るらしい、幸いお金は無事だったのだ

まあ、家を失っても、今回は結果オーライなのだろう

静かに座るリドを見て・・・

「なんか遠い存在になっちゃったね、つい最近まで一緒に戦ってた
なんて思えないや」

ミサがさびしげにいう

あの戦いから、俺たちはリドとは接してない、あいつがこの先どう
するか、だ

ただ、力を貸してと頼まれた、お願いされたから俺は力を貸した

それだけの関係なのだろう・・・俺たちは

「ま、これから先はあいつ次第さ」

俺はそういつて、机にもたれかかった

すると、男女の集団が教室に入ってきた
人数は5人、チームかなにかか？
するとリドの方に向かい、こういつた

「たのむリドくん！僕たちの仲間になってくれ！」

リドが強いのはみんな知っているらしい
だから一人きりのリドをみんな仲間に誘っているとか言うのを昨日
聞いた

まあ実際目で見るのは初めてなんだがな・・・

「へえ・・・すごいね！リドって」

レイが笑顔でそういう、まあ、部活動入らないか！っていう勧誘み
たいなものだと思えばすごいと思う

リドは仲間の勧誘をすべて断ってるそうだが、ある理由があるから、
だとか

どんな理由なんだろう・・・やっぱ一匹狼とかそんなのかね

何かとわくわくして、その様子を見る

「どんな理由があらうとも！僕たちのチームに入ってくれ！」

教室のみんながその光景を見ている、こんな白昼堂々・・・リドって大変だな

「・・・悪いが、俺は誰にもこの力を貸さない・・・たとえどんな兵だろうともな」

「なんでそんな！納得のいく説明をしてくれ！」

「俺のこの力は・・・マサキのためだけに使うと決めている」

堂々と、そういった

「・・・は？」

教室の視線が今度はこちらに注目する

「ちょ、ちょっとまってリド！どういうことだ！！」

「俺はお前の強さ、勇敢な姿に惚れた・・・俺は決めたんだ、この力はマサキの役立つことに使うと！」

そういつてぐっと握り拳を作る

「いや！うれしいけどさ！もっと自分のためとかに使おうぜ！？」

「ふ、マサキにつくすことが俺のためだ・・・」

リドがにやりと笑っていった

「ちょ・・・ま、まてえええええー！！！」

あまり目立つなといわれたミツキ先生の言葉・・・すみません、守れそうにないです

もうひとつの噂

あの斬撃のリドが・・・笑うようになったという、
噂というよりは真実の話・・・

こうして、俺は4人目の仲間ができた・・・

とても怖い、とても強い・・・とても頼もしい仲間が一人

休日の学園（前書き）

いろんな方から感想をいただきましたW
ありがとうございます

気になる点やこうしたほうがいいという考えをいただいたため、参考
考にさせていただきました！本当にありがとうございます
これからもがんばって書いていくので読んでいただくとうれし
いです！

休日の学園

「・・・はあ」

俺はベッドの上に寝転んでテレビらしきものから流れる映像をボーンと見ていた

こっちの世界の番組は俺にとっては理解できない、何かと新しい武器や技、魔物の映像などが流れている

しかし画質とかはめっちゃくちゃきれいだな・・・本物みたいだよ・・・

・

時刻は朝の10時を過ぎたころ、俺はとてつもなく暇な時間をすごしていた

今日は学園がお休みの日らしい、なんでも8日に一日だけ休みがあるとか

休みの日はみんな武器の手入れとか、買い物とか・・・依頼とかをするってレイが言ってたな・・・

買い物するにもこの物はなにがあるとかわからんし・・・服とかのファッションとか戦闘服にも興味ないし・・・ということなので朝からベッドの上でごろごろとしていた

「・・・するとこないし、まだ学園のことあまり知らないから・・・散歩でもするか・・・」

そう独り言のようにつぶやいて、ベットから飛び降りた・・・

《学園西部》

ここはあまり見たことがないんだよ・・・何があるんだろ

見た感じはどこにでもありそうな民家って感じが・・・ってなんで学園内に民家があるんだよ・・・

よく見てみると・・・>リベドルンチーム<・・・？・・・ああ、もしかしてチームそれぞれの部屋？
部屋っていったほうがいいのかな・・・

そう考えると壮大だな・・・何件あるんだよこの民家・・・見た感じは100件以上は確実にある
学園・・・生徒数はかなりいるみたいだけど壮大過ぎだな・・・

《学園南部》

ここは武器屋かなにか？

さまざまな看板がたっておりカラフルな絵で書かれていたり、あるいは時代劇にでもでてきそうな風葬で書かれてあったり・・・見た感じこれもめっちゃあるんだ・・・

まあ、興味が無いわけでもないからすこし見ていくか・・・

きよろきよろとあたりを見回し、適当に店を選び入っていった

中にはさまざまなガラスケースがあり、中に不思議な色をしている石、または薬のようなもの
なんか怪しそうな店だな・・・

「ん？なんだ客か？」

店の奥からめがねをかけた男が現れた、とても体格がよく、眠そうな顔をしている、髪は長く後ろに縛っていてさらに無精ひげ・・・
なかなか渋い人だ

「あ、すみません・・・ちょっと入って見るぐらいだったけど・・・」

「んや、いいさ、ただでさえ客がすくねえんだ、好きなだけ見てっ
てくれ、何が好みだ？転送用エフィネアか？それとも、薬かい？」

「あ、いや・・・俺転校生で・・・こういうのよくわからなくて・・・
ははは」

俺はいろいろいわれて咄嗟に転校生ということに済ましてしまった、
転校生だからってこの世界の常識でありそうなこと知ってないのは
おかしいか・・・

「ああ・・・おめえがああな異世界の・・・？なるほどな、黒髪の子

顔のガキか」

「え！？し、知ってるの！？」

ま、まずいな・・・先生にばれないようにしろとか言われてるのに・

「あ？なんだそういうことか、気にするな、俺はこの店を経営してるほか、学園の先生もやってるんだ」

「え？そうなの？？」

その割にはあまり先生らしくないな・・・髪型といいこの店といい・

「ちょうどいい、まだよくわからねんだろ？簡単に道具について説明してやるよ」

そういうと先生となのる無精ひげはこちら側に近づき、ガラスケースからいろいろと取り出していった

・・・遠くにいたからアレだけど近くにくるとめっちゃくちやでかいな・・・190センチはあるんじゃないのか？

そう思っていると無精ひげはこちらに振り向きいった

「自己紹介がまだだったな、ナナ、クラウド・ナナだ、よろしくなマサキ」

「あ、はい、よろしくお願いします、ナナ先生」

「ナナでいい、先生って呼ばれるのはあまり好きじゃねえんだ」

なんか・・・変わってるんだな・・・この人

「まずはこの石から説明していく」

そういうナナの右手には赤い石が握られていた

「この石はエフィネアっていう代物でな、種類はいろいろあるが、使えるのは一度きりの物ばかりだ」

そういうと赤いエフィネア、青いエフィネア、さらには黄色とさまざまな色のエフィネアを取り出した

「代表的で、転送、これは登録された場所に飛ぶエフィネアだ、たとえばここから自分の部屋に行きたいというために、まだ何も登録していないエフィネアで場所を登録する、しかし登録のためにはその場所で登録を行わなければならない、簡単に言えば、目的地で一度石を登録しないとその場所にはいけないんだ」

「な、なるほど・・・」

「まあ、めずらしいものでは永遠に使えるものとか、さらには登録していないのにいける高価なエフィネアも数多くある」

「何かと便利なものがたくさんあるんだな・・・」

「ほかに、声を録音できるエフィネア、その場所を映し出す地図のエフィネア・・・まあ、どれも値段がさまざまでな、転送エフィネアだけでも2000ベルはする、買うやつは少ない」

「そうなのか・・・」

買ってみたいと思ってたけど・・・今の俺にはまだまだだな・・・

「そーいや、お前は目的はあるのか？この世界の目的が、ほとんどのやつは魔物討伐部隊に入りたがってるが・・・」

「ああ、俺は魔王討伐を目的に強くなろうかと・・・」

・・・しばらくの沈黙

しまった・・・先生相手だとさすがにばかげた話・・・

「ふ・・・」

「？」

「ふ・・・ぶあははははは！！そうかそうか！！魔王討伐かあ！！」

腹を抱えて盛大に笑い出したナナ・・・な、なんだよ・・・

「わ、悪いですか！！」

「何を魔王なんだ！え！？」

「そ、それは・・・俺がこの世界に来たとき、不思議と空中にいた穴に吸い込まれたんです、だからきつとこの世界で魔王が魔界の

入り口を作ったように・・・魔王の仕業なのかと・・・」

あの穴は俺のいた世界ではありえないものだった・・・でも、ここでは可能なことをする人物がいた

それが魔王・・・俺は正直、魔王と戦うのではなく、魔王と話がしたいだけなのだ・・・

そんなことを思っていると、笑い終えたナナがいう

「ふう・・・こんなに笑ったのは久々だ・・・気に入った!!」

そういつて勢いよく立ち上がると、部屋の奥を親指でさした

「こい! いいもん見せてやるよお・・・」

そういつてナナは部屋の奥へと歩き出した、俺はあわててその後を追う

部屋の入り口はカーテンで隠れており、先に入ったナナの次のすこし戸惑いを見せながらマサキは入った

中には見たこともない武器、そしてさまざまな顔写真の入った紙、たぶん・・・手配書?

そして巻物のようなものもいくつもあった

「ここは・・・?」

「ここは気に入ったやつにしか入れないようにしている、武器の種類、それにトーチの書類、さらにはさまざまな兵の魔額金書などが

ある」

「魔額金書？」

「ああ、知らないのか、強さを金で表したものだ、強いものと1億を有に超える」

「一億!？」

「んで、もし一億のやつがバトルかなんかで倒されたら、倒したやつがその額の3分の1もらえるシステムなんだ」

「す、すごいな・・・」

魅力的すぎないかこの学園・・・

「でもなんでこんなところが？」

「お前にはここにあるもん、自由にやる、金もなにもいらない」

「・・・え!？」

ここにあるもの明らかにレアものばかりだぞ!?!?!???

「俺は真顔で、さらには真剣に魔王を討伐するというやつは久々にみた・・・」

「そ、そうなんですか？」

「ああ、俺も昔はそういつていろんな修行に耐えてきた・・・」

「あの・・・ナナっていくつ？」

「今年で47になる、もうずいぶん衰えてしまった」

そういつてにかつと笑う

・・・あんたまだまだ現役だぞ

「ま、相談があったらいつでもうちにこい、世話してやる」

「あ、ありがとうございます・・・」

ここの先生たちって変わってるけど・・・いい人たちばかりだな
しばらくいろんな話を聞いて、俺は帰ろうと立ち上がった

この部屋に、超強力な剣の秘技があることを、俺はまだ知るよしもない・・・

休日の学園（後書き）

クラウス・ナナ

身長195センチ

無精ひげに後ろ髪をしばっている男でなかなか渋い
体格もよく実力はだれもしらない

赤い猫の噂

休日・・・ナナにあって次の日のこと
今日は学園がある日である・・・だが

時間ぎりぎりに教室に入ると生徒数は三分の一ほど・・・なにかあったのだろうか？

しばらくきよろきよろしてるとレイを見つけたので近づいていった

「なあ、レイ。今日って何かあったのか？」

「あ、マサキ。そっかあ・・・知らないんだね」

「？」

知らないってことは何かあるのだろうか

「休日の次の日は自由日なの、武器の手入れから依頼まで全部自分の身の回りのことをするんだよ」

「へえ・・・」

武器なんてトーチ以外持っていないし・・・依頼っていわれてもよくわかんないし・・・
今日もナナのところにいつてみようかな・・・

「ねえ？マサキ暇？」

「ん？ああ、まあ」

「それじゃあさ、いまから依頼もかねてある噂を調べない？」

「ある噂？」

「うん、最近学校でひそかに噂されるんだけどさ、ここから東のアダブダの森って言うところに赤い猫が出現するって噂」

「・・・赤い、猫？」

なんだろう、すごい気になる・・・赤い猫ってことは魔物かなにかだろうか？

「正体はなにかわかんないんだけど、多分精霊だと思うの」

「精霊・・・か」

まあ普通じゃなさそうだし、ありえそうな話だな

「もし精霊なら！仲間にしたいなって思ってるんだー！！」

レイは目をきらきらさせながら言った

「と、ところで依頼っていうのは？」

俺は話題をそらすためにいった、それに赤い猫は噂であって依頼はあるのだろう、そこも重要だ

「簡単だよ、ただアダブダの森にあるウロンっていう果物とってく

るだけだから」

「そうか、それは簡単だな」

依頼ってというのは魔物倒す以外にも本当にいろんなものがあるものだ

「それならさっそく行ってみよう!!」

レイが拳を上にかざした

「お、おう!」

すこし出遅れて俺も拳を上げた

数時間後

俺はレイの後をついてくようにあるいていた

「けっこう遠いものだな・・・アダブダの森って・・・」

「まあのにんびりいこうよ」

・
そういうレイは鼻歌で本当にのにんびりと歩いている、のんきだな・・・

ちなみここまでするのに魔物に出くわした回数3回
けっこう出くわす割には、こいつは緊張感ってやつがないな・・・

しばらくすると緑色をした果物を発見した

「これがウロン？」

なんか想像と違う気がする・・・おいしいのか？

「うん、とても甘くて果実たっぷり！」

そういつてレイはがしつと音を立てて一口食べた
するとおいしそうな表情をしたレイ、それを見て俺も一口

「・・・うまいな」

果物というよりはやわらかく、簡単に噛み千切れるし甘さもちょうどいいくらいだ

「はい！依頼品回収終了！それでは、噂の赤猫探しにいきますか！」

レイは包みに4個果物をいれるとそれを腰にまき、噂の解明に勤しむ

てかあんた依頼よりそっち重要なんだろ・・・

森からさらに東へ歩いて1時間

ちょうど太陽が天辺に昇ったところだ

てか・・・ちよくちよく思うが太陽があるってことはここは少なくとも地球の近くにあるんじゃないかこの星・・・

わからないことを適当に振りまけ、歩き続けた

「なあ、赤猫どころか魔物すらいなぞこのへん・・・」

森は静かで時折吹く風と空を飛んでいる小鳥の音しか聞こえない
ただの噂だから誰かの作り話っていうのもありえなくはない

「き、きつといえるんだけどな・・・それにここにはレベル4の魔物
もけっこういるって聞いたしなあ・・・」

半分あきらめかけたそのときだった
いきなり草むららがさがさ動き出した

「「!?!」」

俺とレイは咄嗟に構えた

赤猫か・・・それとも強力な魔物か・・・
すると・・・

「・・・ん？」

草むらからでてきたのは・・・男だった

年齢は俺たちと同じくらいだろうか、服装はジーンズのような質の
ズボンにフードのついた分厚い服

暑いつてほどではないが、寒いとも言いがたい時期にその格好はど
うかと・・・

「なんだ？こんなところで人に出くわすのは初めてだな」

男はそういうと俺たちに近づいてきた

赤猫かと思ったけど・・・髪は黒髪だし、第一人間だ、赤猫との共
通点なんてどこも・・・

そう思ったとき、男の目の色が赤色だと気づく・・・

「なんだい？こんなところで男女デートはあまりオススメができないかな」

俺たちを交互に見て男が言う

「で、でーとなんかじゃないです！！」

レイが全力で否定した、まあ本当デートじゃないけどなんか傷つくものだな

「あはは。ごめんごめん、まあ、ここは危険だから早く戻ったほうがいいよー」

そういつて男は周りを見渡す
魔物がいないか確かめたのだろうか

「せっかくだから自己紹介、しとこうかな。俺はアキっていうんだ、よろしく」

アキは軽く挨拶を済ませた、なんか人にはなれてる感じがする

「俺はマサキ、こっちがレイ、俺たちある噂が気になってね」

そういうよアキはピクッと何かに反応し。。

「ふうん、噂・・・ねえ」

そういつて考え事をする

なんか穏やかなしゃべり方だな、まるでホストみたいだ

「そうなんだ、それじゃあちよっとお願い、しようかな」

「？」

アキが妙な事をいいだした

「多分、噂というのは赤猫だろ？」

「あ、はいそうなんです」

レイが赤猫という言葉に反応した、アキも知ってるんだ。赤い猫の噂

「俺はよくこの辺を通るからねえ、赤猫がよく目撃されるという場所を知ってるんだ」

まさかの情報だ、それは噂が真実になる確立が高い

「もし、僕のお手伝いをしてくれたら、その場所を教えてあげるよ。」

そう赤猫は提案した、まあ悪い話ではない
俺はレイの顔をちら見した

「そ、それならお手伝い喜んでします！」

あっけなく提案を承諾した

「ありがとう。それじゃあさっそく詳しい話なんだけど、お願いっていうのは・・・」

すこし間があり、アキはにっこり笑うと

「レベル5、ギラティンの討伐を手伝ってくれないかな？」

そういった、レベル5、つまりはレベル4だったギガントブルムのひとつ上のレベル
俺とレイがやつとで倒した魔物だ、それ以上の魔物をアキは相手にしようとしている

「ぎ、ギラティン！？この辺にいるの！！！？？」

レイはびっくりしたようにアキに問いかけた

「いるよ。一匹、半年も前にこの辺をうろちよろしてるんだあ」

そういいながらまたあたりを見回す

このアキという男・・・いろいろ不思議なやつだ、話し方といい服装といい

第一、こんなところで男一人、レベル5の魔物を倒そうというのもおかしい話だ

なにか因縁でもあるんだろうか

強さもわからない、この男に、今は協力するほかない

アキを合わせて3人で行動をとることになった
まあ、人数が多いほうが討伐には向いてるだろう

「なあ？そのギラティンってのは？」

俺は気になり聞いた、そりゃ敵のことは知っておかないと痛い目に
あいそうだからな

「ギラティンっていうのは、硬いうろこ、大きな翼をもつ魔物だよ、
よつんばで頑丈な牙のある凶暴な魔物なの」

「へえ・・・詳しいんだね？そこまで知っているなんて、心強いな
あ」

「こう見えても勉強は人一倍がんばってるんだからね！」

レイは胸をはり、自慢げにいつてくる

「そういえば、なんでそのギラティンとかいうのを探してるんだ？」

「・・・ただの、敵討ちさ」

そうボソツと言った瞬間だった

いきなりフツツと視界が薄暗くなった、何かが影になっている

俺はとっさに上を向いた

とても大きい、魔物がこちらに降りてきた、いや・・・落ちてきたのだ

俺は咄嗟にレイを横に押して自分は後ろにとんだ

アキの方を見ると、すばやく後ろに動き、なんとかギラティンに押しつぶされることはなかった

見ると、想像をはるかに超えていた

よつんばの魔物、色は黒、顔は豹に似ている。頑丈そうな牙が3本生えている、上に二本、下に一本。もう一本は砕けている、どうやら折れてなくなったようだ

そしてギラティンは俺たちをにらむと・・・

「ゴオオオオオオオオオオオ！！！！」

そう高らかに叫んだ

レイは杖をすばやく出し構えた、俺もそれに続くようにトーチを発動、黒剣を取り出した

「へえ、トーチ使いなんだ。めずらしいね？」

アキは大して驚いてない、むしろニコニコさわやかな笑顔を振りまいている

「アキの武器は？」

アキの両手はなににもっていない

「俺の武器は・・・俺自身さ」

そういうと、アキの髪が突然真っ赤に染まった。するとアキの頭からぴよこんと耳が生え、そしてさらには服とズボンの間からは赤い尻尾のようなものまで生えた

「いいことをひとつ・・・教えてあげるよ」

そういつてアキは、ギラティンの前に立ちあがると・・・

「俺が、赤猫だ」

そういつた瞬間、赤猫と名乗るアキの手から炎が浮かび上がった

赤い猫の噂（後書き）

赤猫のアキ

身長172センチ

穏やかな性格で相手を翻弄させることもあるという
赤猫となのが詳しくは本編で

レベル5

アキが赤猫だった

尻尾と耳が生えてしまった時点でもう人間とは呼べないが外見はそれをのぞくと普通の人間

いったいなにがどうなってるんだ？

なんて考えていると、赤猫が手に炎を出しながらギラティンに向かって走り出した

「うおおおおお！！」

アキがギラティンに炎の爪でひっかいた、しかしギラティンはびくともしない

ギラティンは思い切り腕を振るって赤猫はそれにあたり吹っ飛ばされた

「がはあ！！」

吹っ飛ばされたアキは木に直撃し、その場に倒れこんだ

そして倒れたアキにのそのそとギラティンは近づいていく・・・

「やばい！！」

マサキも走り出して、隙だらけのギラティンの背中を剣で4回叩き切った

しかし、ガキーン！という音をだしながら剣がはじかれ、マサキは大きな翼にはたかれて吹っ飛んだ

地面に背中をこすりながら転げ落ちる

「・・・!! ってえ・・・硬いなあのうろこ・・・」

ギラティンは全身硬いうろこに覆われているため、まったく歯が立たない

「“バースト”!!」

ボガン!!

レイも術で何かと攻撃はしている、効いてるようには見えるのだが、すぐ切り替えして攻撃を再開してくる

ギラティンの目線がレイに向いたとき、アキは目を鋭く尖らせ、足に炎をまとい、そのままギラティンの顔面に蹴りを放った

「ゴガ!？」

今度の攻撃はひるんだ、アキの蹴りがかなり強烈だったのだろう
休む暇も与えずマサキは剣を振った

「“魔人剣”!!」

黒い斬撃をだしてギラティンに攻撃をする

「ゴアアアア!!」

ジャギン! と音をたて攻撃が直撃しギラティンが悲鳴をあげる

そしてマサキとアキは同時に攻撃をしかけた
するとギラティンは両手両足を地面につかせ、ジリッと地面をこす
ると・・・

グワァン!!!!

と土煙を上げながら回転した

マサキとアキはその回転に吹き飛ばされて地面に倒れこんだ

「マサキ!! アキ!!」

レイが二人を名前を叫ぶ

その声にギラティンが反応し、レイをにらむ

「…………ひい!」

レイはその威圧におびえた

ギラティンは口を大きく開き、その口から光の粒があつまりはじめた
その光が徐々に大きくなり、かなりの大きさになった

「ぶ……ブレス……!?!」

レイは恐怖で動けなくなっていた

「レイ!!! 逃げろ!!!!!!」

マサキは立ち上がって必死に叫んだ、走ろうとしたが足を捻ったの
か、うまく動かせない

立ち上がってはいのに、片足を引きずりながらしか動かせない

そして……ブレスが放たれた

そのまま一直線に、ブレスの玉がレイに向かって飛んでいく

「レイレイレイレイレイ！！！！！！！！！！」

のどが裂けそうなくらい叫んだ

するとアキが恐ろしいスピードで走り出した

足は赤い毛で覆われている、足だけが赤い毛を生やしていた
アレが・・・赤い猫

そしてアキはぎりぎりのところでレイを押し飛ばした

レイは押されるがまま、地面に転んだ・・・

そして・・・アキに・・・ブレスが直撃した

ものすごい爆発を引き起こし、アキは血だらけで空中に舞った

そのまま地面にたたきつけられ、アキは動かなかった

「・・・んのやろおおおお！！！！！！」

マサキは剣を突くようにたたてた

すると剣の周りに黒い渦が舞い、威力がました

そのまま威力を最大となった剣で、ギラティンを突き刺した
うろこはヒビが入り、突き刺さった傷から血が噴出した

「ガアアアアア！！！！！！」

ギラティンは痛みで暴れだした、マサキは突き刺さった剣が抜け吹

っ飛んだ

そしてギラティンが翼を広げ・・・

そのまま・・・上空へ飛びたった

「はぁ・・・はぁ・・・」

・・・逃げた・・・のか？

ギラティンがどこかにいってしまっ、戦った場所はめっちゃや
だった

そして何より・・・

「アキ！！」

血だらけで倒れているアキだ、ブレスという技が直撃したんだ、死
ぬかもしれない

「“フイーレル”！！」

レイが両手をアキに向け唱えた

するとアキは透明な青いドーム覆われた、ドームの中にいたアキの
傷が癒えていく

回復魔法なのだろう・・・

「ん・・・く・・・」

かすかにアキが動いた、見る限り、呼吸にも問題なさそうだ

それをしばらく眺めていると、レイが方膝をつき、青いドームが消えた

「だ、大丈夫か？」

「う、うん。魔力を使いすぎただけ・・・それにしても・・・」

レイはアキを見つめた

「なんか不思議な感じ、身体だけしか回復できないなんて・・・」

「どういう意味だ？」

「普通はね、魔力もちよつとは回復するんだけど、なんかアキの魔力が普通と違う、やっぱり人じゃないのかな？」

「・・・人間」

その言葉が妙に難しく感じてしまう

そう思っていると、額になにか冷たいものがあたった

水・・・いや、雨か

空を見上げると黒い雨雲が近づいていた、いずれ本降りになるだろう

マサキはアキを担いで走り出した、それについていくレイ

そしてしばらくして、雨は激しく降り注いだ

数分後、崖の壁に見つけた小さな洞窟でなんとか雨をしのいだ
レイの魔法で火をだし、服を乾かしていた

眠っているアキを見ると、普通の人間とは思えない、いった
い何者なのだろうか

火がゆらゆらゆれているのを見てることしかできなかった

赤猫の過去

洞窟に入ってから1時間がたった

雨はやむ様子もなく降り続けていた

焚き火となる木は雨にぬれてしまったため火が通らず使い物にならない

今ある最後のぬれてない木を、焚き火の中に放り込んだ
火は弱くなっており、いまにも消えそうになっている、一本放り込んだところでどうにもならないか

「・・・ん・・・痛っ!!」

そのとき赤猫が目を覚ました、その瞬間傷が痛んだのか、傷口を手で押さえ込んだ

「だ、大丈夫か!？」

マサキは立ち上がり、アキの下まで駆け寄った

「あ、ああ・・・それよりギラティンは!？」

「アキがブレスでやられてすぐに飛んで逃げたよ」

そういうとアキは力強く洞窟の壁を殴った

「チクシヨウ!!」

アキはこれまで以上の声をあげ、悔やんだ

「アキ！落ち着け！！」

「また・・・まただ・・・」

アキは齒を噛み締め、ぽろぽろと涙を流した

「何があっただ？」

はじめからすこし思っていた、アキがギラティンに対する対抗心は尋常じゃない

何があるか気にはなる

問いかけにアキは反応しない、いつの間にか火は消えている、何分たっただろうか

しばらくするとアキの重い口がゆっくりと開いた

「・・・9ヶ月前におきた出来事だ」

話はさかのぼる

残酷で悲惨な過去へと

1年前に、ある召還魔法を得意とする少女がいた
名前はマナ、彼女はみんなが認める精霊使いだった

精霊を愛し、精霊に愛される、とても心優しい少女だった

しかし、その少女になつかない精霊が一人いた
それが赤猫のアキ、本名は赤猫のロイ

彼は人間と精霊にの間に生まれたので、すこし変わっており、人間と精霊の二つの魔力を持っている

生まれつき、彼は誰にもなつこうとはしてなかったが、マナにだけすこし心を開いていた

「もう！勝手に出ないでよロイ！」

「僕は自分の魔力ででてるんだ、主人には迷惑かけてない」

「そうじゃなくて！勝手にでてこられると困るの！」

ロイは自分の魔力で外にできる、それは半人間であるため、人間の魔力を使える、そのため自由に召還ができる、勝手にどこか行ってしまうロイにマナは手をやいていた

「なんだい？そんなに僕にかまってほしいのかい、マナ・・・」

そういうとロイはマナに顔を近づけつぶやくようにいった

「バカじゃないの！？戦力が減るから困るっていつてるの！！」

マナはかすかに顔を赤らめながらもいった

ロイはけっこうなイケメンなので、これまでにさまざまな女性と契約をした

しかしそのほとんどが、人間としてロイに魅力を持ったものばかり

しかしマナは違った

マナはロイを精霊としてみて、その強さを認め、契約をした

ロイもそんなマナに、極力は協力した

しかし、このようにたまに勝手に出てどこかに行ってしまうこともある

契約して一ヶ月のこと

「はぁ・・・」

「どうしたの？ また変なことで悩んでるんでしょ・・・？」

「いや、ただ俺ってロイって名前ジャン？ なんか不愉快なんだよな・・・」

「名前なんかで文句いわない！」

精霊の名前は生まれたときに知らぬ間に自分で知っていることそれはどんな科学者が求めてもまったくわからないことだった噂だと神が決めているとかいないとか・・・

「はぁ・・・じゃあ炎を操る猫、ファイヤーキャットだからアキって名前でもいいんじゃない？」

「アキ？ なんかださくねえ？」

ゴン！と強めにロイの頭をたたいた

「文句言うな！そうねえ・・・精霊としての名前はアキ、人間ではロイ。それでいいでしょ」

「・・・ああ、ありがとう」

正直にいうとアキはそれがうれしかった
人間じゃなくまた精霊として認められた感じがして・・・

そして二人は絆を深め、3ヶ月が過ぎたころだった

いつものように依頼をこなそうと森を歩くマナ、すると小さな光の粒が集まり、その場にアキが登場した。

「もう・・・また勝手にでてきて・・・」

「あはは！いいだろ別に。ちょっと近く散歩してくるだけさ」

「・・・はあ・・・すぐ帰ってきてよね、戦力減るのは得策じゃないんだから」

「この辺の魔物なら、お前のレベルでも勝てない相手ではないだろ？」

「そ、そうだけど！万が一があるじゃない！」

「はいはい、ご主人様・・・そんなじゃあ後でな！」

・・・このような楽しい会話が、これで最後だった
二人が別れた場所、そこはアダブダの森だった

数分後

「さてつとお・・・」

軽く散歩して、日向ごっこをしたアキは、マナのところに帰ろうと
歩き出した

するとまもなくして、太い木がへし折られてるのが見つかった

（・・・なにか事故でも？）

その瞬間、ある言葉が頭をよぎる

「戦力減るのは得策じゃないんだから」

不意にマナの顔が頭をよぎる

・・・たのむ、冗談であってほしい

アキは足を猫方にして走りだした

猫の脚力はとんでもなく強く、すばやく走る事ができる

アキは道をどんどん進んでいった

進むにつれ、木や地面の荒れ具合が激しくなっている

誰かが逃げて・・・ここまで・・・？

そして・・・衝撃の光景を目の当たりにした

大きな広場らしき場所にでたアキ

そこに大きなよつんばの銀の魔物がいた
大きな翼、尻尾がある

そしてそいつがこちらに振り向いたとき・・・

やつが、マナに噛み付いていた

長く丈夫そうな牙で、その華奢な体に噛み付き、腹から背中まで貫通している

その魔物の口から血がたれている
あれは・・・マナの血

そしてそれは、地面のあちこちにたれていた・・・

「が・・・がああああああああ！！！！！！！」

アキは走り出した

足に炎をまとい、魔物の首に蹴りをいれた

しかし、まったく効いてないようで、首をかるくふりはじかれた

体制をたて直し、地面に足がついた瞬間に、全力をだしてその魔物の牙に蹴りをいれた

その牙とは・・・マナの体を貫いている牙

パキィ！！

音をたて、牙は折れた

そしてマナは地面にトンッと落ち、魔物は牙が折れた痛みに暴れ、逃げ出した

「マナ・・・なあ・・・マナ・・・」

涙があふれた、目の前に血だらけの主人

顔は真っ白で、まるでしんでるようだった

「・・・あ・・・き・・・?」

かすかに口が動いた

「ま、マナ!! 生きてるのか!? よかった!! い、いま回復魔法使えるやつ連れてくるから!!」

そういつて駆け出そうとしたが、その足をマナがつかみとめた

「う、ううん・・・いい・・・の。なんだか・・・わかるんだ、自分が死ぬって・・・」

「ふ、ふざけた冗談よせ!! まだ間に合う! 絶対・・・間に合うからさ・・・」

アキの声は震えていた、マナのおなかから血が次々とあふれ出ているすでに緑の地面は真っ赤に染まっていた

「・・・アキ・・・最後に・・・顔みれて・・・よかった・・・あは。やっぱり私一人じゃ何の力もないね・・・」

「そんなことねえ! 俺をこんなにも惚れさせただろうが! その力あれば十分だから!!」

「あはは・・・相変わらず冗談。。。うまい・・・ね」

「冗談じゃない! 本気だ!! お前がいてくれたから・・・俺は・・・前向きに・・・」

次々と頭の中にマナとの記憶がよぎった

マナとであったこと

マナと一緒に戦ったこと

マナと笑ったこと

からかったことも、まじめに戦ったことも・・・

この名前をつけてくれたことも・・・

「お前がいたから！今の俺がいるんだよ！！」

「ありがと・・・う、最後に・・・アキを・・・精霊として愛せてよかった・・・」

「ふぎ・・・けんなあよお・・・」

「・・・アキ、大好き」

その言葉を最後に、マナは瞳を閉じた

マナは動かない、しゃべらない、目覚めない・・・死んだ・・・

（どっかに行かれると困るの！）

（戦力が減るのは得策じゃない）
（勝手にでないでよ！）

俺が勝手な行動したから・・・

マナが死んだ

俺のせいで・・・俺が・・・マナを・・・殺し・・・たんだ・・・

「うあああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

マナの顔は傷ひとつなく、その美しい顔は、死んでると思えない
死に顔だった

雨上がりの再決戦

アキの過去

それはとてつもなく残酷なもので、聞いているマサキとレイの心も痛んだ

「俺はその後、調べに調べ・・・あいつがギラティンだと知った、そしてマナの仇をとろうと思った」

「そっか・・・」

しかしアキにはすこし変なところがある・・・もしかして

「アキ、俺の予想なんだが・・・マナってやつはレイに似てたんじゃないか？」

「・・・!!」

「ちょ、ちよつとマサキ!なんでそんなこといえるのよ!!」

レイが戸惑い聞いた

「さっきの話ではアキは人を苦手になっている、だけど俺たちに協力してくれといったりした・・・なによりレイを助けたりもした」

「そ、そんなのあたりまえじゃあ・・・」

「その通りだよ」

レイが言いかけていたことをふさぐようにアキが言った

「なかなか鋭いね・・・はじめてあったとき、マナが生き返ったのかと思った、見た目も、声も、性格も・・・マナにそっくりなんだ、だから・・・思わずね」

「・・・そうなんだ」

レイは悲しそうな顔をした

「ま、俺が勝手にそう感じてるだけだ・・・」

そういうとアキは立ち上がって、洞窟から出ようとした
雨は小降りになっていたがまだやんではない

「おい！」

「大丈夫だ、精霊は回復が早い、それに・・・早く倒さないと・・・」

そう小さくいうとアキは洞窟を出た

マサキとレイはあわててそれについていった

「あてはあるのか？」

「においだ、まだすこししか感じないが、かすかにこの辺におう」

やはり猫か・・・？鼻が利くのかな

「今度こそ倒すんだ・・・ギリティンを・・・」

そういうと拳を握り、すこしだけ火が出てきた

「ここだ」

しばらく歩いて、広場でとまった

そこにはなにもない、ただ緑の雑草が生えているだけだった

「・・・？」

あたりを見回してもギリティンの姿が見えない・・・いや・・・違う！
広場の地面に影が動いてるのが見えた

マサキは空を見上げた

「ガアアアアアア！……！」

ギリティンが飛んでいる

大きな翼を広げ、空中をくると飛んでいる
するとマサキたちを見つけたのか、地面に向かって急降下した

地面についた瞬間土煙が起こる・・・

その煙が晴れた瞬間牙が一本折れているギリティンが再びこちらを
にらんでいた

「いくぞ・・・」

アキは手をネコ型にした、すると赤い毛が生え、炎がでた

そしてそのままギリティンに突っ込み、顔をひっかいた

マサキはそれに続き、トーチを発動した

黒い剣で何度も堅いうろこをたたききった

レイは魔法を唱えている

「アキ！さっき俺がこいつの背中に剣をぶっ刺したんだ、そしたら
うろこが壊れた！そこなら攻撃が効くかもしれない！」

「あのうろこ壊したのか！？」

弱点のことよりうろこ壊したことにびっくりしている

「とりあえずわかった！やってみる！」

するとアキは高くジャンプしてギラティンの真上をとった
ギラティンは上を向きアキをにらんでるが・・・

「魔人剣”！！”」

「バースト”！！”」

ドオン！！ジャギン！！

「グガアアアアアア！！！！」

マサキとレイの攻撃で再びこちらをにらんだ、

そして真上にいたアキが全身に炎をともし、思い切り背中割れた
うろこに攻撃を加えた

「グ・・・ガカカカアアアアアア！！！！！！！！！！」

とてつもなく効いている

ギラティンは暴れだし、アキを吹き飛ばした

「うおおおおおお！！」

マサキはすかさず飛び出し、黒剣で何度もたたききつた
しかしガキッとすべてはじかれてしまっている
その隙にレイが魔法を発動した

「光の剣を・・・敵を貫け！ “プロードソード” ！！！」

そういうと上空から光の剣が現れた

その剣はギラティンの背中に突き刺さった

「ガアアアアアア！！！」

これは大ダメージだ

「いつの間にそんな技を・・・」

「がんばって中級の術式魔法覚えたんだから！！！」

そういつてるが額には汗がたまっている、魔力をかなり使うようだ

マサキも負けじと剣の先を相手に向け・・・

「“闇突き” ！！！」

ギラティンに突きを放つ、突きは黒い渦が現れ威力を増す、マサキの新しい技だ

その突きはギラティンの右首あたりに刺さった

「ガアアアアアアア！！！」

ギラティンが痛がり、爪でマサキを吹っ飛ばした

「ぐはあ！！！」

わき腹に食らったらしくずきずき痛む、骨が折れたかも・・・

そのとき、猫が炎を激しくだした

ギラティンがアキをにらむ

「これが半年かけてやっとの思いでできた技・・・」

すると激しく燃えた炎はふっと消えると・・・
アキの口から威力のある炎が飛び出した

「ファイヤーブレス”！！！！”」

炎は勢いよくギラティンに直撃した

ギラティンの全身のうろこにヒビが入ると・・・

ギラティンはポリゴンとなって消えた

静かな広場、風の音が聞こえる

「アキ!!」

マサキは思わず叫んだ、倒したのだ、あのギラティンを

しかしアキの様子がおかしい、

髪が黒くなり、その場に倒れた

なぜかアキの体からも、光の粒、ポリゴンが少しずつ出ていたのだ・

過去を乗り越えて

アキが元にもどり、ポリゴンの光が体からきらきらと出てきている
普通の人間にはありえない光景だ

「な、なあ！！レイ！なんだよこれ！！」

「た、たぶん魔力が切れたから・・・」

そういつてレイは言葉を止めた

「ま、魔力がなくなるとどうなるんだ！？」

「に、人間だと動けなくなったり、体に大きな負担がかかる程度だけど・・・」

「だ、だけど・・・？」

するとレイは声を震えさせながらこういった

「・・・精霊が自身の魔力を使い果たすと・・・ポリゴンになって消える」

・・・消える

つまりアキはさっきの技ですべての魔力を使い切ったようだ
・・・アキはポリゴンの光が現れ消えるたび、どんどんアキの体がうすく透けていった

「おい！なんか方法は！？」

「・・・主人の下にまた戻って時間さえたてば大丈夫・・・でも」

「・・・アキには主人がいない、つまり・・・いままでずっと魔力が回復できていなかったのか」

アキが急いで仇をうとうとしていた理由がわかった

「・・・なんだ、俺消えるのか」

アキがうつすらと目を開けていった

「・・・おい！アキ！！」

「よかった・・・仇討てて・・・消えて・・・マナのあとを・・・追えて」

「ふざけんな！お前が死んでマナが喜ぶと思うのか！？」

何も思いつかず、必死に消えないよう説得する
しかしうまい言葉が思いつかない

「マナを殺したのは俺だ・・・マナの仇を討って死ねるなら・・・」
言葉に力がこもっていない

「魔力を回復する魔法とかは！？」

「人間のならあるけど・・・それに私は魔力の回復魔法覚えてない

し……」

「……どうする」

悩みに悩んでいるとレイがアキの下まで歩いていった

「……赤猫のアキ、私の召還精霊として契約して」

そういった

契約、つまりレイの精霊となれば魔力が回復し、アキは生きれる

「……契約って？」

そう聞くとレイが手を伸ばし、手のひらを開いた
するとそこから丸い魔方陣がでた

「この魔方陣に精霊が手を置けば……契約成立」

「……アキ！おいてくれ！！」

「……」

アキは黙ってその魔方陣を見つめた

「お願い、手を……置いて」

「……」

「……あなたが人を嫌おうが、暴れようが何しようが……私は
精霊のあなたの力がほしい」

「・・・・・・・・あ」

「・・・・・・・・私に力を貸して」

「・・・・・・・・あ・・・・・・・・あ・・・・・・・・ああ」

アキがぽろぽろと涙を流した

「・・・・・・・・は、はは。本当に、マナにそっくりだ」

「あなたの力を貸してほしい！お願い！あなたの・・・・・・・・精霊の力がほしい！」

初めて精霊として認めたマナ・・・・・・・・

俺の力・・・・・・・・

今まで、いろんなやつにバカにされ、遊ばれ、俺もいい加減になっただけど、それを間違いだといい、正しいことを教えてくれたマナ・・・・・・・・

バカだね、アキは

私が死んだから、自分も死ぬって・・・

自分が死にそうなせいか・・・マナの声が聞こえた

ありがとう、仇を討ってくれて・・・

ありがとう、私をずっと思ってくれて・・・

ありがとう・・・私の精霊でいてくれて・・・

もう、大丈夫・・・だよ

気がつけば、アキは手を伸ばしていた

もし、わがままいっていいのなら

俺は・・・

魔方阵に手を伸ばし、おいたアキは、真剣な顔で言った

「・・・赤猫のロイ・・・もとい、アキ・・・あなた様を新たな主人とし、・・・この力、ささげます」

するとどんどん薄くなったアキの体は・・・消えてしまった

「・・・消えた・・・？」

「ううん、間に合った・・・私の新たな精霊として、いま魔力を回復してるよ」

「・・・よかった」

安心した・・・まさか赤猫の噂を追及しにきただけなのがこんな盛大になるなんて・・・

「さて、帰ろうか！」

レイは笑顔を見せそうだった

「そういえばまだ依頼途中だったな・・・」

「・・・あ」

「どうした？」

「・・・果物入れた包みどこかに落とした・・・」

こうして再び果物を探して、学園に戻ったマサキたちだった

次の日のことだった

「んもう！！勝手に出てこないでよアキ！！」

「何を言ってるのさ、せっかくのお昼休み、日向に当たりたいものさ」

お昼の食事中、アキが急にでてきた
そうか・・・自由に出入りできるんだな・・・

「なあ、ここ以外にどっか空間とか、あるのか？」

「ん？ああ、精霊ってのは契約すると一枚のカードになるんだ、そのカードの中には・・・ここではいえないいろんなものが・・・」

「うわ。気になる」

「まあ、俺はそこよりこのほうが好きなんだけどねえ・・・」

「日向？」

「うん、それもそうだし・・・レイの美しい顔も見たいからねえ・・・」

「はあ！？／＼バカじゃないの！！！」

顔を赤らめながらもレイは突っ込んだ

「やっぱり・・・とてもそっくり」

アキが小声でそんなことをいった

レイがアキにプレゼントをあげたらしい
鈴のついた首輪

「まるで、ペットだなあ・・・」

マサキはその風景をみて、そう口にだしていた

・・・ある意味では、また変わった仲間が増えたできごとだった

天才少女

アキがレイの精霊となって三日目

たまにアキがレイをからかっているのを目にする
そのたびレイは顔を赤らめムキになる

なんか、お似合いのパートナーって感じだな

今日は実習の日

学校みんなが己の力を鍛えようとさまざまな技を練習したり、あ
るところでは互いに戦いを挑んで先生監視下でバトルを行っている

レイは。。。

「アキとお互いの魔力の共同を深くするために依頼いつてくる！」

といって学園外にいつてしまった

ミサは。。。

「今日は買い物に行こうと思ってるんだ」

といって町の方に向いてしまった

・・・一人か

この世界に来て、一人でいたことはあまりなかったからな・・・
こんなときに何をすればいいのかわからない

ギリティン戦のとき、新たな技を作ったのはいいが、まだまだ実力不足

これからギリティン並のやつを一人で相手にするととなると、まったく勝てる気がしないからな

ほかにもいろいろな技を覚えたいな・・・

そう考えながら学園の庭をうろうろしていると・・・

「ん？何しているんだい、こんなところで」

一人の男性に話をかけられた
めがねをかけていて、見た感じは普通としかいえない
優しそうな表情をしていて、ほんわかとした感じの人だ

「えっと・・・新しい技が思いつかずうろうろしてました」

そういうと男性は軽く笑った

「あはは。それは大変だね」

「あの・・・あなたは？」

男性は学生ではない、大人だ、多分教師だろうか・・・

「ああ、悪かったね、僕はエデ・グランティス。一応教師なんだけど・・・気軽にエデさんと呼んでくれていいよ」

エデと名乗る教師は再びにつこりわらうと話をもどした

「それで・・・技を覚えたいんだったね。それならいい場所があるよ。ついておいで」

そういつて手招きをしてきたエデさん
俺はその人についていった

あるひとつの棟に入り、階段を上り、さまざまな道を通ったあと、
ひとつの扉の前で立ち止まった
エデさんは扉を開けて中に入っていた、それに続くように俺も入っていた

中はたくさんの本があった
図書室だろうか・・・？

「ここにはあまり人がこなくてね。好きなようにつかってよ」

一冊取り出して適当にページを開いた
幸い日本語で書かれていたので読めるのだが、内容が理解できない・
・

「君は・・・そっか、あの異世界の少年・・・」

「あ、はい・・・」

エデさんが俺の顔をみて何かを思い出したみたいだ

「そっかぁ・・・それなら・・・」

そういうとエデさんは本棚の間をうろちよろして、何冊かの本を取り出した

「これがオススメだよ、いろいろとわかるからさ」

見るとこの世界の魔力、力、武器、基礎などが書かれていた

「ありがとうございます!」

「いえいえ。それと武器の技に関しては向こうの本棚にあるから。それじゃあね」

そういう残してエデ先生は扉をあけ去っていった

一人残った俺・・・

「・・・よし!!」

そう言葉にして本を読み始めた

何分たっただろうか

窓を見ると昼前だったのがもう日が落ち始めるときだった
けっこう熱心に読んでいたな・・・

(あとは部屋で読むか・・・)

俺は本を抱えて扉を開けて外にしようとした
でようとした・・・が

「・・・迷った」

ここにくるまでけっこう複雑な道通ってきたから・・・

あちこち行ったがどこがどこだかわからなくなり、空は真っ赤から
薄暗くなってきた

（とりあえず適当にドア開けてみようかな・・・）

これまでにエデさん以外で人にあっていないから誰もいないはずだ・
・・・どこかにつながる通路があるかもしれない

俺は周りを見渡した

するとひとつだけ、大きい扉を見つけた

俺はそこを空けてみると

「・・・」

そこはなんか研究する場所みたいだ

中に入ると薬のようなにおいがし、さまざまな薬品、さらに妙な機
械があるのを見つけた

それを眺めていると・・・

「・・・誰？」

後ろから人の声がした

「うわ!？」

俺は咄嗟に後ろをみた

そこには女の子がいた

緑色の髪をしていて、ぼさぼさだった、表情は何を考えているかま
ったくわからない

上は妙な模様の入った服、そして下はスカート

そして右手には・・・拳銃

拳銃!？

「ちょ、ちょっとまで!俺は迷ってここに来て・・・」

「・・・?」

「えっと・・・拳銃」

「・・・ああ、これは私の武器だから、気にしないで」

「・・・いやいや、そういわれても

「・・・えっと。ここは?」

「・・・私の研究所」

「研究所?」

聞き返すと少女はこくん、とうなずいた

「そっか・・・」

それよりもこの子が現れて妙なおいがする・・・なんだろう？

「・・・失礼だけど、君お風呂とか入ってる？」

髪はぼさぼさ出し、服も汚れやしわだらけ、明らかにおかしい

「・・・」

彼女は黙ったまま

「・・・入ってる？」

もう一度聞くと・・・

「・・・（ふるふる）」

首を振った

・・・マジかよ

「こ、ここに風呂はないのか!？」

「ない」

「ないって・・・」

なんて不潔な・・・

そう思っていると彼女は持ってた拳銃風を机に置くと何かの準備を始めた

「・・・どこか行くのか？」

「・・・ガキラの油取りに行く」

「ガキラ？」

「・・・この近くの森にいる魔物」

そういうと彼女は物置らしきものの奥からごつい拳銃を取り出した

「さて！もう夜になるし明日にしろ、そしてお風呂に入れ」

「いやだ、油取りに行く、お風呂入らない」

「バカなことをいうな・・・」

彼女は自分の身長ぐらいありそうなライフル銃を担ぎあげると、そのまま歩き出した

「・・・私にはかまわなくてもいい」

「いやだ」

俺はきっぱり断った

女の子は驚いたような顔をした

「・・・なんで？」

「なんでもいいだろ・・・とりあえず外まで案内して、そして俺の部屋でいいから風呂はいれ」

「・・・明日にしたらいろいろめんどくさい」

「じゃあ俺が手伝ってやる。その・・・ガメラとかいう魔物の油取りまくるから」

「ガメラじゃない。ガキラ・・・手伝ってくれるの？」

彼女は問いかけるようにいつてきた

「ああ、なんでもやってやるから・・・俺はマサキ」

「・・・マイ」

彼女はボソツといった

「・・・まい・・・」

「どうかした？」

「・・・いや」

まい・・・俺の妹の名前

なんで俺はこの子に絡んだんだろう・・・

なんで手伝うとか・・・簡単に口にしたんだろう・・・

この子が、ただの女の子じゃないことをしったのはもう少し先のこと

彼女の案内で外まででた俺

外はすっかり暗くなっており、庭には誰もいなかった

そしてその子をそのまま自分の部屋に連れて行く途中だった

「・・・マサキじゃないか、何をしているんだ？」

「あ、ミツキ先生」

行く道の途中で、ミツキ先生が眠そうに歩いていた

「お疲れですね」

「まあな、昨日の昼から今までずっと資料まとめだ・・・まった・・・
く・・・」

ミツキ先生がマイの姿を見て言葉を失っていた

「・・・マサキ、お前この子とどこであった？」

「え・・・向こうの棟のある部屋で・・・」

そういうとミツキ先生は何かを考えるようにして顔をしかめた

「・・・そうか」

ミツキ先生が考えをやめると普通の顔になった

「この子、知ってるんですか？」

気になっていたので、聞いてみた

「・・・知ってるって・・・バカかお前？」

「え？」

「その子は・・・この学園はじめて以来の天才頭脳を持ち主、ラル・マイ・トラント・・・」

「・・・天才・・・頭脳？」

そういえばあの研究所とかいうの、なにかと難しいのがそろっていた

ふと彼女を見ると、何を考えているかわからない表情

彼女の深い瞳が、ずっとこちらを覗くように見つめていた

天才少女（後書き）

ラル・マイ・トランド

学園始まって以来の天才少女

研究所でさまざまな研究を行っているが、誰もその研究所をしらない感情をあまり表にださず、誰にも心を開いたことがない

奇妙な夜間

ミツキ先生とわかれ、俺はマイを部屋に連れてきた

「・・・・・・・・」

話しかけないとなにもしゃべらない無口な少女・・・・どうしようもできない

「とりあえず風呂入って来い、俺適当に飯作っておくから」

この部屋にはキッチンまで装備されていた

冷蔵庫にいろいろ食材をつんでいて、たまに飯を作っている

マイはというと黙って風呂場に入っていた

俺は適当に野菜を切って炒め始める

風呂場の奥からはシャワーの音が聞こえる

・・・・今思ってたんだけど夜に女の子シャワーに入れてちゃんなんかま
ずいんじゃないか？

なんかそう考えるとときどきしてくるな・・・・
変な考えを脳内から取り除き、野菜炒めを机に運んだ
そのときにシャワーの音がしたままで、扉が開いた

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・これの使い方わからない」

彼女が手にしているのはシャンプーを押してだす容器・・・てそれ以前に！！

「服を着ろよ！！！！」

マイは衣服を着ていない素っ裸状態だった

俺は手で目を隠したが、隠す気もなくこちらに近づいてきた

「どうするの？」

シャンプー容器の使い方よりか隠せ！！！！

そういいたかったが、言葉に出なかった

なんとか説得して彼女を風呂場にもどした
・・・まだ頭に焼き付いてしまっている

って！！考えるなバカ！！！！

その後、俺はマイが風呂から出るまで頭の中の何かと戦いながら目をつぶっていた

風呂から出てきたマイ
なぜか俺の服を着ている

「・・・なぜ俺の服を？」

「・・・着替え持っていない」

「・・・まあ仕方ないかもしれないけどさ、たばたぼじゃん」

マイが着てる俺の服

一応俺とは体格に差があるので袖からは手が出ていなく、半ズボンは脛が隠れるまでになっている

「・・・・・・ぽ」

なぜか顔が赤いマイ、湯冷めでもしてるのか？

ぼさぼさで妙なおいがあったマイではあるが今ではさらさらで女の子らしいにおいがしている
風呂上りでほわほわしているマイ、ふと目があうときれいな白い肌できらきらした目をしている

・・・風呂だけでこんなにも変わるものなんだな

ご飯をとにもすませ、そろそろ寝る時間になったころ

「ほら、自分の部屋にもどって寝ろ、あとは明日学園休みだしガキラの油でもなんでもとってきてやるよ」

「……」

扉の前で立ち止まっているマイ

「……どうした？」

「……私の研究所、もともとあの棟は時間により部屋が変形することになっている。今の時間帯だと研究所にいけない」

「……え？ そうなの？」

それじゃあ寝る場所がないな……

「……うーん、ミツキ先生にでもたのんで」

「……ここでねる」

。。。。。。？

「……ここでねる」

「無理だろ……」

「……」

そう答えると俺の顔をじっと見るマイ

……なんかすごいうるうるしてて罪悪感あるんだけど……

そう思っているとマイはいきなり部屋に無理やり入って行ってベツトに飛び込んだ

「お、おい！」

ベットのの上にある毛布に巻きつき動かないようにする

「・・・・・・はあ」

あきらめよう・・・・俺はソファで一夜を過ごす羽目になった

翌日

カーテンからもれる光で目を覚ました

「・・・・・・ん・・・・・・！？」

ソファは大きいから俺一人でも広々と使えるのだが・・・・
なぜかとなりにマイが眠っていた

すうすう寝息を立て、俺はあせって起き上がろうとした
しかし、マイが服を強く握っているため、起き上がることができない
どうするかなあ・・・・

しばらく待つてようとそのままの体制で待っていた

静かに眠っているマイ

よく見るとマイの目からは涙が流れていた

「・・・?」

すると・・・

「おとう・・・さん・・・おかあ・・・さん」

かすかにそういった

・・・両親となにかあったのだろうか?

その瞬間、つぶっていた目がぱちくりとひらいた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばらくの沈黙

そしてマイが

「違いますよこれは違いますよただあなたがソファで寝てたので寒いといけないから毛布持ってこようとおもったら私も寒いのでしょうがなく一緒に寝ただけであって久々に人と話してさびしいとかそういうのは思ってもいけませんのでさあおきましよう」

なんかとんでもなく早口でいうとマイはベットから降りた

・・・ツンデレ?

まさかな・・・

顔が妙に赤いマイをよそに、俺は油とりの準備をはじめた

学園の外森

マイと一緒に歩いている俺

彼女の服装はというと頭にゴーグル、服は動きやすそうな服下は昨日と同じスカート、太ももにはピストル型の拳銃

腰には袋、そして何より腕にはごつい拳銃をぶら下げていた

言っておくがここまでくるのにマイは一言も口を聞かない

すると目の前に豚みたいな魔物が現れた
6匹はいる・・・

「・・・あれがガキラです」

そういうとマイは拳銃を肩にかけ銃口を魔物に向けるとガチャリとリロードした

「。。。そんな銃扱えるのか？」

「・・・私に打ち抜けない獲物はありませんよ」

そういうとドンドン！！と二発、撃った

その弾丸は魔物二匹に直撃し、打たれた魔物はポリゴンとなって消えた・・・

早い・・・鋭い

この子は・・・本当に何者なんだ

俺が考えている隙に、マイは休む暇なくトリガーを引いた

謎の集団

わずか一瞬で二匹のガキラを打ち抜き、倒したマイ

すでにポリゴンになって消えたのを見てふと疑問に思った

「なあ、油はどうやってとるんだ？」

「・・・ドロップ」

「ドロップ？」

ゲームなんかであるけどあれか？倒したらなんかアイテムとかもらえるやつ

「アレを見て」

マイが指を指した

そこには光る何かがある。この距離では見えなくてもないが、光る何か・・・としか言いようがないものだ

そう思っていると再び一匹のガキラがこちらに向かって走ってきている

マイはそいつを躊躇なくごついライフル銃で撃ちぬいた

ドン！という音が響くと走ってきたガキラはポリゴンとなり、消えた

するとガキラのいた場所にきらりと光るものが現れる

なるほど・・・ドロップって実際みるとこんな感じなんだな

「・・・あなたの力も見せて」

マイはこちらを見て言った

そういえばさっきから攻撃してるのマイだけだな

俺は手に力を込めていつものように黒剣だした

「・・・トーチ使い」

さほど驚く表情もなく、というかいつもの無表情でいった
相変わらず感情が読めない・・・

俺は走り出し、残りの三匹に向かった

図書室であれだけ技に関する本を読んだんだ・・・いい実戦だ

三匹のうち、右側にいる一匹を狙った

剣の先を相手に向け、左を前に、右を後ろにし、左手で剣を握った
状態で放った

「裂傷斬!!」

ズダダ・・・

技その一、裂傷斬

剣で突き刺すような攻撃で8連続すばやく相手に攻撃をする

剣術では初級のほうの技

タイミングと狙い、さらには動きが重要

やってみたが技は決まらず、突きもほんの3発で終わってしまい、技という威力とすごさというのがない
失敗だ・・・

ガキラは少しひるんだが、再びこちらに向きなおした

俺はすばやく縦一線にガキラを切り裂いた
きれいに真っ二つとなり、叫び声も上げずガキラはポリゴンとなつて消えた

残りに二匹・・・

俺はすばやく振り向いた

するとこちらに迫っている一匹が目に入った

牙をむき出しにしている、長くはないが丈夫そうでかまれたらただじゃ済まなさそうだ

咄嗟に体を捻り、ぎりぎりのところで噛み付きを回避した、そして捻りを利用してぐるっとまわりガキラを切りさく

そのままガキラはポリゴンとなった、そして最後の一匹

さまざまなところを見渡したがどこにもいない・・・どこに行った！？

「上です」

マイがいった、咄嗟に上を見るとあのガキラが噛み付こうとしていたときだ

・・・間に合わない

すると何かがガキラの腹に直撃し吹っ飛んだ

見るとマイのライフルの銃口から煙が出ていた、銃で上にいたゴウラを撃ったのだろう・・・マイのおかげで助かった

「まだ油断しないでください」

「え!？」

見ると撃たれたはずのガキラが立ち上がっている・・・なにか様子がおかしい

「離れて!」

マイが高い声をあげた

俺は走ってガキラとの距離をとった

「・・・まさかこんなところで進化するなんて」

「進化？」

「魔物は常に進化しようと強くなります、普通は自分たちの縄張りや巣などで進化がするのですが・・・」

「・・・あいつの進化って？」

「・・・レベル1のガキラから・・・レベル4ブラキガになります」

そういった瞬間、ガキラの小さな足が急に太くなり、爪が鋭くなったぐんぐんと体が不気味に大きくなっていき、たちまち5倍ほどの大きさとなったガキラ

最後に豚のような毛のない体に獣といえる長い毛が生えた

「・・・ブラキガ」

「グゴゴオオオオオオオ!!」

かなりの迫力・・・レベル4、今は二人だけしかないんだぞ!?

どうするか考えているとマイがガチャリとりロードをした

「・・・戦いましょう」

「・・・そういわれても勝てる保障はないぞ??」

「大丈夫です、あなたの力は私が保証します」

「・・・どうなってもしらないぞ」

俺はブラキガに向かって走り出した

ブラキガは俺を見ると迷わず突進してきた

可能な限り近づき、ジャンプで突進を回避する、いきなりは動きを止められないのか、ブラキガはそのまま木に激突した

「よっしゃあ! 自爆!!」

しかし、突進した木は根元のほうからみしみしと音を立てて倒れた

「・・・マジかよ」

ブラキガはひるむことなく再びこちらを向いた

「ブラキガは体がとても丈夫で力もあるので気をつけて」

「先にそれを言おうぜ・・・」

ブラキガはのしのしとこちらに近づいてきている

俺はすばやく近づき、顔の首部分と思われるところに剣を突き刺した
しかし、突き刺さったままブラキガは首を思い切り振って俺は飛ばされた

「ぐはっ！」

地面にたたきつかれたがすぐさま体制を立て直した

「・・・あの鬣が攻撃を防いでるのか」

聞いたことがある、ライオンの鬣もかなり丈夫で獣に噛み付かれても大丈夫らしい

そう考えているとマイが銃口をブラキガに向け・・・

ドンドン！と二発放った

弾はとても太く頑丈な足に直撃した

足？

「ブラキガの重さは2トン、それを支えている前足を使えなくすれば大丈夫」

「で、でもあの肉の厚さだし撃ったぐらいではひるまないんじゃないかな
いか？」

「足の頸動脈を打ち抜きました、足は動きません」

「……………」

絶句だ、ただ狙い打ちじゃなく、相手の内臓まで把握して撃ちぬく
なんて……………まったく常人技じゃない

ブラキガは体制を前にし、まったく動かない

「……………後は頼みました」

そういわれると俺は剣を振り上げた

今までは力を溜め込んで放っていたが……………本には魔力をイメージし
てそれをバランスよく切り裂けといていた

……………なら……………

「“魔人剣”！！！」

俺は思い切り空を切り裂くように剣を振った

いつものように黒の斬撃はでた……………が今回は明らかに威力が違う

斬撃は今まではただ相手を切り裂く……………そんな感じだった

しかし今回は黒い斬撃の周りにまるでイナズマが走ってるような威力だった

そして斬撃は、ブラキガを真っ二つにしてポリゴンになり消えた・

「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

終わった

なんか疲れたけど終わった・・・レベル4を・・・こんな簡単に

「・・・さすが私が認めた人です」

「・・・あ、認めてくれたんだ」

「はじめから認めてます、あの研究所に普通の生徒が入ったことなんて一度もありませんでしたから」

そういえば時間により部屋が変わるって言ってたっけ

まさか俺が入ってこれかたら認めるのか？・・・アレはただ単に偶然なだけなのだが

「・・・戻りましょう、油はとっくに手に入りました・・・それにこれ」

ブラキガが消えたところに光のなにかがふわふわ浮かんでいた
それをマイがつかむと光は集まり、毛のようなものができた

「ドロップ品で、ブラキガの鬘も手に入りました。これもらっても

いいですか？」

「ああ・・・別に俺使う道ないしな」

「ありがとうございます」

そういうとマイは毛と油を腰につけている袋に入れた

「・・・思ってたんだけどその中何が入ってるの？」

袋はあまり大きくはない、しかし次々アイテムを入れてるところをみると何があるのか気になる

「アイテムと弾、さらには修理のための部品や私が作った弾などです」

「・・・」

4次元ポケットか！

俺は迷わず心の中で突っ込んでいた

帰り道、太陽が天边に上がってお昼ごろ

相変わらず無表情で何も話さないマイの後ろを黙ってついていく俺

あれほど激しい戦いの後だというのはわかるのだが、なんだか空気が重い・・・

「そ、そういえばマイはいくつなんだ？学園で見たことないと思うけど・・・」

咄嗟にそう聞いた

・・・いやいやなんで女性に年齢聞いてるんだ俺・・・失礼だろ

でも気にならないと言えようそになる

見た目は子供だけど無表情でおとなしいためまったく年齢を把握できいていない

見た目で決めてしまうと14歳ぐらいかな

「14です」

「そっかぁ・・・14・・・はぁ!？」

まさかのビンゴときた、しかし14であれほどの実力、そして天才少女・・・

「・・・私の特殊能力“絶対頭脳”・・・あらゆる疑問に思ったことをすべてわかったり、その扱い方ややり方がわかってしまう能力・・・私にわからないことなどないのです」

「・・・絶対・・・頭脳」

なるほどな、それで天才少女か・・・

「でも・・・私にもわからないものはあります、楽しいとは何か、悲しいとはなにか・・・それがわからないのです」

「・・・・・・・・」

俺は寝ながらこの子が泣いて両親を呼んでいることを思い出した
・・・この子の過去にも、なにか起こっているのだろうか

どがあん!!!

そう思っていた瞬間、目の前が爆発して土煙が立った

「!? 何だ!!!」

見るとそこには二人、スーツに似た服装に黒いサングラスをかけた
やつらがいた

「・・・見つけたぞ」

「・・・・・・・・」

男たちはゆっくりとマイに近寄り・・・

「学園にかまってもらっていたとはな・・・戻ってもらうぞ、あの
場所に」

・・・あの場所？

男たちとマイのやり取りを見ている・・・というか一方的に男たちが
マイに話しかけているのを見ていた

・・・明らかに、マイの様子がおかしい
いつもは無表情、瞳は深く何を考えているかわからない表情なのだ
が・・・

マイは目が困惑しており、おびえている

俺はゆっくりと前に踏み出た

・・・マイと目が合う・・・

とても不安な表情だ

・・・助けないと

俺はマイと男たちの間に入り

「・・・なんだよお前たち」

マイをかばうようにして男たちをにらんだ

「・・・なんだ貴様？仲間・・・か？ありえんな、その少女に限って」

男たちはにやりと笑った、

「お気楽だな子供は・・・その子がどれほど重要な人間かもしれないで」

「・・・まさか絶対頭脳とかいうのを？」

俺は先ほどマイがはなしてくれた特殊能力のことをふった

「・・・!! 貴様なぜ・・・マイがしゃべったのか! 自分の口から・・・ありえない」

「？」

何かと男二人がぶつぶつ話し・・・そして

「なるほどな・・・しょうがない、ぶっ殺してマイを生け捕りにするか」

・・・!?

殺す!?! 俺殺されるのか!!!

そしてマイを生け捕り・・・どこかに連れ去るつもりなのか・・・

「さて・・・あまり殺しは好きじゃないんでな、死んでくれるなよ」

そういうと一人の男が前に出て、手を横にだした

するとそこから黒い何かが集まりだした・・・

それはたちまち、ハンマーの形となった

「・・・トーチ!？」

手元に黒いハンマー

出し方からして俺と同じトーチだ

こいつもトーチ使いなのか！？うそだろ・・・

俺も咄嗟にトーチを発動しようとした・・・しかし

「どけ」

ぶん！と男はハンマーを振った

俺は顔、肩、腕、三点にハンマーがあたり、ふっとばされた
木々にぶつかり、倒れた衝撃で土煙がたつ

「・・・あ・・・ま・・・さき・・・」

マイが震えながらマサキが吹っ飛ばされたところを見る
マサキはぐったりと倒れ返事は・・・しない

「さて・・・あとはこいつを連れてかえるだけ・・・」

そういつて男はハンマーを肩に掲げ、片手をマイに伸ばした・・・

「“魔人剣”！！」

俺は倒れた体制で黒剣をだし手を伸ばす男に斬撃を放った

「・・・なに！？」

男の伸ばした腕に直撃、幸い倒れた体制で放ったため、威力は半減し、切り落とされてはなかった

しかし、血がふきだし、男はあせった

「う、うわぁ!! なんだと・・・このガキトーチを!？」

男のさっきまでの余裕はなく、今はまるで怒りに満ちている

「ま、マサキ！」

マイが駆け寄ってきた、体から汗が吹き出ている・・・マイはこいつらを知っている

そしてこいつらはどこかにつれて帰ろうとしている・・・危険だ

「てめえ・・・ただじゃおかねえからな」

切れている男はそういうとハンマーをかかげた、ハンマーは黒く光だし、まるで俺が魔人剣を出すように威力がましている

・・・まずい、さっきの攻撃で動けない

「死ね。“剛魔球”」

そういつてハンマーを振った男

一瞬空がゆがみ、そこから黒く丸い何かがこちらに迫っている
威力はかなりあるようだ・・・このままだとマイと俺が二人とも・・・
やられる!!

そのまま直進を続け黒く丸いもの

俺は死んでしまう・・・

そう思った瞬間

黒いものと俺たちの間で何かがはじけた

見ると空中でとてつもない衝撃の攻撃・・・何かの魔法らしい

そのまま攻撃同士がぶつかりあった、そして・・・

バン！！と両方はじけ消えた・・・

「あん・・・誰だ！！」

男は木をにらみ叫んだ、するとその木の陰から、一人の女性が姿を見せた

「・・・誰だはないだろう」

迫力のある声・・・腕をくんでおり、背が高く、ポニーテール・・・その女性は

「うちの生徒に、何をしているんだ？」

怒りに狂った俺の担任の先生、ミツキ先生だった

ミツキ先生とマイ

ミツキ先生

普段厳しく、時にはやさしい先生

今その先生がとてつもない怒りに満ちている

「・・・私の生徒に何をしているんだ？」

声にかなりの覇気がある

これがあの先生・・・なのか・・・

その迫力に圧倒される

「なんだ・・・女一人増えただけかぁ・・・」

男はげらげらわらい、ハンマーを掲げた

もう一人の男はというと、不気味と静かにやり取りを見ている

俺はダメージのため動けず、マイは俺のそばを離れない

・・・先生

「私を女とは思わないほうがいい・・・死ぬぞ」

「あああ？なにを・・・ごぶらあ！！」

男が話をしている隙に、先生がとてつもない速さで走り男の顔面に蹴りを入れた

けられた男は吹っ飛び、木に激突した

ミツキ先生・・・なんていうパワーだ・・・

「・・・て・・・てめえ」

男は口から血を流しながらも立ち上がり再びハンマーを掲げた

「悪深きこのものに魂の審判を・・・“ソウルバジア”」

ミツキ先生が静かにそう唱えた

すると男の真上と真下に魔方陣が現れ光出した

「な・・・なんだこれ!？」

「・・・くらえ」

その瞬間に、上の魔方陣から光の玉が何発の出てきて、それは下の魔方陣に吸い込まれるように消えていく

そしてその魔方陣の上にいる男に何十発も直撃し、最後にはバン!
!と衝撃のある攻撃で吹き飛んだ

「・・・な・・・が・・・」

ばさりと男は地面に倒れ動かない

・・・ミツキ先生こんなに強い人だったのか

「・・・貴様も相手するか？」

そういつてもう一人の静かに立っている男に問いかけた

「・・・いや、やめておこう、ここで戦闘をするのには得策ではないだろう」

そういつて男は倒れているやつのもとに歩いていき

「暴力的な男で悪かった、では」

そういつて男は光だした、光が激しくなり、まぶしくて目をつぶってしまった

開いたときには男たちはもういなくなっていた、多分エフィネアで移動したのだろうか

なんだったんだ・・・

不思議に思っていると倒れている俺の元にミツキ先生が歩いてきた

表情は先ほどの怒り狂ったのとは違い、優しい表情となっていた

「・・・大丈夫か？」

「あ・・・はい、一応」

そういつと今度は目に涙を浮かべた

・・・え？涙！？

「よかった・・・大切な生徒に何かあるとなると・・・私はもう・・・」

・・・この人、本当にいい人なんだな・・・

「・・・マサキ」

そう思っているとマイが話しかけてきた

先ほどはおびえ震えていたのだが今ではいつもの無表情に戻っている

「・・・ごめんなさい」

マイは静かにそういった

先生に肩をかりながら学園まで戻った俺とマイ

マイは疲れたのか、学園に戻った瞬間倒れるように寝てしまった
俺は痛みがひいてきたので普通に歩き、先生はマイが担いで歩いて
いった

先生が話があるといって俺を会議室のようなところに連れて行った

マイを先生の自室に寝かせ、武器などもおいてきた

話とはいったい・・・

「ひとまず、今日はマイを守るためといえ、危険な目にあわせてし

まったな」

「あ、いえ。大丈夫ですよ俺は」

「そういつてもらえると助かる、そして話というのは・・・マイのことだ」

「・・・」

マイの能力と実力

それに今日の男たちからして、過去になにかあった
そしてそれをミツキ先生は知っているのか・・・

「・・・マイはお前を信用しているみたいだ、不思議だな。あいつ
は決して人とは接しようとはしないのに・・・」

「え？　そうなんですか？」

まあ・・・はじめは俺がいろいろ連れまわしたのだが

「ああ、あいつは感情をしない、そのため人との接触はさけてい
るんだ」

「そ、そうなのですか」

「・・・あれでもあの子は、昔は普通にしゃべって、笑って・・・ど
こにでもいるような無邪気な子供だったんだ」

「・・・マイが・・・」

あのマイが明るかったとは・・・
まあ、小さいころなのだろうからしかたない

「でもなんで？」

今は明るさなんて微塵もない、何を考えているかまったくわからず、笑わず、怒らず、ただ冷静にクールな人物となっている

「・・・彼女が9歳のころだ、目の前で両親が殺された」

「・・・!？」

目の前で両親を・・・!？

昨夜、彼女が眠っているときに泣きながら両親を呼んでいたことはわかる

しかし・・・そんな残酷なことがあったなんて・・・悲惨すぎる

「彼女の両親はすごい頭のよい科学者でね、二人ともいろんな機械や生物の研究ばかりしていた。その間に生まれたのがマイだ・・・。二人ともマイをかなり愛していてね、研究をしながら子育てに励んだ・・・まさに理想の親子って感じだったよ」

「・・・」

愛

それはかなり重く大切な言葉

両親はそれをしっかりと受け止めマイを育ててたんだ・・・いい親だ

「しかし、マイが9歳のころの話だ、二人の頭脳を悪用しようとい

うやつらがいた、それがギンディウムって組織、今日の男二人もその組織の一員だ。そいつらが仲間になれといったが拒否するマイの両親を銃で……」

殺されたのか……銃ってところを聞くとなんだか疑問に思う……

「なぜ、マイが銃を使って戦うかというと、マイが持っているハンドガンは父親の形見なんだ、父も狙撃主でけっこうな腕だったらしい」

「そうなんですか……」

だからマイも銃を扱うのか……父を追うためにか？

「そして両親が殺されたときに、マイはその組織に連れ去られた……」

「!？」

「二ヶ月、その組織にとらわれ、何をされていたかはわからない……」

一ヶ月、両親が殺され、そしてとらわれた……考えるだけでゾッとする

「実を言うと私とその両親はちょっとした仲でな、よく会うんだ、私が研究所に訪ねると両親の遺体を見つけた……私は調べに調べ……ギンディウムの仕業だとわかった私はそのアジトに乗り込んだよ、そしたらマイがつかまっていたから助けた……あとは、学園でかまっていたというわけだ……助けたときのマイには最後にあ

ったときの笑顔と無邪気さが消え去って・・・まるで何も考えない
ロボットのような表情をしていたよ・・・」

聞くだけでもかなりむかつく悲惨な話だ・・・なんてやつらだろう・
・ひどすぎる
俺にはなんの力がないことが悔しかった

「アジトはかなり遠い場所にあり、見つけるのが大変だったよ・・・
」

「・・・俺、ちょっとマイの様子見てきます」

俺はそういつて立ち上がった、これ以上話を聞いていると耐えられ
なくなる

ミツキ先生はとても真剣な顔になり

「・・・マイはいま、支えになる人が必要だ・・・あいつを頼むぞ」

そう俺に告げた・・・俺はだまって部屋を出た

二つ隣の扉、そこにマイは寝かせてある

俺は静かにその扉を開けた

「・・・んな!？」

部屋は・・・荒らされていた
窓ガラスは割られてあり、ベットはむちゃくちゃな状態だった

そして銃と道具はそのまま置いてあり、マイだけが消えていた

「・・・マイ!!!!」

荒らされた部屋の真ん中で俺は必死にマイを探し、叫び続けた

殴りこみ

部屋から飛び出し、すぐさまミツキ先生のところに走りこんだ

「み、ミツキ先生!」

「・・・どうした?」

「マイ・・・マイが!」

俺はあせり、落ち着きがなく、説明に時間がかかった

説明をした後に、ミツキ先生は難しい顔になった

「くそ・・・こんなにも早く行動に出るとは・・・」

「・・・マイは?」

「組織・・・ギンディアムに連れ去られた可能性が十分にある、早く手を打たねば・・・」

「先生は一度アジトに乗り込んだんだろ!? だったら今すぐ向かえば・・・」

「敵の総戦力は何人だと思っている、500人以上はいるぞ・・・」

「そんなの関係ない!! 早く助けないと!」

「今ある命を無駄にするな!!!」

ミツキ先生が叫んだ、あの冷静に物事を考える先生が・・・だ

「頼むから命を無駄にすることだけはやめてくれ・・・今ぶつかつてもすぐに御陀仏、ここは作戦を練らないと行けないんだ」

「・・・はい」

先生は真剣だ

俺は・・・あせり冷静さを失っていた・・・そうだ、もっと巧みな作戦を練らないと

「しかし、お前のいうすぐに助けないといけないのは確かだ。マイの頭脳が何に使われるかわからないし・・・さらには、マイが何をされるかもわからない」

・・・マイはこれ以上なにかされると一生心を開かなくなる、どうすればいい・・・もっと力があれば・・・

「・・・ある、宛がある。ちょっとまっててくれ」

そういうとミツキ先生は扉を開けてどこかにいってしまふ一人になった俺・・・

マイはであったときからおかしいやつではあった
勝手に人の部屋で寝たり、人の服着て赤くなったり・・・何もしゃ

べらなかつたり

・・・助けないと、どうにかして・・・あいつを

俺はそれだけしか思い浮かばなかった・・・

しばらくして先生が戻ってきた

「いろいろ準備がある、お前も休め・・・明日・・・戦闘になる」

「・・・！」

明日向かうのか・・・ギンディアムに・・・

「わ、わかりました！それじゃあ・・・俺は・・・」

そういつて立ち上がったが、足が動かずその場に膝をついてしまった

何度か立ち上がろうとしても、結果は同じ・・・

「・・・大丈夫か？いろいろ考えすぎだぞ・・・」

「は、はい・・・」

「・・・まあ、いろいろあって飯もまだだろう、作ってやるから座っておけ」

・・・そういえばお昼からまだ何も口にしていなかった
今の時刻は夜の10時・・・食べないといけない

遠くで何かを焼く音が聞こえてきた

先生が料理を作ってくれているのだろう

・・・本当に、いい人だ

しばらくするといい香りがしてきた

いつもはポニーテールの先生が髪を下ろしている、なんか新鮮だ

「ほら、食べ」

そういつて出されたのは何かの肉を焼いたもの、俺は一口、食べて
みた・・・

「・・・うまい」

とてつもなくおいしい、味の絶妙なバランスや、焼き加減もばっちりだ・・・

それにおいしいだけでなく、何だか力がみなぎってくる

「驚いただろ、ダイダロスっていう魔物の肉だ、スタミナ、体力、
免疫力・・・すべての力を格段にあげる成分が含まれている、これ
で明日の戦いに備えられる・・・」

「・・・先生は本当にいい人ですね」

俺は普段思っていることを口にした

「・・・何をバカなことを！いい人ではない！ただ生徒に正しい教育をだな！！」

なんか顔を少し赤らめてあたふたし始めた・・・なんかかわいい

「それに・・・私には生徒を大切にしなければいけない義務がある・・・」

その言葉は教師としてなのか、はたまた自分のためなのか
そういうことをいう先生は何かと遠い目をしていた

次の日

目を覚ますと気分がとてもよかった

先生の食べさせてくれた肉のおかげだろうか・・・ありがたい

俺はすぐさまいつもの黒い上下の服に身を包み、先生の元へと向かった

「準備はいいか、マサキ」

先生は動きやすそうな服、ズボンは黒くて長いゴム製のもの
髪型はポニーテールだ

「はい・・・て二人だけですか？」

「そうだ。学園側には数人の教師にしか伝えていない、公にすることが面倒なのでな」

「はぁ・・・移動手段は？」

するとミツキ先生はポケットから青いエフィネアを取り出した

「こいつにはギンディアムのアジトに移動するよう登録されてあるエフィネアだ、これで一気に飛ぶ」

「わかった・・・」

「・・・いくぞ、転送・・・ギンディアムアジト！」

そういうと目の前が白く光りだした
俺はびっくりして腕で目を隠す・・・

しばらくして腕をどかし、目を開けた

「・・・うわ」

面前には黒いタワーのような建物があつた

門のところに俺と先生は立っており、その門の大きさもとてつもない
入り口に敵はいないようだ・・・

「きっとマイは三階の奥の部屋にいる、あそこで以前マイを助けたからな」

「わかった」

「・・・それでは、いくぞ!!」

そういつて同時に俺とミツキ先生は走り出した
入り口である巨大なドアを蹴り飛ばし中に入った

・・・これじゃ殴りこみだろうが

建物の中には黒服の男たちが何十人もいた
全員同じような黒の棒の武器を持っており、いつでも戦闘開始とい
うような体制で待っていた

「大勢で歓迎会かい？」

「いや、先生、明らかに違う意味で歓迎されそうです」

そういう冗談を抜かし、先生は手のひらから魔方陣をだした
それを見て、黒服の男たちも一気に走り出した

「ぶつつぶせえ!!!」

どこからかそんな声が聞こえてくる

先生は手のひらの魔方陣から雷をだして複数の敵を吹っ飛ばした

すげえ・・・あんな技あるんだ・・・

関心していると横から一人、黒服が棒を振り上げて迫っている
俺は相手に向き、棒の攻撃をよけ、顔面に蹴りを入れた

吹っ飛んだ黒服はほかの黒服たちに激突して、ドミノみたいに倒れていく

その隙に俺はトーチである黒剣をだした

「あいつがトーチのガキか・・・」

数人の男たちが俺を見て言う、そしていつせいに襲い掛かる

「“魔人剣”!!!!」

俺は襲い掛かってくる数十人の男たちを黒い斬撃で吹き飛ばした
あるものは叫び、あるものは血を吐きながら倒れていった

数分後・・・あれほどいた黒服の人数はほんの5名になっていた

「・・・たったの二人に・・・!?!」

男たちは俺とミツキ先生の強さに驚いている

「・・・うちの生徒はどこだ」

ミツキ先生が静かに歩み寄り問いかける

「・・・ツチ！」

そして残り五人の男たちも襲い掛かり・・・

「リペイトレイング”！！」

光の光線で吹っ飛ばされた

ミツキ先生の技どれも強力すぎるぞ・・・

「さて、先に進むぞ」

「え・・・あ、はい」

俺は多少息が切れていたがすぐに先生の後をついていった

・・・無事でいろよ、マイ

心の中でそう何度も願いながら

走れ

「魔人剣”！！”」

「ローレイ・シャック”」

ドガン！！

通路を走り続け。数十分はただただろうか・・・

次から次へと現れる黒服たちを倒していく俺と先生

先生は息すら切れていず、休む暇なく相手を蹴散らしている
俺はというと息がほとんど切れており、技を使いすぎて手がしびれ
ほぼ動かない

「大丈夫か？」

「・・・はぁ・・・はぁ・・・ええ、このくらいなら」

昨日先生に食べさせてもらった肉がなければとつくにへばっていた
だろう

通路を休む暇なく襲ってきた敵を倒して先に進んだ

すると一人の黒服が手を組みながらたっていた

「・・・こいつは!」

昨日襲ってきた二人組みのうちの一人・・・あのおとなしいやつか

「よくここまでできましたね、正直驚きましたよ」

「生徒が捕らわれているんだ、当たり前だろ」

「・・・そうですか、ここからは私がお相手しましょう」

そういうと男から妙な違和感を感じた

なにかに圧倒されそうな迫力・・・なんだこれは

俺は直視できず、かすかに吐き気を感じた

「・・・すごいな、只者じゃない」

「只者じゃないのは貴女もでしょう」

すると先生の違和感もかわった

・・・両者としてつもないオーラがする・・・なんだこの感じ

「・・・マサキ、先にいけ」

「・・・え?でも・・・」

「こいつは私がやる、マイはこのすぐ先にいる」

「・・・はい」

男はとてつもなく強そうだ、油断はできない

「・・・そうだ、こいつを持っていくといい」

そういうとミツキ先生は自分がしている指輪をはずし、俺に渡した

「それをつけていれば力になるだろう」

「え・・・？はぁ・・・」

俺はわけもわからず指輪をつけた

青く光っている指輪・・・なんだろう？

「・・・よし、いいか・・・必ずマイを救出しろよ？」

「当たり前です・・・全力を出しますよ」

「いい返事だ・・・走れ！！」

先生の合図で俺は地面を強く踏み走り出した

黒服のすぐ横を全力でかけぬけようとする

すると黒服は俺をにらんだ

俺は恐怖を感じたがそのまま全力で走り続けた

すると黒服は俺に向かって抜き手で突きを放とうとした

・・・やばい・・・このままだと直撃する

しかし、俺の後ろをものすごいスピードで走るミツキ先生がその突きを蹴り、俺への攻撃を阻止した

俺は先生をチラッと見た後、長い通路に目を向けひたすら走り続けた

・・・先生、がんばって

「・・・ほう、やるなあ」

「そうでもないさ、運動にもならないよ」

「はっはっは・・・そうか、さすが・・・破壊神だ・・・」

「・・・その名は昔に捨てた、今は、ただの教師だよ」

「・・・それでも、元破壊神と一戦交えるんだ・・・かなり貴重な経験さ」

「・・・」

ミツキ先生は黙ったまま、マサキの走り去った道を眺めた

・・・マサキ、後はお前次第だ

そう心でつぶやき、黒服に向き合った

そのころ、ある部屋で縄で腕を縛られている少女、マイがいた
マイはイスに座られ、目の前にはある大男がいる

マイはその男を見て、涙を流し、がたがた震えていた

「・・・俺を覚えているかい・・・？」

「・・・わすれるものか」

マイは冷たく、そして怒りを混じらせた声でいった

「はは・・・そうかそうか、アレからけっこう俺、顔変わったんだ
けどね」

「・・・そのしゃべり方と、目つきでわかる・・・私のお父さんと・
・・・お母さんを殺した男」

大男は、まさに5年前、マイの目の前で両親殺した相手だ
その男が目の前にいるだけで、マイは振るえ、涙を流していたのだ

「そうそう・・・いやあ、あの二人の娘だと言うから、君も頭脳
がすばらしいほどの天才かと思ってさらったんだよ・・・」

ビクッ

マイは男がしゃべる過去について、何かを思い出すたび、びくびくと反応していた

「いやあ・・・楽しかったねえ、一緒にいろんなこととして遊んだねえ・・・マイちゃん、泣き虫だったけど・・・」

マイはドクドクと胸が高鳴り、恐怖し、汗が体中からあふれ出した
昔、この男が私にしたこと・・・それはわすれたくも忘れられない
出来事

一回目は、勉強だった

しかし、それはただの勉強ではない
間違えたら、体にあざが出るほど殴られる勉強だった

私の能力を最大限に広げようとしたのだろう

その後は、針のイスに座らされた

髪をめっちゃめっちゃに切られた

銃でなんどもすれすれの所を打たれまくった

私はこのことが原因で・・・心を病んだ

毎日その繰り返し

殴られられ、そのたびにこの男は笑っていた

どうしたの？なぜなく？

そういいながらけって殴った

私が10歳の誕生日を迎えたとき

男に服を破かれた

痛みつけるのが飽きたのか、体目当てに私を襲おうとした

そのときに、ミツキ先生が助けてくれた

両親のいない平穏な日に戻った

学園に通い始め、私はいろんな人の行動や目が怖かった
何も感じないようにした

一人に、孤独になっていった・・・

そのとき、わからない問題の答えが次々頭に浮かんだ

わかってしまう、難しい問題が何もかも

先生の調べでそれは特殊能力というものがわかった

それをきっかけに、私は自ら、研究所に住み着いた

必要な素材などは自分で手に入れ、わからないことも自分で調べつくす

私は、ずっと、そうしてすごしてきた
人の目が恐怖にしか感じず・・・一人ひそひそと

一昨日、初めて人が研究所に来た
怖かった、とてつもなく

しかし、彼の目がほかの人と違った

まぶしくて、明るくて、きらきらしていた・・・自然と恐怖なんて
感じなくなっていた

私はなぜかわからず、その男の人と行動をともにしてみた

マサキと名乗る男は変わっていた

食べたことない料理を作ったり

変わった戦い方をしたり

人の裸みて赤くなったり

考えるうち、思い出すたび、心が熱くなる

なんでかわからない、なんでなのだろうか

今現在、腕を縛られ、大男にいろいろ話を聞かされ恐怖を感じながらも、マサキのことを思い出す

会いたい・・・彼に

・・・こういう気持ちなのだろう、これは

「おいおい、なにぼーとしてんだ、昔は叫びながらいやいや言っていただろうが」

男が何かを話している

怖い、いやだ・・・たしかにそれはいまでも感じている

それでもマサキのことを思い出せば、少しでも気が楽になる

何者なのだろう、あの男は、私にはわからなすぎる
・・・もつとあの男のことをしりたい

「黙ってるんだったら、仕方ないな・・・昔の、あの子の続き、するか」

そういつて男はのしのし私に近づいてくる

「あの子よりかは、いい体してるもんなあ？」

男が体をじろじろ見ている

目つきが怖い

「・・・さあつて」

男が手をこちらに伸ばす

男の存在が怖い

いやだ・・・

いやだよ・・・！

こんなのいやだ・・・！！

願っても男は動きを止めようとはしない、ここまで男の生暖かい息

がくる

にやついてよだれをたらした顔が迫ってくる

男の手が私に触れようとした

「いや・・・いやあ・・・いやだ!!」

私は力いっぱい叫んだ

大男は予想外だったのか、一瞬目を見開いて驚いた

「助けて・・・助けてえ!! マサキ!!」

咄嗟に、その人の名前を、力いっぱい叫んでいた

私が・・・想いはじめたその人の名前を・・・

「うおおおおらあああああああ!!!!!!」

そのとき、私の横をブンッと風が切った

大男の顔面に何者かが蹴りを入れた

「ぐぶあ!!」

男は盛大に吹っ飛び、地面に倒れこんだ

私の目に入っただのは・・・黒い服、黒い髪、黒い剣・・・

マサキ・・・だ

マサキは黒剣で私の腕を縛っている縄を器用に切った

「・・・助けに来たぞ、マイ」

「・・・うぐ」

言葉がでなかった

何かを言おうとしらが言葉が思い出せない
そして言葉より、行動が先に出てしまった

私は力いっぱい抱きついた

黒い服の男の胸に、力いっぱい

そして

「うわああああああああん！」

泣いた

悲しみでもない、恐怖でもない

・・・安心したのかな、うれしかったのかな

とにかくいっぱい泣いた

「小僧・・・やってくれるじゃねえか」

すると大男が立ち上がった

鼻から血を垂れ流して、ゆっくりと

「・・・マイ、ちょっと下がってろ」

そういうとマサキは、大男に向かい合った

私はただ、その背中をずっと見続けるだけでした

走れ（後書き）

30日まで休止します
すいません

マサキの覚醒

この大男・・・今マイに何しようとしてやがった!?

・・・ゆるせねえ

「・・・マイ、下がってろ」

「・・・マサキ」

「...安心しろ、絶対勝つ」

そういつて俺は大男に向き合った

「・・・小僧、不意打ちで勝った気にならんほうがいいぞ、俺は本気で貴様を殺しに行く」

男はかなりの迫力があつた

しかし、先ほどの先生と黒服ほどではない

俺はゆっくりと剣を構え、男を見た

腕に金色の腕輪、ぼさぼさ頭に長く生えたひげ

腕は俺の3倍はあるんじゃないかというほど太かった

「・・・さあ、こい・・・内臓を引きづり出してやるからよ」

「・・・！」

俺は大男に向かって走り出した
手に武器はもっていない、チャンスだ

俺は地面を蹴り高くジャンプした
そして動こうとしない大男の顔面めがけ、剣を振り切った

ガキーン！

しかし、男は片手をあげ、金の腕輪で剣からの攻撃を防いだ

「んな！？」

俺はあいた口がふさがらない
高くジャンプした後、落下力と俺の体重で重みのかかった攻撃をた
かが片手一本で軽々と受け止めたのだ

「んだぁ・・・？？こんなもんか！！」

そういつてもう一本の片腕を大きく振りかぶり、俺の鳩尾めがけパ
ンチを放った

めきい！

「・・・ぐぶう！」

俺はふつとび、そのまま壁に激突、壁はひびが入り、俺はそのまま

地面に倒れこんだ

なんだこのパンチ・・・人間の腕力じゃありえないぞ・・・！？

俺は意識がもうろうとしたが、何とか気力で立ち上がった

「・・・ほう、一発じゃ終わらないか、なかなかタフじゃねえか」

大男は余裕の表情で俺に近づいてきた

俺はやつをにらみながら剣を構えた

「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

腹から妙な痛みが走る

嗚咽もくる、すこしでも動くと激しい痛みが走る

まるでおなかの中の何かがつぶれたような感覚だ

足が震えながらも、俺は剣を振り上げ・・・

「“魔人剣”！！」

力いっぱい、振り切った

そして黒い斬撃があらわれ、大男に一直線に伸びていく

これならいける・・・そう心では思った、だが

ガシ!!

「・・・・・・・・!!」

驚くことに勢いよく放たれた斬撃を、彼はいとも簡単に両手でつかんだのだ

そして・・・

「ふん!!」

握りつぶすように力を入れ、斬撃を破壊した

「・・・俺の・・・魔人剣が・・・」

今まで一度も破られたことのない技がいとも簡単に破られてしまった

どうすればいい・・・どうすれば・・・

「これが俺と、小僧の力の差ってやつだあ・・・」

そういつてのしのし、俺に近寄ってきた

「く・・・そおそお!!」

俺は大男に向かって剣を振った
めちやくちゃんに、力任せに

しかし、そのすべてを腕に付けてる金の腕輪で受け止まった

いくら攻撃しても、一太刀もやつにかすらない

大男の表情は変わらず面白がっているような感じがする

・・・くやしい

「“闇突き”!!」

俺は黒い渦のできた突きを大男にぶつけた

しかし、この技も大男は片手の腕輪で止めてしまった
腕輪に傷はついていない

「・・・うそだろ!？」

「まじだよ」

男は俺の顔面めがけ、パンチを放つ

首が折れるのではないかというぐらいに曲がった首とねじれたからだ

俺は宙を舞って、地面にたたきつけられた

「こんなガキが、ヒーロー気取りで囚われの少女を助けるか・・・」

男はゆっくり歩み寄り、俺の胴を踏んだ

めきめきと押しつぶされそうな圧力が襲う、苦しい・・・息ができない

「実力の違いをわかってんだ、トーチが使えるからってまだまだ子供、恐れるに足らん」

「・・・かぁ・・・は」

必死に抵抗しようとした

しかしやつの強力なパンチで体がいうことをきかない

「・・・遊び相手にもなりやしねえ・・・さっさと、消えな」

ゆっくりと足を上げる大男

その足はゆっくりと顔のほうに近づき・・・

「つぶれろ」

踏みつぶされそうになる

・・・俺が死んだらどうなるだろう

地球に残る麻衣は？親父は？おふくろは？

学園に残るレイやミサは悲しむのだろうか

・・・マイは？どうなる・・・

力がない、力がほしい

魔王を倒せる力でもない、学園で一番強くなる力でもない

人を守るくらいの力が・・・俺にはほしい

ドクン

胸が高鳴る

・・・何かが体中から湧き上がる

「が・・・があああああ！！！！」

「な、なんだ！？」

俺はとっさに、踏みつぶそうとした足をつかむ、そしてその足を力いっぱい投げ込んだ

「うお!？」

男はよろめき、5歩ほど俺から後ずさった

俺は立ち上がり、腕を見た

・・・指輪が光っている

・・・なんだ、光が増すにつれ、力がでてきている

・・・これなら

俺は剣を取り、再び相手に向き合った

「・・・いまさら何をしようってんだあ!!」

男が殴りかかる、俺はそのパンチを軽くよけ

大男の胴向けて剣を振り切った

男はいつものように腕輪でガードしたのだが・・・

「なに!？」

腕を後ろにはじかれ、軽く吹っ飛んだ

男は転びはしなかったものの、体制を立て直して俺をみた

「・・・まさか・・・貴様」

男がゆっくりという

「・・・いままで、魔力0で戦ってたっていうのか!？」

魔力、この世界の力

俺にはそれがなかったというのだろうか

体中から、今まで感じたことのない力が、湧き起っていた

父の想い

なんなのだろう

体中の痛みが、うそみたいに癒えてきた

腕も足もしっかり動く、ずっしりと重い黒い剣も軽い
体中が熱い・・・何が起こっているんだ

「魔力0で・・・よく戦うことができたな貴様・・・面白いじゃないか」

そういうと大男からものすごい迫力がでる

魔力・・・今まで軽く考えてたけど、もしかしてとても重要なものなのか？
てっきり使えていたのかと思っていたが・・・まさかいま覚醒するとは

「・・・・・・・・小僧、名は？」

「・・・・・・・・マサキ」

「・・・・・・・・そうか、マサキ・・・気に入った！ここからは男と男の真剣の勝負と行こうぜ！！」

そういうと男は高笑いをして、俺に歩みよった

「・・・すぐに終わらせよう、長い戦いは避けたい」

戦いを長引かせ、仲間が来てしまつては絶体絶命だ

「・・・すぐに終わらせてみるよ!!」

大男が腕を振りかぶった

先ほどまでの俺なら恐ろしく、あせっていたが、自然と落ち着いている

動きが見える・・・まるでスローモーションだ

俺は軽くその突きをかわして・・・

「・・・つぐ!?!」

わき腹を軽き切り裂いた

「・・・は、早い・・・これがお前の力か!?!」

自分でも驚くほど、体がよく動く

俺は剣を振り上げ・・・

「“魔人剣”」

そういつて剣を振り落とした

ザン!!

その瞬間・・・男の胴体から血が噴出し、男は吹っ飛んだ

「・・・あ・・・があ」

そのまま地面にたたきつけられ、動かなくなった

魔人剣を発動したさい、ものすごい早い斬撃が大男を切り裂いた

「・・・これが、魔力発動の魔人剣か・・・」

しばし、黒剣を眺めた

黒い剣は、さらに闇を深めるように色が濃くなっている気がした

・・・そして俺は

「・・・待たせた」

マイの前まで歩み寄った

「・・・マサキ」

マイは俺の顔を見るとかすかに笑った

・・・笑えば普通の少女・・・いや、それ以上の美しさがある

無表情なのがもったいないぞ・・・

「助けてくれてありがとう・・・マサキ」

「礼なら、ここまで案内してくれたり、戦ったり、指輪を預けたミツキ先生にいつてくれ」

「・・・うん」

なんとかマイも取り戻せた・・・あとはミツキ先生が勝ってくれてればいいけど・・・

そう思った矢先だ、部屋のガラスまどがパリインっとわれ、俺は思わず振り向いた

・・・そこには忍者のような格好をした4人組がたっていた
手には鋭いナイフ・・・敵か！？

「・・・なんだ、ゴウザのやつ負けてやがるぞ」

忍者の格好をした一人が言った

目線は俺がいま倒した大男に向いている

ゴウザという名前なのだろうか・・・

「ま、計画も失敗となった、これが外部に漏れてはいかん・・・皆殺しにしよう」

「！！」

皆殺し、俺はその言葉を聴いて敵と認識した

咄嗟に剣を構えた、しかし・

ガク・・・

腕がうまく上がらない、なぜだ？

「・・・いきなりの魔力開放に体がまだついていけないんだわ」

マイが、再び無表情に戻っていった
・・・こんなときに戦えないのか！

「・・・マサキは休んでて」

そういうとマイはスカートの中から拳銃を取り出した
警察がもってそうな感じの拳銃・・・どこに隠れてんだ

「相手が・・・あの男じゃなければ普通に戦える」

そういうとマイはどこから取り出したのか、目を覆いかぶさる大きな
ゴーグルをかけた
火花とか飛ぶのだろうか？

「・・・女一人、たやすい、やっちまえ！」

男の一人がそう叫ぶと、あとの3人がすばやく動き出した

マイは、心の中で、ある思い出が頭をよぎった

ドン！ドン！

それは、初めて射撃場に言ったときの話

父は気まぐれで休みの日にはさまざまところに連れて行ってくれたが、このような場所にははじめてきた

お父さんは大きい銃をなれた手つきで操作し、動く的の真ん中をどんどん打ち抜いていく

最後の的もきれいに真ん中に直撃し、ふう、と息をはくお父さんがかっこよかった

「わぁ！お父さんかっこいい！」

「すごいだろ！」

お父さんはにっと笑い親指を立てた

「・・・これ、私にもできるかな？」

「できるさ、なんせ俺の娘なんだからな！」

お父さんは射撃術がうまく、よく狩にいらっていたりする

大きな動物を持って帰ってきたときは、驚きのあまり泣いてしまった

「でもむずかしそー・・・」

「そうでもないさ、イメージをするんだ」

「いめーじ？」

私はでかい拳銃を指先でつんつんつつきながらきいた

「ああ、大切なものを守りたい、その思いをイメージするんだ、そうすれば銃も体の一部となり、射撃がうまくなるんだぞ!」

「大切な・・・もの?」

「ああ・・・俺は、お母さんと・・・マイがとても大切だ!だから、二人を守るイメージで引き金を引いているんだ」

「マイもお父さんとお母さん大切!大好き!」

「ああ、だが、マイも大きくなったら、お父さんとお母さんと同じくらい好きな人が現れるぞ」

「そうなの?」

「ああ、きっとその人は、マイを大切に思っているはずさ、だから・・・強くなれよ、マイ」

・・・その言葉の意味が、私にはまだ理解はしていませんでしたしかし、強くなれ、その言葉で、私はがんばってきました

「・・・お父さんみたいになれるかな」

「はは、きつとなれるさ・・・お父さんには、打ち抜けないものなんて、ないからな!先は長いぞ!」

そういつてドン!と空に向かって一発、撃ちました

私はその日から、銃の練習を始めたのです

いま、男たちが私に向かって走ってきています

「・・・こそ、マイ、大丈夫か!？」

「・・・ええ・・・私に、打ち抜けないものなど、ありませんから」

ドンドンドン!!

私は、すばやく引き金を引き、撃ちました

弾は、男たちの額に吸い込まれるように直撃し、男たちはその場に倒れました

「んな!？」

マサキはびっくりして私を見ます

「・・・私が改良して作った睡眠弾です、人間なら20分は夢中でしょう」

見ると男たちはすうすうと寝息を立てている・・・すごい

「・・・ほう、なかなかやるじゃないか」

最後の一人が笑いながらマイを見ていた

「・・・おい、あいつ撃たなくていいのか？」

「・・・実というと、あの弾は試作品で三発しかありません、そしてもう弾は残ってはいません」

「はぁ!？」

まさかの絶体絶命!？

男が笑いながらナイフを振り上げ、こちらに向かってきている

どうしようと思った瞬間、うしろの扉が勢いよく開いた
すると武器を持った男たちが入ってきた

・・・敵か!？

この人数、もう戦えない俺にとっては・・・そう思っていたが

「君がマサキ君だね？そしてマイちゃん・・・安心しろ、私たちは君の味方だ!」

一番初めに入ってきたひげの生えた老人がいう
み、味方!？

「なんだ貴様ら・・・？」

男は動揺していた、そして老人はこう言い放った

「私は、このマイちゃんの両親の部下・・・研究班ハンデイスの一員じゃ!」

・・・研究班ハンデイス!？

俺はさまざまなことに、目を丸くしているしかなかった

無表情の拳銃少女

ハンデイス・・・

男たちは俺とマイを守るように囲み、一人の忍者に武器を向けていた

「・・・マイちゃん、無事でよかった」

若そうな男性がマイと俺を担ぎあげた

「・・・あの悲惨な事件の日、私たちはマイの父親、アルダンさんのおかげで逃げられた・・・あとからアルダンさんと母のライナさんが亡くなったと聞いたとき・・・怒りを覚えていた」

男は昔の話をし始めた

「復讐しようにも、敵が何者かもわからず、さらに恐怖により、実行に時間がかかった・・・だが！昨日マイの先生と名乗る女性が来て、マイちゃんがさらわれたこと、そしてそれを助けるために襲撃することを話してくれて、いてもたってもいられずこうして助けに来た！」

そういうと周りの男たちがうおおおお！！と叫び、忍者男に向かって走り出した

「・・・まあいい、ここは撤退だな」

そういうと男は地面に何かを投げた
すると黒い霧が現れ周りが見えなくなる

・・・煙幕か！

煙が晴れたところ・・・忍者の男とその仲間は消え去っていた

「・・・いって〜」

戦いが終わり、安心しきった瞬間、大男との戦った傷が痛み、動けなくなった

マイは相変わらず無表情だが、俺を心配してくれてるのか、片時も離れなかった

「よくやったじゃないか、マサキ」

「せ、先生・・・」

俺が寝転がっていると、視線にミツキ先生が現れた
息切れもしなければ傷ひとつない、先生強い・・・

「あ、の・・・指輪ありがとうございます」

「役に立ったようだな。その指輪は返さなくていいぞ」

「え!？」

こんな高級そうな指輪をただで・・・

「あ、ありがとうございます」

その言葉しか俺は出せなかった

「しかし、坊主すごいな・・・助けるためといっても、こんなところまで先生と乗り込むなんて・・・」

一人の男性が俺に近づき、話しかけてきた

「なにか、あったのかい、ここまで本気になるのはすごすぎる」

「・・・マイも立派な、仲間・・・そう思って助けにきただけです」

「・・・ほう」

男性は何を考えてるのか、にと笑って俺にいった

「君は強くなる、仲間を大切にしているからな」

そういつて男性はどこかいってしまった

・・・強くなる

この言葉は、俺を複雑な気持ちにさせた

痛みも引いてきたころ、学園に戻ろうと先生がいい、男たちと別れようとしたときだった

「マイちゃん、ちょっといいかな」

「？」

一人男性が近づき、かばんを渡した

「・・・あのとき、研究所から私に取り出した・・・君の両親の研究内容と銃の技などが書かれている資料だ」

「！」

聞いたところ、けっこう有名だったというマイの両親が残した資料内容という、かなりのことが書かれてあるのでは・・・？

「・・・これは娘である君が持っておくべきだとおもう、だから持ってきたんだ」

静かにそのかばんを受け取ったマイ

「・・・お父さん、お母さん」

ボソッと小さい声で言ったマイ

一瞬悲しそうな表情をしたが、すぐにもとの無表情になると

「ありがとう」

そういつて学園に向け、歩き出した

俺はあせって男の人たちの方を向き

「ありがとうございました！」

そう叫んであるくマイを追っかける、その後ろをマイペースでミツキ先生がついてくる

「またなあ！」

「ありがとう！！！」

「何かあつたら力になるぞ！」

男性たちはわーわーというんなことをいい、その声を聞いているとなんだかい気分になった

魔物に会うこともなく、無事学園にたどり着いた俺と先生、それにマイ

門をくぐっていつもの風景に平和を感じる

「それじゃあ私はいろいろやることがあるので解散だ、あとは二人きりでご飯食べたりするといい」

そういつて先生は校舎のほうに歩いていった

「・・・ありがとうございました！」

俺は先生の背中にそう声をかけ、頭を下げた

「・・・さて、どうする？」

俺はマイのほうに向いてからこれからどうするかを問いかけた

「・・・このかばんの中身をいろいろ見てみたいので、部屋に戻ります」

「戻るの？」

「この時間帯なら大丈夫です」

そういつてマイは研究所に向かって歩き出そうとした

すると急に立ち止まって俺の方を向くと

「本日は本当にありがとうございました、とても感謝しています」

「いって、助けたいと思うのはみんな同じだから」

そういつてマイはまた校舎の方に向きなおし、こういつた

「・・・私に撃ちぬけないものなどありません・・・いつかはあなたの心を撃ち抜いて見せます」

・・・は？

「そ、それって？」

「ではまた」

後ろ姿しか見えないので表情はわからないが、耳が真っ赤になっていたマイは早歩きで校舎に歩いていった

一人取り残された俺

「・・・あなたの心・・・心臓を撃ち抜く・・・俺を殺す!？」

何でだ!?! 助けたのに!!

一人取り残された俺は、そのなぞの言葉に困惑していた

一方、マイは

カツン・・・カツン・・・

階段を上りながら考え事をしていた

あの時、襲われそうになった私はなぜかマサキが来てほしいと願った
そう思っていたら本当にマサキが現れた

「・・・なにをかんがえてるのでしょうか」

わからないものなんてない私、ですが初めて彼と会ったあの日から
ずっと彼を想っている

・・・彼のことを考えるだけで、胸が高鳴り、顔が赤くなるのがわかる

何なのだろう・・・この気持ち

研究室の扉の前まで来た私

・・・大切な人を守る

不意にお父さんの言葉を思い出しました

「・・・マサキ」

彼の名前を出すだけでこの気持ちになる・・・これは彼が大切だと
言うことなのだろうか

そしてなぜ別れ際にあのようなことを言ってしまったんでしょうか

・・・なぞだらけです・・・彼、マサキは

「・・・マサキ、大切な人なのかな」

昔の子供のころの私のようなしゃべり方で言ってしまった一言

・・・あはは

私は扉の前で軽く笑い、研究を続けるため、ドアノブに手をかけた

襲撃者

マイを救出して一週間

俺がこの世界に来て2週間と2日・・・あっという間というかまだまだというか・・・

本日の学園での授業は魔物の対処術についてだった

俺にはさっぱりな内容でも、一応のため、真剣に聞いてみた

魔物の名前が次々と出されていたが、俺にはやはりさっぱり・・・

今度は魔物の勉強をしなくては・・・

授業が終わり、放課後・・・みんな自由に過ごす時間だが、何をしようか

「マサキ、これから忙しい？」

ミサが笑顔で俺に近づいてくる

男だとわかっていても、彼の笑顔には何かと癒されてるのは内緒だ

「いや、暇だからどっか散歩にいかうかと」

「それじゃあさ、一緒に町に買い物いかない？」

「いいけど何かほしいのでもあるのか？」

「依頼を地道にこなしてやっと3万ベルたまったからね、何か道具を買いにいかがかと」

「へえ・・・」

「そーいや最近あまり町に言ってないな・・・俺もいろいろと興味あるし」

「いいぞ、それでどこの町だ？」

「町といっても、俺が知ってる中ではさまざま、東西南北それぞれに違った町があるらしく俺もあまり見たことがない」

「東の町のさらに奥に行った場所、いろんなものがあるからきつと楽しいよ！」

「おお・・・それは見てみたい」

「この世界は俺が想像してる感じの古い城とかそういうのは少ないらしく、むしろ俺がいた世界のような建物が多いとレイが言っていた」

「そう思うとなかなか親近感がもてるのでこの世界が好きになれる」

「よし、いくか・・・」

「本当に！？ありがとう！」

「そういつて俺とミサは学園を後にし、東の奥の町に行くこととなった」

「・・・うわぁ」

俺は絶句した

俺のいた世界の・・・それ以上の町・・・いや、都市だった

動く歩道もあるし、何かとでかい映像看板やポスターがある

乗り物は走ってはいないものの、かなりの機械都市だった

「ランブドラの人口の7割が学生ってきいた？」

「え？ あぁ・・・」

けっこう前にレイがそんなこといつていた気がする

「じゃあここには残り3割の普通の人たちが？」

「まぁ、お店とか販売とかそこら辺にいるけど、ここはほぼすべてが機械でまかなわれているんだ」

「す、すげえな・・・」

それならまさしく俺のいた世界より活気的未来ジャン・・・

「でも、なにかと事件とかおきないのか？ 機械だけじゃ悪さするやついるだろ」

「そうでもないよ、ここの機械都市を作ったのは世界的に有名な科学者、ドント・マートル。未来の科学を握ってるとも言われている

人で、事件がおきたらその人の作った警備マシンが来て捕まえるんだ、悪さした人をさ」

「へえ・・・」

それは何かと関心する

世界的科学者か・・・一度会ってみたいな

そう思っていたらいろんなところで無人の機械らしきものが動いているのを見かける

落ちてるごみを拾う機械や空を飛んでいる機械・・・監視機械かな？

目を輝かせてみている俺に、ミサはやさしく微笑んでいた

しばらく動く通路を進んでいると、大きな壁に、城のような建物・・・

これは・・・

「・・・なあ、ミサ。これってもしかして学園？」

「え？うんそうだよ、ここはランブドラ東1学園・・・東西南北2つずつ学園があつて、中央に学園がひとつ、計7校の学園があるんだよ」

「そうなのか・・・」

俺が通ってる学園でも十分すごいのに・・・あの学園と同じものがほかにもあるなんて・・・驚きだなあ

そういつて通路を乗り続けていると、徐々に人が多くなり、いつの間にか多くの人が回りにいた

動く通路を降りて徒歩で歩いているときに疑問を感じた

「ここは人が多いんだな、見る限り生徒以外に大人の人もいるみたいだし・・・」

「ここはいわば、この町の中心部みたいなものだからね、いろいろと便利な品物がそろってるんだよ」

そう説明しながら町の奥まであるいていく

すると一人の男性・・・40代ぐらいの男の人が俺の顔を見て話かけてきた

「・・・黒い服に黒い髪・・・まさかとは思いますが、あなたはマサキさまで？」

「え？あ、はい・・・そうですけど・・・」

「やはり！私・・・リドの父親でございます！あの時は助けてもらって礼もできずに・・・」

「リドのお父さん！？そ、それに礼とかいいですって！俺はただ手を貸したに過ぎませんので・・・」

けっこう若くてかっこいい人なのだが、とても律儀な人手何度もお礼をいわれた

「いやいや！私らは命を助けられたようなものです。本当にありがとうございました・・・」

そういうと男性は深く頭を下げた

「そ、そんな！頭を上げてください・・・リドもけっこうがんばっ

てたんですよ」

「リド・・・ですか。私が昔使っていた技の書物を持って、どこかにいってしましまして・・・」

「そ、そうなんですか」

リドのことだ、きっとどこかで特訓してるに違いない、いつも気がつけばいなくなってるからな・・・

リドのお父さんと別れ、ミサの買い物に付き合っている俺
何かの薬だの何だのを買って、俺たちの学園に戻っていった

「今日はありがとう！このあと晩御飯一緒に食べない？」

「おう、そんじゃあ5時ごろ食堂で待ち合わせな」

「うん！それじゃああとでね！」

そういつてミサは自分の部屋がある校舎に走っていった

今は4時をちよっとすぎたころだ・・・少しだけゆっくりするか

そう思って少し散歩することにした俺

最近は暇な時間は散歩することを日課にしているため、大体はこの
学園のことがわかってきたが、広すぎるため、今でも行ったところ
がないところがある

俺は時間を見つけるといったところのないところによく足を運んでいるため、時々迷子になることもある・・・

「・・・とはいっても」

校舎のすこし離れたところにある茂み

そこをまっすぐ進んでいくと古い建物を見つけた

「・・・なんだろう？ここ」

建物の周りは古びた木材が山積みになっているし、建物自体にも草木が絡まっているため、長い間人が使っていないのだろうと思う

何分歩いたかわからないが夕日が赤くなり始めているからもうすぐ5時かな・・・

俺は来た道に戻ろうとした、そのときだった

「貴様からこっちに来てくれるとは・・・行く手間が省けるなあ・・・」

「ん？」

声がする方向に向くと一人の赤い髪をした男が立っていた
年齢は俺と同じくらいだろうか、やけに体格がいい

「お前、マサキだろ。話題の転校生・・・黒い服に黒い髪の男・・・
強いと噂だったが、あまり強そうに見えんな」

そうやって俺を見る赤い髪の男、すると今度は後ろから・・・

「人は見た目で判断しないほうがいい・・・僕みたいだね」

俺は振り返るとそこにはピエロの格好をした男がいた

「ふぎゆるああああ!!おもしれえええ!!」

ピエロの後ろには長いゴーグルをつけた全身緑タイツの男がいた

「へえ!けっこうかつこいい私好み!」

「おいおいアミナ・・・また惚れたのか連敗振られ女」

すると横にはいつの間にか黄色い髪をした幼い子供ととてもでかい体をした体格のいい男が立っていた

「な、何者お前たち?」

俺が恐る恐る尋ねると赤い髪の男は答えた

「俺たちはあるものに依頼され貴様を始末するようにいわれた集団。ヴァイタストとでも名乗っておこうか」

「えー・・・かつこわるい!キャンデストとかじゃだめ?」

「いえいえ・・・ゴシックサーカス団とでも・・・」

「うるさい、今決定した、ヴァイタストだ」

・・・一瞬なんか揉め事が起こったが何かと和解したみたいだ

「ってことだ・・・なに、おとなしくすれば・・・すぐすむさ」

そういうと4人の男と1人の女は目の色が変わった

「・・・その命もらうぞ、黒ずくめマサキ！」

えっと・・・はぁ！？

俺はとりあえず心の中で驚いてみた

4人の助っ人

僕、ハイサキ・ミサはマサキと夕ご飯食べる約束をしたんだけど・

今は4時55分、集合は5時だからまだ問題はないんだけど・
いつも、マサキは集合とか時間決めると15分前にはすでに集合場所に来てるはずなのに・

「何かあったのかな・」

最近、マサキの周りには危険なことが多いことを聞いた

どこかの組織と戦ったり、レイとレイの新しい精霊で魔物倒したり・

・
・
なんだから、気が合う友達とかなり距離ができたと思ったから・
・今日は買い物とご飯に誘ったのに・・まだかなあ・

だんだんと不安が高まる中、一人の女子生徒に話しかけられた

「あれ？ミサ？？」

白いバンダナに白いロングコート

これからご飯を食べに行くのか、そこにはレイさんの姿があった

「れ、レイさん・・マサキを見なかった？」

「マサキ？ううん、今日は見てないなあ・」

レイさんも見ていないのか・・どこに行ったんだろう

「・・・何かあったの？」

「あ、いや・・・ご飯食べる約束してるんだけど来なくてさ・・・」
もう一度時計を見ると5時を少し過ぎたところ

「へえ・・・マサキが約束破るなんて考えられないけど・・・」

マサキが転校してきて一番マサキと接していたのはレイ、マサキのことならこの学園の誰よりも知っているだろう

「すこし心配だね・・・マサキ、いろんな問題に巻き込まれるからなんだかほっとけないよね・・・」

「うん・・・」

まあ、マサキ自身も首突っ込んでいることもあるみたいだから自業自得な場合もあるけど・・・ほっとけないのは確かだ

「探しに行ってみようか？マサキのことだから散歩して道に迷ったとかそんな感じかもよ？」

「ああ、なるほど・・・そうも考えられるね」

この学園が広いため、マサキも僕もよく道に迷ったりしてしまう。
今回も迷子の可能性が出てきた

「あの森探してみよう？あそこ暗くなると周り見えないから・・・
早めに探しとかないと」

「うん、わかった!」

そういつてすぐその茂みに向かって歩き出した

そしてこの会話を、二人の行動を見聞きするある二人がいることにまったく気づかなかった・・・

「うおあ!」

俺、東上真崎、またはヒガシノマサキは今までの5人組に襲われています

軽々しく言ってますが今まさに油断していると一瞬で殺されそうです

「うらあああああああ!」

長いゴーグルをつけた全身タイツのこの男

はじめは両手にナイフを持って振り回してきたかと思えば・・・

ギョルン

「いっ・・・!」

手首が2、3回転したりして、とても気分が悪くなりそうな戦い方

をしてきやがった

こいつ骨あるのか・・・？

「おれえの特殊能力！ “無限身体回転”！！体のあらゆるところを360度無限に回転することができる・・・！」

「気持ち悪！！」

俺は心底そう思ってしまった

トーチを発動し、ゴーグルやろうに切りかかろうとした・・・が

「ふん！！」

体格のいい男が俺をつぶす形で殴りかかってきた

俺は咄嗟に横に体を捻りその攻撃をよけた

するとそのままとまることなく突きは地面を殴る形となり、地面がひび割れた

・・・今までそんなことするやつけっこういたけど・・・それ以上の威力だぞ

関心していると今度は女の子がこちらに向かってきて・・・

「あまり痛くしたくはないんだけど、ごめんね？ “フラッシュバン”！！」

そういった瞬間、彼女がピカアッと光りだした
直視できないまま目をくらませると溝にものすごい痛みが走った

「・・・は・・・かぁ・・・？」

何が起こったかわからず、その場にうずくまった

「ごめんね？私、力強いの！」

「な・・・！？」

目の前に握り拳を作った少女・・・うそだろ？

「あ、特殊能力じゃないから安心して？ただ腕力増加道具使ってるだけだから！」

何を安心しろと！？俺は心の中で突っ込みながらもその少女からステップを踏み距離をとった

すると今度は目の前にピエロの男が現れ、トランプのカードを数枚手に取ると俺に向かって投げてきた

・・・トランプなんかで何を・・・そう思った瞬間よく見るとトランプには刃がついていた

「・・・！！」

ドガン！！

俺は咄嗟に地面に剣をたたきつけ、えぐれた岩などをカードにぶつけた

岩にぶつかったカードはそのまま地面に落ちたが一枚だけ、岩にぶ

つからずそのまま俺に飛んできたカードがあった
俺はよけきれずに肩にカードがかすれ、軽く血が出る

だけど戦えない・・・ほど・・・では・・・？

なぜか目がぼんやりして体がふらふらしてきた

「ひとつ、伝えておきます、そのトランプカードには毒が塗られて
いるので、大変動くのが厳しいですよ？」

「んな!？」

そういわれた瞬間、腕の力も抜け剣が地面に落ちてバンッと消えて
しまった

たってるのがやっとの俺に赤い髪の男が・・・

「「豪魔火炎拳」」

そういつて俺を力いっぱい殴った
その瞬間に盛大な爆発が起こり、俺は吹っ飛ばされて地面にうずく
まった

「・・・がふ!」

血がいつもよりどす黒く見える
毒のせいかな？

体も動かずただただうずくまっているだけだった・・・

「さて、これで始末すれば、あの方から報酬がもらえるんだな・・・」

そう赤い髪の男が言った

・・・あの方？

俺はしゃべろうにも声が出ない

本格的にやばいんじゃないか・・・？

「さて・・・とどめといこうか」

「まて！！」

赤い男の言葉をさえぎるように、一人の男の声がした
ザンと足音を立て、俺の目の前に現れたのは・・・

「なんでマサキはいつも問題に巻き込まれてるの！？」

焦り顔のミサと・・・

「だ、大丈夫！？ひどい傷・・・今手当てするからね！！」

心配そうに見つめるレイだった

「・・・誰かと思えば、経歴のない男と女一人増えたところでなんら変わらない」

そういつて右手をゆっくりあげた
すると一瞬で巨大な炎ができた

「・・・な!？」

「俺は高等3年。お前たちの先輩だ。力の差もある」

「・・・! “ヒール”!!」

レイは赤い髪の男の言うことに耳も貸さず、俺に手をかざしてそう
唱えた

すると光の粒が現れ俺を包み込むように光る
体の痛みが大分楽になった・・・回復魔法か？

「“メガクウェイク”!!」

するとミサはハンドハンマーをつけた握り拳で地面を殴り、そこか
ら岩が繰り返しなだれるように5人組を襲う

「!？」

5人は咄嗟にジャンプしてミサの攻撃をよけた

「・・・く!」

よけられたことを悔しがるようにミサは拳を握った

「・・・さっさとくたばれ!!」

体格のいい男がいらだったのかこちらに向かって走ってきた

逃げろ！！

叫びたかったが声が出ない・・・どうする

ドン！！

そのとき、一発の銃声が鳴り響いた

すると男は肩を押さえ立ち止まった

「誰だあ！？」

男が目が赤くなり叫んだ

「・・・マサキには指一本ふれさせない」

「・・・！？首脳のマイ！？」

男が驚いた顔でいった

そこには白い服にスカート、そしてでかいライフル銃を持ったマイがいた

マイ・・・なんでこんなところに？

・・・ダッ

そうこうしている間にピエロがどこからか小型のナイフを取り出し、マイに切りかかろうとするが・

ドガァン！！

突然と現れた誰かがピエロを蹴り飛ばした
その男は灰色の髪で刀を持っている・・・リドだ

「・・・斬撃のリド」

ピエロが静かにいった

「リド・・・！！」

「なんか爆発音が聞こえてな・・・気になってきてみたら・・・マサキをどうするって？てめえら」

レイ、ミサ、リド、マイ

4人はマサキを守るように立ち上がり、5人組を睨んだ・・・

バトルロワイヤル

・・・みんな

朦朧とする意識の中、みんなの背中が見えた

俺のためにここまで来て、戦いを挑もうとするなんて・・・

これが仲間か・・・

俺は耐え切れず、いつの間にか気を失っていた

「マサキ!? 大丈夫?」

心配するミサ・・・

「大丈夫、気を失っただけみたい」

冷静に看病するレイ

「・・・お前誰だ? 味方でいいのか?」

刀を腰掛けているリド

「・・・私はマサキを守るだけ、あなたたちの味方ではない」

無表情で返答するマイ

マサキの仲間であり、友であるこの4人が、マサキを守るため集まっていた

「・・・仲間はいないという情報だったが・・・まあいい」

赤い髪の男が静かに言う・・・

「皆殺しだ」

不気味にそういった

「グハハハハハ！！！」

ゴーグルをかけたタイツ男に続き、それぞれが4人に向かって襲い掛かる中、赤い髪の男だけが静かにそこに立っていた

レイは咄嗟にマサキを抱え、引っ張りながらも茂みの奥に引っ張り出した

ピエロはどこからかナイフを取り出し、リドを切りかかろうとしたが、リドは刀を少し抜き、そのナイフの攻撃を防いだ

「あなたをはじめ見たときから妙な殺気を感じたんでねえ・・・」

「それはお互い様だろ、妙な魔力を隠しやがって・・・」

「おやおや・・・ばれてましたか、さすが・・・」

そういつてけりや切りやいの棍棒が続いた

「ふん!!」

一方、体格のいい男はマイに一直線に向かってパンチを放った

ドンドン!

しかしマイもすばやくかわしながら銃を二発撃った

「いて!」

「ただのゴム弾です、痛いですがあざぐらいしか残らないので」

「・・・狙撃の腕はすげえみたいだな、さっきの攻撃も効いたぜ」

そういつて次々攻撃を放つ男、それをかわしつつ銃でバンバンと撃つマイ

二人も迫力ある戦いを繰り広げていた

「グルウラアアアアア！！！！」

タイツ男の相手はミサ

全身を奇妙に回転させながら不気味な動きで攻撃を食らわすタイツ男

「・・・ぐ！！！」

攻撃がまったく読めず、次々殴られられるミサ

「くっそお！！！」

ハンドハンマーをつけた手で相手の顔面を力いっぱい殴った・・・が

グルン！！！！

「ひひひひひ！！？」

首が360度回転し、ダメージが無効化する・・・

首が何回転もするその姿はとてつもなく気持ち悪い・・・

そしてマサキを抱えながら茂みを進み続けるレイ

毒を食らって気を失っているので早く学園校舎に向かいたいのだが

「どこいこうとしてるのかな？」

「!？」

その二人をつけていた女の子がいた

「・・・内緒だよ? えい！」

すると女の子は不思議なことに、マサキに向けて手をかざした
光が現れ、マサキを包み込む・・・するとマサキの顔色がよくなった

「・・・回復魔法？」

レイが不思議に言っていると・・・

「あなたはまだ毒を消すまでの回復魔法覚えてないんだね、安心して、私殺しとかそういうの好きじゃないから」

「・・・じゃ、なんでこんなことするのかな？」

レイは警戒を解かずに聞いた

「お金がもらえるんだよ、マサキを始末したら一人10万ベル、本当だよ？」

「・・・誰がそんなことを!？」

「私にも知らない、でもマサキって人が悪者じゃない感じだからさ」

「・・・悪者？」

「マサキというものを処分しろ、やつは世界を破滅にもたらしものだって……」

……マサキが世界を？

逆……マサキは魔王討伐を目指している人なのに……誰がそんなことを？

「まあ私もこのまま戻ったらあの髪赤いリーダに何されるかわかんないし……このまま戦いはするけどね？」

「え!？」

普通はしないでしょ!？　っと私は突っ込んでいたが、彼女はすでに攻撃態勢に入っていた

レイの努力

「さあ！戦おう！戦いは大好きだよ私！！」

黄色い髪の子ははしゃぎながら拳を握っていた

「わ・・・私はあまり好きじゃないなあ・・・」

「そっか！それじゃあこっからいくね！！」

「え！？」

そういうと女の子は全力で奪取してレイに襲い掛かる
レイは武器、杖を取り出した

「・・・すこしでも強くなるために、私はがんばって努力したんだ・
・・・大丈夫」

小さい声でそう言い聞かせるようにいつて相手をみた

「いつくよー！！ “フラッシュバン” ！！」

そういうと彼女は光り輝き、直視できない形になったが・・・レイは

「“バリヤー” ！！」

そう唱えていた

するとレイの周りに透明な壁ができ、レイを守る形になる

「バリアーの中は光をフラッシュまで通用しないよ」

「・・・そっかあ」

少女は残念そうに光の技を解除した

「その壁邪魔・・・えい!!」

そういうと壁を力いっぱい殴った

するとヒビが入ってパリンといとも簡単に割れてしまった・・・

「な!? 壁が簡単に割れた!？」

この少女にいったいどこにそんな力があるのだろうか、レイは不思議に思った

「ふっふっふー! 見よ! この腕輪!!」

すると少女は右手を高く掲げる

その小さく細い腕に金に色の腕輪がはめてあるのが見えた

「これはレア中のレアアイテム! 豪腕の腕輪! つけたらあら不思議! ゴウマ族の腕力波の力がみなぎるのだ!!」

す、すごい・・・パワー増徴のアイテム・・・

しかもゴウマ族・・・聞いたことはある、人間とは別の種族で険しい大いなる山に住み着く腕力のある種族だと・・・

「パパに内緒で持ってきたから・・・怒られちゃうな・・・」

「そ．．．そうなんだ」

十分に強い女の子ではあるけど、普通の女の子なんだ．．．なら

「召還！ “コックバード” ！！」

ぽんっと小さい小鳥がでてきた

私の精霊のうちの一人、コックバード

戦闘能力はまるきりないけど．．．でも

「歌って！」

「ピヨ！！」

子供心をつかむには拔群！！

精霊にもいろんな種類がいて、なにも戦闘だけの精霊ではない

人を癒したりする精霊も数多く存在するのだ

そしてこの子は私が一番初めに契約した精霊．．．この子なら．．．

「ピュピュピュピョ♪」

コックバードは歌いだし、場の空気がいっぺんする

「．．．うわぁ」

女の子は目を輝かせながら、見とれていた、これなら時間が．．．

「でも戦い中だから静かにしててね！」

そういつて歌う小鳥を黙らせ、またも私に向かって走ってくる彼女

「え!?!?なんで!?!?」

「歌はいいけど別に今聞きたくないし」

少女は再び拳を握りながら私に向かってきた

私はよけながら、必死に対抗策を練っていた

「・・・私そろそろ、飽きてきたから終わらせようかな」

不意に女の子がそんなことを言い出した

すると女の子は拳を強く握り・・・

「“スーパージャンプ”!!」

そんな幼稚な技を言って私にパンチを放った・・・いや、その場でパンチを放った
するともものすごい拳圧がおこった

「きゃあああああ!!!!」

吹っ飛ばされながら私はしりもちをついた、

あんなの直にあたったら無事じゃすまない・・・!?

「ようし!準備おつけ!!いくよ!!」

そういつて再び握りこぶしを作りながら私のところに向かってくる

少女

・・・戦わなくては、勝たなくては

私は立ち上がり、杖を構えた

「・・・光照らす雷鳴よ、雷雲とともにその名をとどろかせよ！
雷撃”！」

そう唱えた

すると5メートル地点のところに黒い雲ができた

それはびりびりと雷をたなびかせており・・・そして

ピシャアアアアア！！！！

地面に雷が一直線に落ちた

・・・少女の3歩先ぐらいに落ちた

その威力はとてもすさまじく、落ちたところの地面はえぐられ、煙
がぷすぷすとあがっていた

「・・・う、うわああああん！！！！」

女の子は怖くなったのか、泣き出して走り去ってしまった

「えー！？ちょっと！？」

・・・私と倒れているマサキが残される

・・・勝ったの？

中級技ではあった、最近、魔力を高め、中級技を必死に覚えていたのだが・・・

・・・この威力はすさまじすぎる、私何かあるのかな・・・？？

女の子が逃げ出したおかげで、わけのわからないバトルはレイの勝利で終わった

怒りの火

ミサ対タイツ男のバトルは激戦

ミサは苦戦していた

ミサの相手は体のいたる部分を360度回転させる人間

どれだけ強烈な突きを放っても回転され攻撃が回避されてしまうのだ

「はぁ・・・はぁ」

息が切れているミサの体はどこもあざだらけ・・・

「相手がわるかったなあ・・・ははは！」

そういつてタイツ男は体を奇妙に回転させ、手首を恐ろしいスピードで回転した突きをミサに当てた

「ゴフツッ!!」

殴られたミサはそのまま地面に吹っ飛んだ

「回転を加えたパンチはとてつもない威力なんだ・・・地を掘り起こすドリルのようなものなんだよ」

そういつてまた手首を回転させる

「・・・なにか手策は・・・！」

ミサは戦いながらも作戦を練っていた
かならず相手に攻撃を食らわせることができるはず、そう想像しながら

「おらおらおらあああああ！！！」

タイツ男は両手を回転させ次々突きを放ってきた

ミサは何とかそれを見分けながらぎりぎりのところでかわす

「ふははは！！よけてばかりじゃつまんねえぞ！！！」

タイツ男は余裕の表情で流れるように攻撃を放つ
このまま守っているだけでは負けてしまう・・・

「はあああ！！！」

ミサは咄嗟にタイツ男の顔面にパンチを放った・・・が

ぐるん！

これも首を回転させられ回避される

「はははああ！！！！うおらあああ！！！」

ドズ！！

攻撃を回避したタイツ男は足を回転させそのままミサの溝に蹴りを入れた

「がふ!!」

そのまま吹っ飛び、地面にたたきつけられる

「・・・く・・・そ」

それをチャンスのようにタイツ男は地面に手足をつけそのまま器用に全身を回転させ・・・

「“トルネードガルト”!!!!」

徐々に威力を増しながらミサに迫る

「ぐああああ!!!!」

ミサはよけきれずその攻撃をモロに食らってしまった
そのまま宙を舞うミサ・・・そしてタイツ男はその下にもぐりこむ
と・・・

「うらうらうらうらああああ!!!!」

足、または手を猛烈に回転させ宙を舞っているミサに次々猛烈な攻撃を食らわす

ガスガスと体のあちこちに深い攻撃を食らうミサ

「・・・!!!!」

そしてとどめの一撃のように、タイツ男は全身を激しく回転させ、ミサを吹き飛ばした

「ひゃっはああああ!!」

タイツ男はそのまま地面に華麗に立ち、空高く飛んだミサは茂みに落下した

「・・・どうだぁ・・・？俺の最強のコンボだ。これを食らえば、もう動けねえよ・・・」

そういつて背を向け、そのままマサキを探しに行こうとするタイツ男・・・だが

「・・・ま・・・ってよ」

「・・・は？」

声がした、咄嗟に振り向いたタイツ男の顔面に、強烈な拳が叩き込まれ、回転し損ねたタイツ男はそのまま吹き飛ばされた

「がはっ!？」

つけていたゴーグルがはずれ、その顔があらわになったが、男はなぜ自分が吹き飛んでいるのかも理解できていない

「・・・な・・・ぜだ!？」

「・・・マサキは・・・強いんだ」

ミサはぼろぼろで、あちこちにあざができ、顔には切り傷から無残な血が流れている

たっているのがやっとの状態なのに、ミサは決して倒れようとはしない

「・・・マサキは、魔王を倒すって言って、僕を強いって言うてくれて、仲間にしてくれて・・・」

マサキを始末するっていうお前たちを・・・絶対にゆるさないんだ
「！！」

ミサは感情が荒れていて、熱くなっていた

そのときだった

ミサがつけていたハンドハンマーが赤く光りだした

「・・・え？なんだこれ・・・？？」

ミサは何がなんだかわからず、それを眺めていると

ボッ！！

なんと手から火からでてきた

「う、うわ！？なんだ！？」

ミサも自分でもびっくりしている
・・・あれ？

ふと疑問に思う、手を火が覆っているのに、ちっとも熱くない
ドクン

ミサは不意に、心が熱くなる

すると連動するように火の激しさも増した

・・・これって・・・僕の感情でできているのか？

ミサは確信はもててないが、一か八か、手を構えた

「・・・んだあ？そんな技隠してたのか？」

タイツ男は先ほどの余裕がまったくなく、怒りに満ちた顔だった

「・・・いまさら何しようが関係ねえ・・・さっさとぶっ殺してやるぜ!？」

そういつて全身を激しく回転させ、土煙を上げながらミサに迫る
しかしミサはそれをよけず、真正面にパンチを放った

バン!!

激しく出る土煙、そしてその中から人が一人吹っ飛んできた

吹っ飛んだのは・・・タイツ男だった

腹が黒くなっており、そのまま苦しんでいた

「か・・・はあ!？あ、熱ちいいいい!？か、回避がきかねえ!!」
「？」

男は腹を抑え、うずくんだ

「・・・これが僕の新しい技なのかな」

ミサは激しく燃える手を見ながら・・・そしてそのまま構え・・・

「ま、まで・・・！やめろ！！」

膝立ちをしているタイツ男が許しを請う、しかしミサはそれを聞き入れず・・・そのまま攻撃を放った

「バーンストレート”！！！！”」

そう叫んで炎のパンチをタイツ男の顔面に放った

「がはああああ！！！！？？」

そのまま回転し中を舞い・・・地面に落ちた男
まったく動かなかったが息はしていた、気絶したらしい

「・・・はあ・・・はあ・・・」

怒りがさめたのか、そのまま手の火がぶうんっと消えてしまった

「・・・勝った・・・やった！！」

ミサは両腕を空に上げ、大いに喜んだ

一瞬の弾丸

マイ対体格のいい男

「・・・どこ行きやがったあの女」

マイは体の小ささを利用して茂みを移動しながら進んでいた

大きいライフル銃は見つかるんじゃないかと思われてはいたがどうやらその銃は組み立て式なので今は解体して移動を早くしている

「・・・ツチ、めんどくせえ・・・おらあ!!」

めんどくさそうにいった男は地面にそつと手をつけると・・・

「“グランドクラッシュ”」

そういうと手のひらが軽く光だし、地面は半径20メートルほどの地面がひび割れた
すると木々が倒れ、そこはまるで隕石が落ちたような感じになっていた

「・・・いねえ」

男は周りを見てそうつぶやく・・・すると

「こちらです」

「!?!」

声がしたのは・・・男の真上

「上か!？」

男は驚き上を見上げた

するとマイは小型のハンドガンを向け・・・
ドン!!

一発、男に撃った

「なめるな!!」

そういうと男は弾丸をぶん殴った

パン!

すると弾丸は激しく爆発した

「・・・!? 痛っ・・・」

男は拳に多少のやけどを負った

地面に着地したマイは男を見つめた

「・・・父の残した資料に、武器や弾の調合とかもあったのでいろいろ作ってみました。今のは“爆発弾”・・・試作品なのでもう少し火薬を増やしても大丈夫そうですね」

「・・・人を実験台にでもしてるのかお前は」

男はあきれながらも、攻撃態勢を緩めなかった

「私の父の資料はすばらしいものばかりでした・・・強力な弾の調合が数多くあったのですべて記録させていきました・・・今の私は少しでも強くなりたいので・・・」

「・・・だったら俺を倒してみろよ小娘!!」

男は叫ぶと走り出し、マイに襲い掛かった

「・・・もう大丈夫、すべて計算しましたから・・・あなたは私に指一本触れられませんよ」

「・・・ざけんなぁ!!」

挑発的なことをマイが言ったため、男は怒り拳を振るう

マイはすばやくその攻撃をかわすとダッシュで後ろに下がった

「・・・なんだ？逃げるのか？」

そういうとたたんだライフル銃を再び立て直した

「・・・ちょっとだけ本気を出してみようと思います」

ガチャッとライフルを構えるマイ・・・

「すみませんですけど・・・すぐに終わらせますよ。」

「へえ。面白いこと言ってくれるじゃないか・・・」

そういうとマイはすばやくリロードをし、男の両足めがけドンドンと二発撃った

それを軽くジャンプでよける男
弾は地面に直撃した

「はん、足を撃って動けなくするつもりだったのか？」

そういつて地面に着地・・・すると

べちゃ・・・

「・・・あ？」

「“粘着弾”です、これもまた試作品なのであまり粘着力は強くしてないのですが・・・」

足を見ると白いべとべとしている液体が男の足に付着していた・・・

「ふざけんな！！く、くそお！？試作品！？まったく動けねえじゃねえか！！」

必死に足を抜こうとする男だが、まったく地面から足がはがれない・・・

「これであなたは的になりました・・・本当の実験台ですね」

ガチャ・・・

マイはそつと銃口を男に向けた・・・

そしてドン！と引き金を引き一発男に向けて打ち込んだ

男はこの弾も思い切りパンチした・・・

すると今回は爆発はしなかった・・・が
ポンつという音とともに白い煙が充満した

「ぶわ！？な、なんだ！！？？」

「“煙弾”・・・試作品ですが・・・思ってたよりは煙がかなり大量にでてしまいましたね」

男は混乱していた

こんな弾はまったく想像していなかった
現代でこんな弾丸はまったく見たことも食らったこともない

「・・・こんかいの試作品はあまりにも不安定なものばかりでしたね・・・」

そういつてどんつと一発、男に再び撃った

「・・・さっきの爆発するやつか！？それはもうきかな・・・」

男が叫んでいるのを、さえぎるようにマイは言った

「一言、言っておきます、・・・その煙はガスです」

「は？」

弾が煙に接した瞬間、その場が赤く染まった

そして・・・

ドカアアアアン！！！！

盛大な音を立てて、大爆発を起した

「獲物は打ち抜きます・・・どんな相手でも」

煙が晴れたその場には、ぼろぼろになった男が倒れていた

侍の意地

リド対ピエロ

「はぁ!!」

「フッ!」

ガキーン!!

リドの持つ刀とナイフがぶつかり合う
互いに互角の戦いを繰り広げていた

「しかし、面白いね・・・あの斬撃のリドが人を助けるとは・・・」

「俺はマサキに助けられた・・・マサキに何かしようとするお前たち
はぶった切ってやるよ」

「ふふ・・・面白いね・・・」

そういうとピエロはひとつの赤い玉を取り出した

「?」

何をするのか見ていると・・・

「楽しいマジックの始まりさ・・・」

ぽんぽんぽん！

手を交差に動かしていると赤い玉がひとつふたつと増えていきたちまち10個ほどの量になった

「玉遊び」

そういうと玉をすべて地面にたたきつけた

ぽんぽんっとバウンドしながらリドの方角に飛んでいく玉

「・・・なんだ？」

見ているとゆっくりと動いていた玉がひゅん！と猛スピードでリドに襲い掛かる

「なに！？」

咄嗟によけたが次々と玉が襲い掛かってくる

そして溝にひとつの玉が直撃した

ドグー！！

「ぐはぁ！？」

玉は鉛球のようにとても硬く、すさまじい痛みが襲う・・・さらに

カァ・・・

ドッガァン！！！！

盛大に爆発した

爆風に吹っ飛ばされたリドはそのまま木に激突した

「びっくりしましたか？マジックとは力・・・戦うマジック！」

「げほ！！けほっ！」

リドは咳き込みながら立ち上がると残った無数の玉が襲い掛かってくる

「はぁぁぁぁ！！！」

リドはすかさず刀を鞘から抜いた

ギンギンギン！！！！

そしてすべての玉を切り裂いた

ドッカァアアアン！！

爆発を引き起こし、爆風で土煙が上がった

「はぁ・・・はぁ・・・」

「へえ・・・こいつは驚いた、あのスピードの小さい玉を全部切り裂くなんて・・・」

さすがのピエロも関心していた

「俺はマサキの力になるために必死に特訓したんだ・・・」

そうだ・・・特訓したんだ

リドはつい最近からの自分の行動を振り返った

放課後必死に剣術の基礎を習って、特訓して・・・

今ここでこいつを倒さない限り、マサキの足手まといにしかならないな・・・

「さあ・・・もっといくよ!“マジックボックス”!!」

そういうとピエロの頭上に黒い?のマークが入った箱が現れた

「この魔法・・・いわゆるマジックはランダムでね・・・しょぼい攻撃が出れば強い攻撃もでるんだよ・・・」

そういうと黒い箱はぐるぐると回転し始めた

「さあ・・・何がでるかな?」

そしてぴたっととまった箱の上部が開いた

するとそこから、巨大な人方の何かの生物が出てきた

「あらら・・・魔人か・・・さて、君にどうできるかな?」

あんな小さい箱からどのような詰まっていたのか、そこには4メートルはある奇妙な形をした魔人が出てきた・・・魔人、始めてみる

にはかなり衝撃的なイメージだった

「やれ、魔人」

ピエロがそういうと魔人はリドに襲いかかった
はじめは右手でパンチ、それをリドは地面を蹴り上げジャンプでよけた

しかし、空中で身動きの取れないリドに、魔人の左ストレートが飛んできた

「ゴフウ!!」

クリティカルにあたり吹っ飛んだ
そのまま地面に倒れ、すでにリドの体や服はぼろぼろ、顔からも血が流れていた

「・・・はあ・・・めんどくさくなってきた」

不意にリドがそんなことを口にした

「めんどくさい? そんなぼろぼろになって余裕の言葉だねえ!？」

そう口にするピエロをほっておき、リドは地面に刀を刺した

「・・・?」

ピエロは不思議そうにその光景を見ていると・・・

「俺はなぜ、刀を手につか、心に入れないかといわれる・・・そ

れはもうすでに武器を心にしまっているんだよ、ある・・・妖刀を」
そういつて右手を前にかざす、するとリドの胸から光の玉があらわれた

「妖刀？」

するとその光が刀の形になり、その姿があらわになった

赤い鍔にうつすらと赤く染まる刀・・・

「こいつは妖刀・・・“鬼神紅葉”・・・かつて、鬼を切ったことでのろわれたとされる、代5代妖刀の一本だ・・・」

「・・・なぜ貴様がそれを持っているんだい？」

「俺の家が元金もちでな、古くから家宝にされているのを俺がもらった

「・・・いけない後継者だ」

新たな刀を握り締めたリド・・・そのリドに魔人は襲い掛かる
リドは落ち着いていた、そして・・・

「邪魔だ」

刀をすばやく横に振った

すると・・・魔人の上半身が消し飛び、下半身だけが残った
下半身は数秒たつとぼたんと倒れ、魔人の横にあった木は血で赤く染まっていた

「・・・は？」

ピエロが驚きの声を上げる

「こいつの力は強大すぎてな・・・俺も扱うのを戸惑っている、それにこれは使っている間魔力を吸い取っているみたいなんだ・・・まさに妖刀だな」

「・・・“ナイフサーカス”！！」

ピエロは頬に汗をためながらも魔法名を唱える
すると上空に無数のナイフが現れ、リドにめがけ降り注いでいた

リドは一步も動かず、刀を構え・・・
「“巻き切り”」

そういつて刀を円を描くように振った
すると回転しながら長い斬撃が生まれ、ナイフがすべて切られた・・・

「・・・うそでしょ」

ピエロがかなりあせっている

リドは刀を鞘にそっとしまつて、腰を落とし刀を構える

「・・・居合い・・・“絶唱”」

そういつて目にもとまらないスピードでピエロの脇を通り過ぎた

そのさいに、キンっという鞘にしまう音が聞こえる

。。。そして数秒置いた瞬間、ピエロの胸元が切り裂かれた

「ぎゃあああああああ！！！！」

ピエロは激痛に叫び、倒れこんだ・・・

リドは刀を心にしまつて、ピエロを見た

「・・・かすっただけだ、死なない・・・」

そういつてリドはもう一人、静かに戦いを見学している赤い髪のをにらんだ

赤い男は、不気味な笑みを浮かべていた

魔術師

「はぁ・・・はぁ・・・」

回復魔法を多数覚えていたレイではあるが解毒用の魔法はまだ覚えてばかり

戦った黄色い髪の少女のおかげですこしはよくなったが顔色がすぐれない

やっとのことでマサキの容態をよくした

顔色のよくなったマサキ、そのまま眠り続けている・・・

「よか・・・った・・・」

汗をぬぐい一息ついたときだった

日がすっかり暮れて月明かりしか光のない茂み・・・
しかし、あるところは違っていた

「・・・火？」

そこには大きな火柱が高く上っていた

私たちの中に火の魔法を使う人はアキを除いていないはず・・・これは誰かがまだ戦ってるのかな？

不安に思ったレイは茂みの葉を破り、それをマサキに覆いかぶさるようにかけた

（これで万が一敵に見つかっても大丈夫なはず・・・）

そしていまだに立ち上る火柱に目を向け、走り出した

「いてて・・・」

ゴースト男と激戦をしたミサ
ぼろぼろになりながらもほかのメンバーをさがしてさまよっていた

「・・・どこだろ・・・ここ？」

歩き始めて数十分

簡単に言えば迷っていた

すると右側の空が赤く光った

「・・・！？なんだ？？」

遠くてよくは見えないが・・・光は続いている・・・

誰かの魔法かな・・・？

そう思ったミサはその光に向かって歩き出した

ガチャ・・・カチャ・・・

ほぼ余裕の勝利を得たマイ

ライフル銃のメンテナンスを済ませながらほかの面々、もといマサキを探していた

「あの毒は表情からしてあまり強い毒ではなかった・・・ですがほつといっても危険ですから・・・」

考えながら茂みを歩いていると目の前があかく染まった

「・・・これは・・・」

火・・・いえ、炎

激しい炎が高く上っているのが見える・・・

近い・・・マイは走ってその炎の下まで向かった

・・・これは・・・

マイが見た光景

それは赤い髪の子の背中から激しい炎が空高く上がっている、これが火柱の正体……

そしてその赤い髪の子の目の前には……

刀を握った男があちこちにやけどし、倒れていた
あれは斬撃のリド……たしか少し前に強いやつを倒しまくっていた問題児……

その男がぼろぼろになって倒れている

あの赤い髪の子……何者？

「さて、邪魔者はいなくなったし、ほかの連中は……まあどうでもいいか、早く目的のマサキを探そう……確か、白い格好した女が連れて行ってたな」

そういつてあたりをきよろきよろする赤い髪の子

「……ん？貴様は……」

そして近づいてきた私に気づいたらしい

「……なるほど、あの男負けたのか……見た感じ、傷ひとつないな……さすが天才少女、絶対に負けない戦術でもあるのか？」

そういつて私のほうに炎が靡く……

この炎・・・普通の魔法じゃない・・・

「・・・魔術師」

私は静かにそういった

「さすがだな、正解だ、俺は・・・魔術師だ」

魔術師・・・見たのは初めてです

魔術師は魔法とは違った攻撃術を身に着けている

普通は魔力を消費し魔法発動をするのだが魔術は一切魔力を使わない

使うのは・・・己の身の何か

いろんなものを犠牲として使うと聞いたことがあるが・・・中には命を賭けてまで使う魔術もあるとか

「魔術・・・“火炎の豪魔”俺はこの魔術を身に着けていらい、体が燃えるように熱くてね・・・すごく苦しい思いをしているが・・・見てみるこの力・・・最高じゃないか」

そういつて両手を広げ炎を過激にする

「この力のおかげで、学園側の裏では炎の魔人、なんて呼ばれるようになった、気に入らない通りナだよ・・・ま、いい」

「その力まで得て、なんでマサキを狙うのですか？」

「お金・・・が目的でもあるが、一番は力を見せ付けることだな」

「・・・そうですか」

何でしょう、この胸の奥かわ沸きあがる熱いものは

とてつもなく、この男を倒したいと思っています・・・

これは・・・怒りなのでしょうか

私は銃をリロードすると、銃口を男に向けた

閻魔

ドンドン！！

リロードを引くと同時にすばやく引き金を引く、そして弾が二発、魔術師である髪の赤い男に向かって一直線に飛んでいく

「・・・ふん」

その弾を見向きもせず、手をあげると・・・

バワアアアン！！！！

何もない空中でいきなり炎が現れた

そして私の撃った弾は炎のせいで狙いがそれてしまい、少し横にある黒こげの木に直撃してしまいました

初めて私の放った弾が外れた瞬間です・・・

「ただの銃で戦おうとか、無駄だぜ。爆炎爆風で弾なんていくらでもそらしたり燃やしたりできるし・・・ましてや俺に触れることなんてこともできないだろうからな」

子薪炭短と話し説明する髪の赤い男、まさにその通りだ、どれだけ撃とうが相手には当たらない

それに私ひとりとなると・・・隙を作ること

「やべ・・・眠っちゃってた・・・」

そう考えていると、あちこち焼けどして倒れていたリドが刀を握り

立ち上がりだした

眠ってたというか・・・気絶してただけなのでは？

「・・・貴様確か・・・前にマサキに助けられた女か？」

「そうですね、なので私はマサキにつくすためここにいるだけです」

「つくす？ふざけるな何様だ貴様？俺はマサキの力になるためにここにいる、お前なんて必要ない」

「力ないわくマサキに助けられたあなたがマサキのどんな力になる？」

「いつてくれるじゃねえか・・・」

「・・・いやいや、なんで揉め事になってるんだ？」

私とリドの言い合いにあの赤い髪の男が髪をぽりぽり掻きながら突っ込んできました
なんか一瞬忘れてました

「・・・ツチ、話は後だ、まずはお前から倒してやるよ」

刀の剣先を赤髪の男に向け、言い張ったリド

「ふうん、やれるものならやれば？」

いたって余裕の男、何か強い力をまだ隠してるのでしょうか？

「いくぞ!!」

そう思った矢先、刀を構えリドが赤髪に突っ込んでいきました

「無駄なのになぁ・・・」

男は両手を真上に上げた、特に呪文を唱えてないのに、上空には先ほどの火柱が上がり始めた

「だめです！斬撃のリド！！離れてください！」

「だまれ！！」

リドは私に声に耳を貸そうともしません、仕方ありません

「“空気弾”」

ドン！！

銃口をリドに向け、引き金を引いた
そして一発の弾がリドめがけて飛んでいき、リドに直撃しました

「ごふう！？」

直撃した瞬間、リドは吹っ飛んだ、

そしてつい先ほどまでいたリドの場所は、突然と炎の渦となっていた

「・・・な？」

リドが驚きの表情をする

「・・・ほう、見破ったのか？」

「先ほどのあなたが私の弾を回避させたとき、炎の現れ方が気になりました。そして先ほどの火柱、それらを考えて見ました、目測と推測ですが・・・あなたの炎はあなたのおよそ半径5メートルまでしか操れませんね？」

「・・・正解だ、さすが天才少女、油断はできんな」

「・・・なんだと」

感心した赤髪、そしてさらに驚きの表情となったリド

「・・・さて、すこしだけ、反撃します」

そういつて再び銃口を向けた

「・・・」

リドは黙って立ち上がり、刀を再び構えた

「おもしろいね、勝ち目なんてないのに」

さらに炎が激しく燃え出した

やはり、余裕を持っていたのだろうか？

「・・・操るのは無理でも、放てばどこにしようとも攻撃は当たる・
・

“ テン・ガ・バースト ” 」

初めてだろうか、男が呪文を、技名を答えた
すると激しく燃え盛る火柱から、無数の炎の玉が飛んできた

「な・・・!？」

「・・・!!」

数が、多すぎる、こんなのよけられない・・・

ドンー!!

すると、誰かが私を押し飛ばしました

・・・飛ばした相手はリド

「・・・借りはつくらねえ・・・」

私はそのまま茂みの奥にとばされました

そしてリドめかけ、無数の炎が・・・

直撃しました

土煙が上がり、火の粉が散り、休むことなく次々炎がとんでいく
リドの姿がまったく見えません

かばうとは、バカな人です

・・・攻撃が終わったのでしょうか、土煙は上がったまま、あちこち、火がまだちらちらしてるのですが・・・それでもリドの姿が見えせん

「・・・灰になって消えたか、それとも・・・まあ、どの道無事じゃないだろ」

男はいたって余裕という感じです

・・・リド

強い男とだけ、認識しなおしましょう

「さて、どうする？」

男が私に問いかけます、どうしたことか・・・

すると、土煙から、光がピカアッと現れました
いったい何なのでしょう・・・？

土煙が晴れ、そこに一人の女性が立ってます、ミリン・レイ、額には汗が見えます

そして彼女は、ガード魔法、プロブルーガードを発動してます

青い壁が現れ、術式魔法をガードする魔法・・・けっこうな魔直を使うものです

そしてレイの足元には、リドが倒れてました

「・・・はぁ・・・はぁ・・・」

「・・・あの女は・・・っ!？」

レイを見て驚いてる男に、一人の男がすばやく現れ、拳をぶつけました

彼は・・・ミサ

「・・・はぁ・・・はぁ・・・間に合ったのかな？」

彼もまた、レイと同じ戦って勝ち、ここにきたのでしょう
見た目はすでにぼろぼろです

「・・・3対1か？俺はかまわんがな」

目の前に立ちはだかる、大きな炎を目の前に、私たち3人は立ち上がりました

チームワーク

ドンドンドン！！！！

バアガン！

ヒュヒュ！

マイが魔術師の男めがけて引き金を引き、撃とうとするが、男は自分の5メートル半径なら自由に炎を出したりすることのできる魔術を持っている

そのためうかつに近づけないでいる。

リドはマイをかばってやつの攻撃を食らって戦闘不能となり、今は3対1だ

「ライトニング」

ジャジャアアアア！！！！

しかし、鍵を握る仲間がいる

それはレイ、彼女が現在唯一の術師
遠距離の超攻撃なら当てられる・・・

「よっと」

ライトニングで発動された雷の槍
しかし、軽く飛んで雷をかわす男

「3対1でも・・・こんなもんなのか？」

いたって余裕の男、早く手を打たないといけない

「うおおおお!!」

そのとき、背後にいたミサが拳を固め、男めがけ襲い掛かった

「!!」

男が気がついたのか、咄嗟に後ろを向き、手を振った

すると近づいていたミサの体から火がでてきた

「あっちい!!!!」

ミサは男から離れ地面に転がり、火を消そうとした
しかしなかなか消えない

「レ“レインシャワー”!!」

レイが咄嗟に魔法を唱え、軽い雨を降らせた、しかしその雨も3秒
ほどで消えてしまう

しかし、ぬれた地面とかかった数滴の雨でなんとか火を消したミサ

「はぁ・・・はぁ・・・あ、危なかった」

顔が泥で黒くなり、汗をぬぐうミサ

(・・・今では)

一見絶望的な光景だが、マイは今の一瞬である秘策を考えていた

マイはレイに近づき、小声でいった

「・・・あなたのいま覚えている最大級の攻撃魔法をやつに向かつてぶつけてください」

「え!?! えっと・・・あ、はい・・・」

たった今はじめて話しかけられ、困惑しているレイをよそに、今度は膝をついているミサに話しかける

「私の合図でやつに力いっぱい攻撃をぶつけてください」

「え? あ、うんやってみる」

一瞬同様したが理解はしたようだ

・・・ここからが反撃の開始だ

「作戦は終了か? ならいくぞ!」

男はおとなしくまっていたらしく、話が終わったとわかると両手に向け、炎を放つ

私はその炎に銃口に向け・・・

「“空気弾”」

弾を放つ

直撃した弾からはものすごい風が噴出し、炎を消した

「・・・ほう」

そして後ろで魔法を唱えていたレイ

「淵底なる場所より天にめがけ光の業火を！！
“リダアベルンドウ”
！！！」

すると男の足元に魔方阵が現れ、パアッと光が集まる
その光が一気に天めがけて光りだした

「うぐう！！！？？」

男は炎を体にまといっているがかすかにダメージを食らっている

「いんです！！！」

マイが叫ぶ、すると待機していたミサが炎の拳をまとった

「・・・食らえ！！
“フレイムアッパー”
！！！！」

その拳を思い切り男の顎から上へと叩き込んだ

「ぐはあ！？？」

初めてのクリーンヒット

男はそのまま倒れこんだ

「・・・な・・・なんだと！？？」

「あなたの魔術、かすかですが手で操っているのを見ました、です
ので両手をふさげば攻撃できないとみました」

マイが倒れている男にいう・・・すると男は不気味に笑い出した

「・・・はははは！！！！楽しいじゃないか、すこしはできるみたい
だね・・・」

すると男は再び立ち上がり、背中から火柱を出した

そして両手を夜空いっぱいに掲げた

「・・・貴様ら・・・一寸の灰となれ！！“ファイアフルディスト
ン”！！」

そのとき、空が赤くなった

真上が炎で埋め尽くされている・・・といえはいいのだろうか
とにかく、巨大な炎がこちらに向かって落ちてきている

・・・かわせない

そのまま炎は地面に直撃した

意識が薄れる

爆風で吹っ飛ばされ、レイ、ミサ、マイ、リドは並んで地面を転がる
そして周りの木々はすべて燃え、灰となってしまっていた

「・・・本気になれば、お前らなんてこんなもんなんだよ・・・」

男が冷静さを失い静かに歩み寄ってくる

「・・・く・・・」

「意識はあるか・・・安心しろ、すぐ楽になる」

・・・もうみんな限界だ、

ぼろぼろで魔力もほとんど残ってはないだろう

男が腕をこちらに向ける

ちりちりと手の平に炎が集まり、丸い形となっていく

「・・・終わりだ」

男が炎を放とうとした瞬間だった

チリン

鈴の音が・・・聞こえた

すると、男がなぜか吹っ飛んだ

「ぐはぁ!?!」

何が起こったかぜんぜん理解できない

すると男の立っていた立ち位置に、ボワァっと光が集まりだした

そして・・・一人の男が現れた

「・・・まったく、見てられないよ・・・レイ」

その男が赤い髪、赤い尻尾を生えており、首に鈴をつけた・・・精霊だった

アキの怒り

突如あらわれた人間・・・いや精霊

姿は人間ですがあの現れ方はあきらかに精霊だ
その証拠に赤い耳と尻尾がある

マイは心の中でそう思っていた

「ふう・・・よく寝たよ・・・それにしても・・・僕の主人に何するんだい？」

赤い尻尾の猫人間はドスの聞いた声で相手にいった

「主人？あの白い格好した女のことか？あの女になぜお前ほどの男が契約を結んでるのは気になるな・・・」

「あ・・・アキ・・・勝手にでてこないでよ・・・今回は仕方がないだろうけどさ」

白い格好の女、レイは倒れながらもアキをみた

「ゆっくり休んでいて・・・」

するとアキは男をにらんだ

全身からメラメラと火がうかんでくる

「お前も火属性の魔法使うのか・・・いや、精霊だから魔法ではなく能力か・・・」

そういつて男は腕を広げた

それを合図に再び背中から火柱が上がる

そしてその火柱をエネルギーにするように炎の玉を作った

「手始めに・・・こいつはどうかない！」

そういいながら炎のボールをアキめがけて放った

一直線にアキめがけて吹っ飛ぶ

しかしアキはよけようともせず、大きく口を開けた

そしてその炎の玉を・・・

すううううう！！！！

思い切り吸い込んで飲み込んだ

「・・・ごくん。・・・ぷはあ」

まるでジュースを飲むように炎の攻撃を飲み込んでしまったアキに男は驚愕した

「・・・ははは、予想をはるかに超えてしまっているね」

「炎の能力を扱う俺にとっては、火、炎は力の源だ、その力を自分に取り入れることぐらいできるさ」

そういつて先ほどよりも激しい炎をたなびかせるアキ

「面白いよ・・・それなかこれはどうだい？」

そういつて手のひらで炎をだす男、そしてその炎は細長い形になるとその先端が鋭く上がった

「フレイムアロー」

そしてその炎でできた矢をアキめがけ放つ

「・・・!!」

アキは先ほどと同じように炎を吸い込むかと思われたのだが、なぜか咄嗟にかわそうとした

しかし炎のスピードはすさまじく早く、ぎりぎりのところで肩をかすれた

ドス！

炎なのになぜか鈍い音がし

「があ!!」

アキが肩を抑えた折れ込んだ

すると炎があたった部分から血が流れ出し、痛々しそうに肩を抑えながらアキは立ち上がった

刺さった炎はしばらくするとぶうんと小さくなり消えてしまった

「・・・なるほど、魔術、フレイムアート・・・炎をさまざまな形にして攻撃する魔術か・・・」

「へえ・・・なかなか魔術に詳しいんだね・・・正解だよ。炎を尖らせて刺したり、弾にして撃ったり・・・体の燃える暑さに耐えこの魔術を得たんだよ」

そういつてさまざまな形の炎をだし、ぐるぐる回して遊んでいるように見せる

「これまで無敗の魔術に・・・どう手をうつ!! 精霊!!」

そういつてさまざまな形をした炎がいつせいにアキめがけとんでいった

しかし、アキはよけようともせず・・・足に炎をまとった

そして炎が当たる寸前・・・すさまじい炎の蹴りをアキが放った

ぶおん!!!

たちまち、いろんな形の炎は、一瞬にして消え去った

「んな!？」

男もさすがにこれには驚いたのか、めずらしく眼を丸め汗をかいていた・・・

「・・・君の苦労とか、魔術とか・・・強さとか・・・んなもんどうだっていいんだよ・・・ただ・・・

レイに手をだしてただで済むと思うなよ」

その瞬間、アキの体の半分から赤い毛が生えた
そしてそこから今まで見たこともないような激しい炎がなびく

その姿は赤猫の名にふさわしいといってもよい

「・・・いくぞ

“ファイヤーブレス”！！！！！！」

アキは口から炎のブレスをふいた

そのままブレスは一直線に男のほうにとんでいく

「・・・俺が・・・負ける・・・だとお！！！！」

そう叫び男にブレスが直撃した

男は吹っ飛ぶと、そのまま動かなくなってしまった
生きてるのだろうか？

レイが静かに立ち上がり、アキのほうに歩いていった・・・が

「・・・が・・・あ・・・がああ・・・」

・・・アキの様子がおかしい

「アキ？か、勝ったね！ありがと・・・う？」

アキの体から激しくたなびく炎が一向に治まってい
ない
それどころか炎は激しさを増し、アキ全身が炎に包まれた

「が・・・あ・・・にやあ・・・にやあああああ！！！！！」

高らかに叫ぶ猫の鳴き声

炎の形が変わった

その姿は人とは当然いえない・・・燃え盛る猫の姿だった

赤猫の暴走

突然アキの全身が炎と化し、さらに姿は猫となった

暗い夜ではとてつもなく明るく見えるその炎の体はだんだん激しさを増す

「アキ!? 何が起こってるの!! ねえアキってば!!!!」

必死に叫ぶレイ、しかし言葉に耳を貸そうとしないアキが叫びながら首をぶんぶん振っている

「にやあ・・・にやがあああ・・・」

激しく燃え続けるアキ、周りの木々にも火が移り、たちまちあたり一面炎がまわってしまった

「・・・もしかして、暴走なんじゃない?」

「え?」

マイが驚きのことをいう

「見たところ、彼は精霊と人間の間柄の存在、きっとバランスをとって戦ってるんだろうけど・・・さっきの攻撃のとき、体の半分が猫の手になっていた・・・きっと、今の彼の姿は精霊であるべき姿なんだよ」

精霊であるべき姿

人間と精霊の間柄にいるアキは、人間の姿に尻尾と耳が生えた魔人・

そして今の姿は完全なる精霊の姿・・・

「バランスが崩れてしまつて暴走している・・・早くとめないと精神が崩れて・・・」

「・・・崩れて？」

問いただすと・・・

「・・・アキの人間である精神が崩壊し、暴走が続くとなれば・・・バランスが完全に崩れ・・・消滅する」

「え・・・」

マイの言っていることが理解できない、
消滅、消える、つまり死ぬ？

「そんな・・・！？」

「100%とは言つてません、するかもといっただけ・・・精神が強ければそれなりには大丈夫なのですが・・・あなたが召還停止すれば早いのですが・・・」

召還停止、召還した精霊、もとい魔物を元のカードに戻すこと

しかし今アキは自分自身の魔力で外に出てしまっているため、戻すことができない

「どうすれば・・・」

そういうとマイはいつもの冷静な無表情な顔でいった

「倒す、ただそれだけです、一度倒してバランスをもう一度力づくに安定させては・・・」

倒す、それは容易なことではない

精霊にはさまざまな力をもつものがある、しかし見た感じだと赤猫のアキの姿は炎を取り巻く化け物にしか見えない・・・いまのレイたちには倒す力などまったく残ってはいない

それでも・・・

「やるしかないか・・・」

レイが燃え盛る猫、アキを見ながらつぶやいた

（絶対・・・消させない）

そのころ・・・

「・・・ん・・・く・・・?」

暗い・・・どこだここ?

黒い服装で、すでにぼろぼろだったマサキ
長い間気絶していたようで、あたりは真っ暗
なぜか体中に草がまかれていた

「・・・えつと・・・たしか」

マサキは記憶を張り巡らせた

ミサと買い物して、夜ごはん食べる約束して・・・はっ!!

「そうだ!! 変なやつらに襲われて・・・たしかみんなが助けに・・・
みんな?」

みんなが助けてくれたことは覚えてる、だがその後俺は・・・倒れて

「つく・・・そ、みんな探さない」と

咄嗟に立ち上がったマサキ

しかし体に力が入らず、膝をついてしまう

・・・みんな・・・

そのとき、月明かりがさし、目の前に一人の人物が立っているのに
気がついた

「・・・!?!だ、誰?」

その人物、一瞬警戒はした、すると・・・

ピロリィゝ・・・ピロォゝ

笛の音に気がついた

見ると目の前に立っている人物が吹いているらしい
顔はよく見えないが服装は青い動きやすそうな素材の服、腰には白
い布のようなものが巻かれてあり、下の服装は白いジーンズのような
感じの素材

そして・・・月明かりがその人物の顔を映し出した

「・・・」

言葉を失った

首元にはマフラーのようなものが巻かれてありよくは見えない
頭にもぼろぼろの布が巻かれ、ところどころ黄色い髪がはねでていた

そして顔・・・絵にもかけない美しい顔をしている
一瞬女かと思われたが、男にも見える、性別の判断ができない

白い肌に黄色い髪が片目を隠している
もう片方の目は笛を吹いているためかつぶっている

月明かりに笛を吹くこの美しい人物はとても幻想的に見えるくらいだった

やがて・・・笛を吹くのをやめ、静かに口をひらいた

「・・・今宵はさわがしいこの茂みの森、・・・ダイダロボスは赤く光る」

よくわからないことを口にした

声・・・これもまた美しく響き渡る声質だが・・・これでも男女判断ができない

「・・・漆黒の剣士」

突然と目をあわせられ、あせる

「えっと・・・俺のこと？」

「ああ、その姿、そして先ほどの武器を見て君は漆黒の剣士の名が似合う・・・」

「そ、そう・・・てか先ほどって戦ってたの見てたの!？」

「ああ、なかなか独断的な戦い方で目をひかれたよ」

ほめてるんだよな・・・？

なぞのその人物は俺に膝をついている俺に手を差し伸べてきた

「・・・この気配、精霊が暴れているね、近くだ」

「精霊？」

「ああ、炎を操るみたいだ」

どこも見えていないはずなのにどうしてそのようなことがわかるのか、
わからなかったがなぜかこの人のいうことがうそだとは思えない・
・なんなのだろう

俺は静かに差し伸べられた手をとって立ち上がった

「さて、行こうか・・・」

静かに歩き出したその人物に、俺はただただついていった

最強

暴走した赤猫を止めるため、全力で戦うレイ、マイ、ミサ
リドはマイをかばった攻撃を食らってまだ目を覚まさない

「にあああああがあああああ！！！！！！！」

炎の尻尾をぶんぶんとふり、火の粉がでる
動きも本物の猫と変わらないのでとても早い

ドンドン！！

マイが赤猫めがけ何発も連射してるのだが・・・

ぼんぼん！！

弾は直撃してるのだろうがまったく食らっているそぶりを見せない
まるで本物の炎だ

「“レインシャワー”！！」

レイが魔法を唱え、軽い雨を降らせる
しかし、炎の勢いは収まらない

「“ファイヤークラッシュ”！！」

ミサが手に炎を舞い、片手だけで何発もパンチを放つ
だがこの攻撃もまったくって無意味だ

「にゃあ！！！！」

アキがうつとうしそうに手をふる

「がはあ！？」

炎の手で吹っ飛ばされたミサは黒焦げの木に直撃した
そのときにもろくなっていたのか、焦げた木が根元からへし折れて
しまった

「ミサ！！」

「僕は大丈夫！！」

レイに名を呼ばれ返事をするミサ
しかし、このときアバラが折れてしまっていたのだ

（・・・くう・・・いたい）

痛みをこらえ、ミサは立ち上がる

「・・・“雷鳴”！！」

レイは静かに、その魔法を唱えた

すると空から雷が落ちてきて、アキに直撃した

「にやあがあ!!!!!!」

攻撃が効いたのか、アキは叫びあげた

「……っ」

レイがとても悲しそうな、そして苦しい表情になる

自分で自分の精霊を傷つけるのは苦痛でしかないからだ

「……もういや……目を覚ましてよアキ!!」

思わずアキの目の前にまで走って叫ぶ、しかし、アキは見向きもしない

「おねがい!! 暴れるのをやめて!!」

するとアキはぴたりと動きをやめ、レイをにらんだ

「お願い!! お願いだから!!」

涙を流しながら叫ぶレイだったが、アキは攻撃態勢に入っていた

「アキ!!!!!!」

レイが叫んだ瞬間、アキは炎の爪をむき出しにし、レイに向かって走り出した

「レイさん!!」

「!!」

ミサが叫び、マイが駆け寄ろうとしたが、アキのスピードは速い

「アキ!!」

レイに向かってアキが攻撃しようとしたそのとき

「“魔人剣”!!!!」

レイとアキの間に、黒い斬撃が飛んできた

「!!」

アキはそれに気づくと、咄嗟に後ろに下がり、斬撃をよけた
斬撃は地面に直撃し、深くえぐれた

「……え？」

呆然とたつレイ、目を凝らして斬撃が飛んできた方向を向く

「こいつは・・・」

そこにはアキを見て驚きの表情をするマサキがいた

「・・・マサキ?なんで?」

「あ、ああ、目が覚めてみんなが助けに来てくれたこと思い出して駆けつけたんだけど・・・どういふ状況なんだこれは・・・?」

目の前に暴走しているアキがいるため、まったく状況を読めていないマサキ

「にやあ・・・ごあああああ!!!!」

そのとき、後ろにさがったアキは、レイめがけブレスをはいた

「れ、レイ!!」

「・・・!?!」

ブレスは徐々にレイめがけとんでいく

するとレイの前に一人の人物が現れた

どこから現れたかはまったくわからない、いつの間にか目の前にいたのだ

そしたその人物はアキが放ったブレスをたったの片手で簡単に止めてしまった

「んな!？」

「え!？」

マサキとミサが驚きの声を上げる、レイは声すらもでなかった

その人物は頭と腰に布を巻いており、首にマフラーも巻いていた
青い服に白いズボン・・・痩せ型

「精霊の暴走だったか」

その人物は冷静にそういうと軽くそのブレスのかかった腕を押した
するとうそくの火を消すようにアキのブレスは簡単に消えてしまった

「・・・暴走のアキの攻撃を片手で消した？」

レイはなにが起こったか理解できず呆然としていた

「・・・あなたは!？」

するとマイがその人物を見た瞬間、驚きの声を上げた

「え？知ってるの？」

マサキがマイに問いかける

「・・・破壊神・・・シノ・ライダーツ・・・この学園最強の人です」

マイが・・・恐る恐る答えた

「・・・学園最強・・・破壊神!？」

みんながいつせいにその人物に注目する

「首脳のマイか、さすがだよ・・・僕のことはあまり知られてないはずなんだけどね」

その人物、シノはあわてる様子もなく、ただただアキを見ていた

「暴走か・・・君が主人か？」

「え、は、はい・・・」

振り向きもせず問うシノにレイはあわてて答えた

「そうか、僕が合図を出したらすぐに精霊停止してくれ」

すると返事を聞かないままシノは地面をけり、恐ろしいスピードでアキの後ろに回りこんだ

そのスピード、遠くから見ているマサキやミサの目からもまったく

見えないスピードだった

「加減する・・・死ぬなよ」

そうつぶやくとシノは何もない空中をパンッと軽くたたいた

するとたたいた前の何もない空間が・・・ゆがんだ

「にゃがあ!!」

するとアキの炎が一瞬、消えた

「いまだ!!」

「は、はい!!」

シノが叫んでレイが返事をする

レイは手を前に出した

すると消えかけたアキの体の下に魔方陣が現れた

そして魔方陣から激しい光が現れ、目の前が見えなくなる

「にゃあああああ!!!!!!」

アキが、力強く叫んだ

フツ・・・

光が消えると、そこはなににもなかったかのように静けさが続いた

「レイ・・・」

マサキは恐る恐るレイの名前を呼んだ

「大丈夫だよ、アキ眠ってるみたいだ」

胸に手を当て、ほっとした表情でいうレイ

「よかった・・・」

マサキたちの周りは黒こげとなった木々がたち、そして空から降る星の光が、その広場を照らしていた

殺人組織 レッドチェイン

あれから一時間が経過

先生たちが事情と出来事を調べにやってきていろいろと聞かれたが俺、マサキは気絶していたため事情をしらないみんなの話からすると5人組は依頼され俺を襲ったとか

「ふむ・・・それで、その依頼主はだれだ？」

「・・・」

かなり丈夫そうな手錠をかけられている4人組女の子もいた気がするけど・・・見えないな？

かなり早く駆けつけたミツキ先生が腕を組みながら仁王立ちしている一向に無言の4人のうち、一人の赤い髪の男がゆっくりと口を開いた

414

「依頼主の正式名はわからないが、その男がいる組織ならわかる」

「ほう？どこだ？」

男の答えにさらに問いかけるミツキ先生

「・・・レッドチェイン」

「!!」

その名が出た瞬間、周りの表情が凍りついた

「・・・な、なあ・・・レッドチェインって？」

「・・・・・・・・」

ミツキ先生が俺を見つめ、額に汗をためている

いつも冷静な先生が・・・めずらしい

「・・・レッドチェイン、このランブドラという国のある大陸をリベイントというのだが・・・」

リベイント・・・？

俺の国で言う北アメリカ大陸とかそんな感じだろうか・・・

「そしてリベイント大陸で最強最悪殺人組織・・・・・・・・それがレッドチェインだ」

「・・・え？」

最強最悪殺人の組織？

「今ではその組織は1万人を超えているという・・・このリベイント全体で犯罪数をほとんどがその組織の仕業なのだ・・・」

「・・・えっと、そうすると・・・こいつらを使って俺を襲わせたってことは・・・俺その組織に狙われてるの？」

「・・・ああ、その可能性は十分にある」

・・・一瞬気が遠くなる

なぜ俺が命を狙われてるのだろうか・・・

「・・・マイをさらったギンディアムって組織はレッドチェインの部下みたいなものだ、多分興味本位だな」

「そんな!!!」

興味本位って・・・みんなが来なかったら本気で死ぬとこだったんだぞ!?

「まあ、今後気をつけないとな・・・あの組織は本気でやばいから」

「・・・はい」

この世界では本当に平和が訪れないな・・・

「リド、ミサ・・・大丈夫か？」

先生からいろいろ話を聞いた、あの4人組には罰が下るらしいそして大怪我をしたリドとミサのところに向かった

「・・・おう、マサキ。必死になったんだがな、このざまだ」

「いや、とてもうれしかったぞ・・・こんなになってまで戦ってく

れてありがとう」

リドは全身のほとんどを焼けどしたらしい
あの長い髪は半分近くが燃えて灰色だった紙が黒く茶色の部分がち
らほら見える

「ミサ？お前は大丈夫か？」

「うん・・・ありがとう」

ミサは全身に激しい打撲とアバラ2本を折ってしまった

「・・・みんな、本当にありがとう」

俺は再び、助けに来てくれたみんなに感謝した

そして・・・

「シノって・・・いったか、こんなことに巻き込んだ挙句助けてく
れてありがとう」

「気にするな、これも運命と思ったほうがいい」

その男？はクールにそういうとミツキ先生のところに歩いていった

・・・知り合いかな？

「ふむ、おまえが絡んでいたか」

ミツキ先生がシノに言う

「問題は解決してる、それでは・・・」

意味の不明な短い会話が終わった瞬間

ボン！！

白い煙とともにシノが消えてしまった

・・・シノ・・・不思議すぎる人だった

「マイ、レイ・・・ありがとう、ゆっくり休んでくれよ？」

「わかりました、それでは」

「お休み！マサキ！」

一応ぼろぼろの二人、だがなぜか元気すぎるので問題はないだろう

明日からはまた問題のない日常が始まるのだろうか・・・

何かが確実にゆがんでる、そう思っている

チームメンバー

休みの明けた日

学校の登校日である今日

マサキはカーテンからもれる日の光で目を覚ました

「・・・」

今日からまた普通の日常になることを願う

なぜなら俺はこの大陸最強と言われる殺人組織、“レッドチェイン”に狙われてるといことだ

向こうは楽しんで俺を狙ってるといっていたが・・・どうなるんだろうな・・・

寝巻きから黒服に着替え、学園に向かう

黒服はここに来て以来なんだかんだで気に入っているいろいろ買ってしまった

今では5着も持っているため、外に出かけるときはいつも黒い服を着ているため学園の人には黒服とか黒ずくめとか・・・いろんな名で覚えてもらってしまった

まあ、なんでも覚えてもらえればいいんだけどな

学園の中に入り、階段を上って教室に向かう

さまざまな人の間を通り過ぎたときに、いつもと変わらない光景がなぜか不可思議な光景に見えてしまった

教室に入り、はじめにミサとリドのところに向かう

ちょうど二人とも何かを話していたみたいだ、なんだか新鮮な光景だ

「おはよう、二人とも」

「あ！おはよう！」

「よう」

ミサは笑顔で、リドは軽く手を上げ挨拶した

二人とも軽く包帯やガーゼをかけてる、ひどい怪我だったもんな

「怪我、大丈夫か？悪いな・・・俺なんかのために」

「そんなことないって！友達でしょ？」

「お前の力に慣れるのならどうだってないさ」

ミサは肋骨が2本折れていたのだが、回復魔法を受け、何とか感知した、

リドも全身焼けどをしていたのですぐに回復魔法を受けたところどころまだ痕が残ってるが本人は気にしていないあの長かった髪は今ではぼろぼろなので後ろに縛っている男のポニーテールというのもリドだとなかなかかっこいい

「そういつてもらえるとうれしいよ、ありがとう」

そのとき、ホーモルーム開始の鐘がなり、あわてて席についた

・・・

ミツキ先生が教室に入ってみみんなを見渡す

「さて、それでは連絡事項からだ、20日後、楽しみにしている奴もいるかもしれない、一期学園魔法大会が開かれる！」

そういうと教室のみんながまってましたと言わんばかりの歓声を上げた

「・・・？」

俺はなんのことだと思っていると、ミツキ先生が気を利かせたのか、説明を開始した

「みんなも知ってると思うが、この大会では10人以下のチームを作り、さまざまな条件での魔法で戦える大会だ、評判もあがるし魔法金額が上がる、しかも優勝商品もあるんだ、まあ、この中にはこの大会のために力をつけてきたという奴もいるだろう」

「へえ・・・すごいのあるんだな」

周りが騒がしい中、小声でそういった

「ねえ、ねえ・・・マサキ」

すると小声でレイがつんつんと背中をつついた

「ん？」

「あとで話があるんだけどいい？」

「話？」

どんな話なのだろう、これまでにいろんな出来事が起こっていたので、何の話題かわからなかった

「おう、いいぞ」

そういつて了承した俺、そしてその話は昼の休みに行われた

屋上にレイとともに向かった

「話っていうのは、大会のことなんだけど・・・」

「大会・・・ああ、あの魔法を使って戦うとかいう・・・」

「そう、それで・・・その・・・」

そこでなぜかレイが言葉をつまらせる

そして決心したのか、俺の目をまっすぐ見ていった

「チームを組んで、一緒に大会に出場しない!？」

それは、大会参加とチーム、いわゆる仲間になろうという誘いだった

「ああ、いいよ？」

その問いにあっさり俺は答えた

「・・・え!?! いいの!?!」

まさかの答えに驚くレイ

「ああ、それに、俺たちとつくに仲間だろ？」

レイとはこの世界で始めてあった人、レイに合わなければ今頃俺はどうなっていたか・・・

「ありがとう!?!」

レイは満面の笑顔でお礼をいった

すると、屋上の扉が勢いよく開いた

「・・・ミサ・・・それにリドにマイ」

そこにはいつもの面々がいた

「僕らも仲間、だよね！」

「俺はまだまだマサキの力に慣れたとは思っていねえ、力になるぞ」

「マサキが参加するのであれば、私にも参加させてください」

みんな・・・こんな俺のために・・・

「なんか、うれしいな・・・」

「え？」

「いや、俺今まで親友とか仲間とか、そう呼べる存在がいなかったんだ、だから・・・」

なぜかしんみりしてる俺に、みんなはただただ笑顔を振りまけてくれた

「さて、チームはこの5人として、どうするんだ？」

気を取り直し、チームとしての申し込みをする

「まずは職員室に行って紙をもらって記入、そしてチームによって与えられる部屋に行く」

マイが相変わらずの無表情でいう

「部屋？」

するとレイが遠くのほうを指差す

「ほら！あそこだよ！」

その指先にはさまざまな奇妙な形をした家が何件も建っている

「あそこはチームに与えられる部屋・・・というか家だね」

そこは俺が前に散歩で立ち寄ったところだ

あんな立派な家が与えられるとは・・・俺の世界じゃ考えられないな

「とにかく職員室に行こうよ！」

ミサの提案にみんながうなづく

職員室に行き、チーム記入の紙をもらったあと、すぐ近くの机を借りてペンをとる

まずチームのメンバーの名前を記入した
そして書き終わってあることに気がつく

「なあ？リーダーは誰？」

一番下に小さく、リーダーには○を記入せよと書かれてある
さらにリーダーは戦いで負けた場合どんな状況でもその戦いは負け、
とある、かなり重要な役割となるがいったい誰が・・・

「「「マサキ」」」

・・・4人の言語が一致してしまった

「・・・いやいや。俺はだめだろ？」

「いや、マサキしかないって」

「うん！僕たちはマサキにつられて集まったみたいなものだし」

「俺はマサキ以外の下につくつもりはない、覚えておけ」

「私もです、マサキではないと意味がありません」

「・・・・・・・・」

みんなが譲らないように俺はしぶしぶヒガシノ・マサキに○を記入した

「・・・あ」

俺はある空欄に目が入った

そこはチーム名を記入する部分・・・

「なあ、チーム名俺が考えたのでいいか？」

「マサキが決めるのなら何でもいいよ！」

「ああ」

みんなの了承を取り、俺はゆっくり、チーム名を記入した

アース

「・・・アース？」

「ああ、俺たちはチーム、アースだ」

「どういう意味なの？」

「・・・地球、俺の知ってるある星の名前なんだ」

俺は静かにそういった

「・・・うん！いいチーム名だね！！」

「ああ、なんだか強そうな名前だ」

「うん、いいと思うよ」

みんなが笑顔で了承してくれた

アース

俺の住んでいた星・・・俺は、帰れるのだろうか、もとの世界に

みんなが笑顔の中、俺はそのことが再び、頭から離れなかった

豪腕のアゲナス 魔法金120万ベル

細剣のジュイーナ 魔法金96万ベル

金髪のメデア 魔法金134万ベル

この学園で名の挙がっている2年の強いものたち

しかしこの三人組みが血だらけで地面に倒れていた

そしてその倒れている三人組のすぐそばに、返り血を浴びた一人の男が立っていた

「んだ？ランブドラには強い奴が山ほどいるって言うから、入学したってのに・・・この程度か？」

その男はマサキたちと同じ年齢、だが中に潜む闇はとても薄暗かった

再び、激しい戦いの幕が開こうとしていた

ソラ 再び

チーム名を記入後、紙を先生に提出した
すると先生がある鍵を手渡した

「これが部屋の鍵ね、壊さない限りは自由につかっちゃっていいから」

そういえば部屋がもらえるところか言ってたっけ・・・

「ありがとうございます」

俺は鍵を受け取ると、レイたちと一緒に部屋・・・もとい家の並んでる場所に向かった

「・・・ここ久々にやっぱすごいな」

そこは前と同じ光景が広がっている、まるで集合住宅だ

しばらくあるくと、ある家の前で立ち止まった

「・・・このようだな」

リドがつぶやく

「・・・ん?」

その家はほかとは違い今にも崩れてしまいそうな家で長年使われてない感じがする

「はじめはこんな感じなんだよどこも、戦いとか依頼でお金をためてからどんどんきれいにしていくんだよ」

まるで育成ゲーム感覚だなそれ・・・

不安の中、受け取った鍵をドアの鍵穴に差込み、ゆっくりと捻った
ガチャ

そのような音がし、鍵を引き抜いてゆっくりと扉を・・・

扉を・・・

「・・・あかないぞ？」

俺は体制を建て直し、力いっぱい扉を引いた

「ふん！！！！」

するとかすかに扉が開き、隙間に手を引いて一気に開く

ギィー・・・っとサビをかする音がし、そのまま扉を全開に開くと・
・

「うわぁ・・・」

想像していたのよりすごかった

中は床壁一面誇りだらけ、そして木材やら壊れたイスなどがところ狭しと落ちている

しばらくみんなとその一面を見ながら・・・

「・・・よし！掃除でもしよう！！」

レイが場を盛り上げようとそう提案した

「・・・そうだな、これから俺たちの拠点になるようなところだからな！」

そういつてみんなで家の中へと突入した

中はかなりひどかったが掃除できないほどでもなかった

部屋にある荷物はいったん外に出し、その後ほうきや雑巾であたりを磨いた

すると意外なことに、階段を見つけた

「・・・へえ、ここって二階建てなんだ？」

「え？そうなの！？」

ミサも二階があるのに驚いている

「ほとんどが一階建てなんだけど・・・よかったね！」

外からみたらほかとなんら変わってなかった気がしたけど・・・

ゆっくりと階段を上っていった

案外二回は汚れていなかった

天井が低いのがあれなのだが、部屋数が3室もある、これだったら個人の部屋に使えるな

一階の部屋数を数えてみると6部屋、そしてリビングのような広い場所が1部屋あった

「これだったらなんら不便はないね」

「うん！」

外はもう暗くなり始めたので、掃除はまた後日ということになった

部屋に帰り、風呂と飯をすめせ、ベットに寝転がっていた

そしてこれからのことを考えていた

・・・いつどんな強い敵が現れるかわからない、魔王を倒すため、そして・・・みんなを守るためにも、絶対に強くならなくちゃ・・・
そう考えた後、俺は深い眠りについた

次の日

授業を済ませ、再びみんなで部屋の掃除を再開した

そして・・・

「終わったな・・・」

「うん・・・」

みんな額に汗をあめ、何とか部屋の掃除を終わらせた

「後は家具とか必要だけど・・・それはまた今度でいいよね!」

「家具とか置くのか?」

「うん、普通の家と変わらないからね、設備をよくしたほうがいいでしょ?」

「なるほど・・・」

確かに、普通の家をもらったようなものだからな

依頼とか、がんばってこなして、お金とかためないと・・・

みんなでリビングに集まって今後の方針を確かめる

「これからどうするの？」

「まあ、大会優勝するには強くならなくちゃな、そうとなれば修行とか」

リドが提案する

「大会って参加者はどんな感じなんだ？」

「なんだ？マサキしらないのか？この魔法大会はランブドラ全土で行われ、ランブドラの人間であれば誰でも参加OKなんだよ」

「ほう・・・」

それだと上級生の強い人たちもいるのか・・・

「じゃあ、それぞれ修行して強くならないといけないわけか」

「そうなる」

するとマイが静かに立ち上がった

「そうと決まりましたら、私は早速研究をしてきます、勝つための、

ね」

そういつて歩き始める

「俺も、刀の使いかたがまだまだだし、妖刀のほうもな」

リドも立ち上がって部屋を出て行く

「僕も・・・この間みたいになんか負けるのは、いやだから」

ミサも拳を固め、部屋をでていく

そのとき、いきなり光の粒が集まり、一人の赤い髪の猫が現れる

「そうと決まれば、レイ・・・僕たちもいこうか」

「も、もう!! アキってば勝手にでるなっていうのもいつてるじゃん
!! それじゃあまた明日ね! マサキ!」

レイも赤猫のアキとともに、部屋を出て行った

「・・・力、か・・・俺も強くないと」

そういつて俺は、ある場所に向かった

古臭い扉をガチャリと開け中にはいる

「いらっしゃ・・・お、マサキじゃねえか？」

「久しぶり、ナナさん」

俺が異世界の人間と知って、さらにいろんな面で協力してくれる人だ

「どうした？強くなりたいのか？」

「おお・・・正解」

びっくちした、入って早々考えてることがばれた

「目を見ればわかるんだよ、決意をあらわにした目だ、それならちようにいいものがある、来い」

そういつて店の奥へと消えるナナさん

俺が来るのを知っていたような・・・すごい裏読みだ

奥に行くと、ナナさんがある巻物のようなものを持っていた

「こいつは強力な剣術を覚えるためのものが書かれてある」

そういつて俺に向かって巻物を投げてきた、俺はあわててその巻物を受け取る

「強力すぎるものでは魔力をかなり使うやつもある、本気で強くなるにはまず自分を磨くことだな」

「・・・ありがとうございます！」

めがねをかけ、タバコをすいながら説明するナナさんはとても渋くてかっこよかった

店を後にして、俺は修行ができそうな場所を探していた

「どこにするかなあ・・・」

するとそのとき、家と家の間から急に人が走ってきて、俺はよける暇がなくその人物と激突してしまった

「うお!？」

「きゃあ!？」

悲鳴を上げたその人物はとても小さい体で俺にぶつかった反動で後ろに倒れこんだ

「ご、ごめん! だいじょう・・・ぶ?」

俺はその人に声をかけたが・・・その人物は意外な人だった

「あ・・・」

「えっと・・・確かソラ？」

その人物はリドの実家を襲った陸空海という3人組の一人だった

しかし、見た目は美人な雰囲気の人だったが、今は俺よりも年下のかわいい女の子に見える

「なんでお前が・・・」

いるのか、そう聞こうとしたとき

「お、お願い・・・助けて!!」

ソラは目に涙をため、俺にしがみついた・・・

「・・・は？」

俺が呆然としていると、家の間からさらに人影が2人ほど現れた

「・・・!？」

そいつらは人間、のはずだが、なんか妙な格好をしており、さらに腕が銃になっている

「こいつは・・・？」

「さ・・・」

「ん？」

がたがたと震えるソラ、そして恐る恐る口を開いた

「殺人ヒューマロイド……」

ヒューマロイド、つまりロボット？

そのロボットの銃口が俺とソラの二人に向く

「いったい何が……？」

俺にしがみつきながら泣きそうなソラには、前に戦ったときの余裕の表情がまったく感じられなかった

殺人ヒューマロイド

突如として現れたかつて敵だったソラ

そしてそのソラを追ってか二体の人間ロボット、ヒューマロイドが銃口をソラに向けている

そして張本人のソラは敵として戦っていた余裕や表情がまったくなく、泣きそうな顔で震えている

「・・・目標ヲ補則、殲滅スル」

ジジッつというノイズとともに、かすかにヒューマロイドがそういつた

すると二体いっせいにソラめがけ走り出した

「ひっ！」

ソラは縮みこむ

「くそ!!」

ガス!!

俺は向かってきたヒューマロイドの一体を蹴り飛ばした

ドンドン!

「うおお!?!」

するともう一体のヒューマロイドが俺めがけ銃でできている腕で発

砲した

瞬時的によけ、弾は当たらなかった

「くそ!! たって! 走るぞ!!」

「う・・・うん」

そういつてソラの手を引き、引っ張っていく形で走った

しかし、ものすごいスピードで追いかけてくるヒューマロイド

「逃げて!」

俺はソラを押しだし、すぐさまトーチの黒剣を出して二体のヒューマロイドに向き合った

二体のヒューマロイドは立ち止まるとなによりやらピピっという機会音とともに戦闘体制に入った

「殺人ヒューマロイド・・・油断できないよな・・・“魔人剣”!」

そういつて俺は思い切り剣を振り切った

そして黒い斬撃をだし、ヒューマロイドに直撃した
見る限りかなりダイレクトにあたったのだが・・・

「なっ!?!」

ヒューマロイドは吹っ飛ぶとくると回転して地面に着地した

そして何事もないように再び戦闘体制をとった

「くっそ・・・」

どうしようか迷っているとき、ふと手に持っていた巻物をみた

・・・強力な技、これなら。

咄嗟に巻物を開き、目に留まった技を見た

“風鬼斬”

魔力を剣にためこみ、振り切ったときに鬼のような風斬りが起きる・

「い、イチかバチか」

俺は頭の中でその技を想像して、剣を溜め込み、振り切った
すると、大砲のような衝撃とともに黒い何かが高速でヒューマロイ
ドに直撃した

俺は反動が強すぎで後ろに倒れこんでしまった

「・・・無謀だったけど、すげえ・・・」

直撃したヒューマロイドのおなかには大きな穴が開いており、そこ
からコードか何かがぶら下がっている、何かがショートしてるのか
びりびりと電気が走っている

そして

ボォガン!!!!!!!!!!

盛大に一体のヒューマロイドが爆発した

「よし!!」

あともう一体!!

そう思ってもう一体を見たが・・・

なんと俺をすり抜けそのまま逃げているソラめがけ追いかけている

「・・・!!」

俺はあわててその後を追う

いくら走っても追いつけず、気がつけばあたりは木々が生えている
すると何か起こったのか、急にヒューマロイドが高く飛び上がりド
ンドンとソラめがけ発砲した

逃げていたソラの目の前が盛大に爆発し、ソラはその場に倒れこん
でしまった

そしてソラの目の前に立ち、銃口を向けるヒューマロイド・・・

「おりゃああ！！！」

・・・の背中を思い切りたたききった

ヒューマロイドはそのままソラの真上を飛び地面に転がり込んだ

「だ、大丈夫か！？」

俺は息を切らしながらソラの安否を確認する

「・・・うん」

そういうと静かに立ち上がるソラ

目の前にはすでに体制を立て直したヒューマロイドが立っている

「・・・下がってて」

先ほどの表情とは裏腹に今度は強気な表情を見せるソラ

するとソラは右手を抜き手のような形にした

その瞬間、右手が激しく光りだした

「！？なんだ・・・！？」

光が収まると、その右手は鋭い刃となっていた

服の襟から伸びるその刃は美しい銀色の輝きを保っていた

「・・・“ハンドソード”」

そういつてソラはヒューマロイドめがけ走り出した
ヒューマロイドも同じタイミングで駆け出す

ガチャリと銃口を向けるヒューマロイドだが、ソラはすばやくその
銃である腕を切り落とした

「・・・損傷40%・・・」

ヒューマロイドがロボットと思えない声でそういうと、ソラはすば
やくその胴体を真つ二つに切り裂いた

そして崩れ落ちるよう、ヒューマロイドは爆発し錯乱した・・・

「・・・いったい何者なんだ？」

目の前にいるソラはこの間見たときとは明らかに見た目年齢が違う
美人だった人が今では中学生くらいの体系だ

そして何より右腕

先ほどは刃となっていたが今は普通の手に戻っている

「・・・確かりドの家を占拠したときにいた・・・」

「・・・ああ。マサキだ」

「そう、マサキね・・・ありがとう、みっともないところ見たね」

余裕もなく、深刻な表情でいうソラ、一体なにがあったのだろうか

「・・・あのさ、私の立場ではこんなこというの、とても失礼なことなんだけど・・・さ」

「ん？なんだ？」

「・・・かくまってくれませんか？」

そういう彼女の表情から、うそなんか言っていないと直感的に伝わってきた

事情を聞くため、ソラを俺の部屋に連れてきた
イスに座らせ、飲み物を出して落ち着かせる

落ち着いたのか、ソラはゆっくち口を開いた

「私、一応この学園の生徒なんだよ」

「え？そうなの！？」

「うん、ただ行っていないだけ、家は東にある」

俺を安心させるためか、そういうと話の話題が変わった

「それでね、私は・・・人口的に改造された人間なんだ」

「・・・改造？」

さっきの刃のことだろうか

「私はね、生まれたところから、体の中にすごく強い魔力を秘めてたの」

そしてソラは淡々とことの成り行きを話し始めた

小さいころから改造され、いろいろな実験をされてきたソラ

そのソラを実験していた施設がかなり盛大なところで、核兵器や人体実験もされている施設だという

ある日、ソラは施設にいる一人の人間の手をかりて施設から脱出したという

その日からソラはいろんな組織においてもらい、時に逃げ、それを繰り返して生きてきたという

「・・・でも、最近になって施設の連中にここにすることがばれて・・・今日ヒューマロイドが襲ってきたの」

「そうだったのか・・・」

あの時、まるで女王のように戦っていたソラだが、こんな状況を隠してたなんて・・・

「ごめんね、巻き込んだじゃって・・・前のことで二回も迷惑かちやって」

「ふーん・・・別に俺は平気だけど、案外優しいんだな」

そういうとソラは顔を真っ赤にした

「や、優しい!？」

「ああ、戦ったときは女王様みたいで、悪いやつって感じだったけど、実際はこうして泣くし悪いことしたと思ったら反省する、優しいじゃないか」

「あ、ありがと・・・あのときの性格は・・・その、組織入るときとかはいろんな性格してきたから・・・す、姿とかも、力使って変えてただけで、本当の姿がこれで・・・」

あたふたとあわてるソラを見て、再び悪いやつじゃないんだなっと思う俺だった

次の日の話だ

俺は、みんなにソラのことを紹介した

「こ、この人・・・」

「わぁ・・・」

ソラを見て、レイとミサはかなり驚いてる・・・

そして・・・

「何しにきた貴様」

刀を片手にリドはソラをにらんだ

「ま、まてって！俺が連れてきたんだ！」

「・・・マサキが？何考えてるんだ！？」

リドがものすごい血相で俺をにらんでる、まあ無理もない

「そ・・・その、ごめんなさい！！！」

ソラはリドめがけ頭を下げた

「あの時！とても取り返しのつかないことをして・・・とても苦しい
思いをさせて・・・ごめんさい！」

「ふざけんじゃねえ！！いまさら何もかも遅いんだよ！！！」

金持ちではあったリドだが、今はリドのお父さんは店で必死に働いてる

そんな生活をしている父を見てなにも思わないリドではない

「みんなに、話があるんだ」

「なんだ!？」

俺の話に、リドが機嫌を悪くしながらも耳をかたむけた

「・・・ソラを仲間になりたいと思っている」

「・・・はあ？」

「え・・・」

リド、ミサ、レイ・・・そしてソラまでも驚いている

「・・・おい、マサキ。俺がこいつをどれだけうらんでるかわかってるだろ!？」

「そうだけど! ソラも今まで生きるために必死だったんだよ!」

「じゃあ生きるために俺の家を襲ったってのか!？」

「そういうわけじゃない!!」

俺とリドが口論となる

「や、やめてください! マサキ! リドさんの言うとおりです! 私は取り返しのつかないことをしたんです!!」

ソラが間に割ってとめる

「・・・敵を見方にしようとしてるとか、どうかしてる・・・俺はこんなやつに力を貸してたのか」

リドがあきれたようすか、刀を持ち、外に出て行った

「・・・なるほど、複雑ですね」

それを影で聞いていたマイ

「・・・いろいろ裏がありそうですね、マサキのためにも私も力になってみましょう」

天才少女、マイはそういうとゆっくりと立ち上がった

みんな

「聞くところ、リドの以前の実家を襲った仲間の一人がソラさんです
ね？」

「は、はい・・・」

マイが無表情でソラに質問している

「あれ？あの子の姿って確か・・・もっと年上のお姉さんって感
じだったけど」

「あ、あれは・・・」

そういうといきなりソラの体が光りだした
まぶしすぎて目をつぶってしまうと、光は静かにやみ始めた

そして光がおさまり目を開けると・・・

「・・・うわぁ・・・」

そこには以前戦ったときのソラがそのままいた

「私は想像することを体の一部分を使って出すことのできる人工能
力・・・“思想具現化”、この姿も私の想像を具現した姿なの・・・
まあ、いろいろとできることは限られるけど」

人工能力・・・これがか、なんだか特殊能力とはどこかが違う・・・

そして再び光りだしたソラは先ほどの子供っぽい姿に戻った

「・・・人工能力はね、魔力をほとんど使わない、いわゆるイレギユラー的能力なんだ、古代による“古の能力”以外で考えると、この能力は危険なんだよ」

「そうですか・・・ですがなぜあなたはいろんな組織に身をおいていたのですか？」

「・・・簡単に言えば、大きい組織にいればいるほど、自分の身が守れるので、それで・・・」

「そうですか・・・以前の仲間はとうしたんですか？」

「・・・私が自主的にぬけました、見つかるとその組織に悪影響を及ぼしてしまうため・・・」

「・・・なるほど、それでは・・・」

マイとソラの話が長くなる

俺はここはソラに任せておくことにして、家を飛び出たリドを探すことにした

家を出たところで、リドは簡単に見つかった

すぐその道で刀を肩にかけながら座っている

俺が近くまでよると、リドは俺の顔を見た

リドの表情は先ほどとは違って今は落ち着いているみたいだ

「・・・ごめんな、ソラがリドにとってにくいことはわかるけど、いきなり仲間にするとか言って」

「いや、いいすぎた、確かに俺はあいつがにくいが、あいつも生きるため必死だったんだろう、俺も親助けるため必死になって、関係のないやつを傷つけてきたからな」

斬撃のリドは以前、親を助けるため、強いやつを探していた
そのためさまざまな強者と戦い、傷つけてきた、リドもそのことに深く反省している

「だが、少し・・・考える時間がほしい・・・場合によっては、俺はアースを抜けるかもしれない」

アース、俺が決めたチーム名、

リドは深く悩んでいる、俺が何かしてあげたいが状況が状況だ・・・

「・・・ああ、リドが決めたことに俺は反対しない、ごめんな、つらい思いさせて」

「・・・」

リドから返事はなかった

俺はそのままリドに背を向け、家へと入っていった

話が終わったのか、ソラとマイ、そして近くにいたレイとミサも静かに座っている

「・・・? どうしたんだ?」

「あ! マサキ!、これからマイの提案でね、町へ行こうと思ってるの!」

「ま、町?」

「ええ、町に行って遊んでみましょう、これまで命狙われて逃げてきたんです、息抜きも必要でしょう?」

意外すぎる回答に俺は呆然とする

「でもいつあのロボットがくるかわからないぞ?」

「ああ、殺人用のヒューマロイドですか、安心してください、私が監視しますので」

そういうのがちゃっと巨大なライフル銃を持ち上げる
頼もしいやつ・・・

「えっと・・・ソラはそれでいい?」

なぜか赤い顔でうつむいてるソラ

「え!?! は、はい!?!」

「そっか、それじゃあ・・・」

俺はみんなを見てさっそく町に行こうとすると・・・

「いってらっしゃい！二人とも！」

レイが笑顔で見送る

「・・・え？ いかないの？」

「私たちはいかないよ、二人で町を思う存分見物してきて！！」

「・・・ええ？」

俺は何がなんだかわからなかった

「よ、よろしくお願いします」

ソラがそんなことを言って礼をする
するといつもどこからともなく勝手に召還される赤猫アキが俺の肩
に手をかけてきた

「これは、いわゆるデートってやつなんだよ、察しなよマサキ！何
なら僕がコツを教えてあげようか？」

小声で耳につぶやくアキ、なんのコツだよ！と思いつつもアキの
手をどけた

「あ！また勝手に出て！！いつも出るなって言ってるジャン！！！！」

「はは、レイはいつも厳しいねえ、怒ってるレイも素敵だけど！」

「んな!? ま、まちなさい!!」

こうしてレイは赤猫を追っかけていってしまった

「・・・はあ、しょうがない、暗くなる前に行くか」

「えっと・・・は、はい」

外に出ると、リドの姿はすでになかった

俺はここの中で再びリドに謝り、ソラと一緒に町に向かった

わいわいと騒がしい町

人がとても多く、買い物客や店の人々でとても平和的な風景だ

「わぁ・・・人多いですね」

「町にはきたことないのか？」

「はい、学園でほとんど行動してたので」

少なくとも明るい表情になったソラ

こうしてみるとあのころとは違っておとなしい子なんだと思う
いろんなところに見回り、ある町周りの人形劇団が芸をしているの
でそれを見ていた

子供に大人気だったがソラもその芸を見てとても無邪気に笑っていた
こうして笑うと、普通の女の子じゃないか・・・

俺はその笑顔を見てるととても胸が痛んでしまった

ある店の前でソラがとまった

そこには俺の世界でもあったアイスクリームが売ってるお店だ

ソラは興味あるのかとても輝いた目で白いアイスクリームを見ていた

「食べたいのか？」

「い、いえ大丈夫です!!」

そういうソラだが明らかによだれがたれているのをみて俺はため息
をはいた

「すみません、アイスクリームひとつください」

「ま、マサキさん!？」

ソラは俺の注文に驚きながらも明らかに何か期待している様子

すると店のおじちゃんが・・・

「おう、お似合いのカップルだね！アイスクリームもう一個サービスしておくぜ！」

ノリのいいおじちゃんがそういった、俺は心の中でよっしゃ！っと喜んでいたが、ソラは・・・

「か、っかかか、カップ・・・カップル・・・」

頭から煙がでるのではないかというくらい真っ赤な顔をしていた

俺はとりあえずお礼を言いながらアイスクリーム一個分の代金と引き換えに二つアイス进行もらい、座れるような場所を探した

歩くと、人気の少ない通りに出て、ちょうど広場が見つかりそのベンチで座って休憩する

「ほら」

俺は両手でもったアイスのひとつソラに渡した

ソラはぼうつとアイスを眺めている

俺はアイスを三回口にして、ソラを見た

「うまいぞ?」

そういうとソラはわれに返ったように俺を見て、そのままアイスで小さい舌でぺろりと一口なめた

「・・・おいしい」

呆然とアイスを見つめるソラ、そのまま一口一口丁寧に食べていくソラ

よほどおいしかったのか自然にソラは笑顔でアイスを完食していた

「はぁ・・・おいしかった」

幸せそうに、そして満足そうなソラ

いつのまにか、日が暮れてもうすぐ夜になろうとしていた

「・・・さて、そろそろ学園に戻ろうか」

俺はそういつて立ち上がる、しかし、ソラは座ったまま、動こうとしない

「・・・ソラ？」

「・・・あ、ごめんね！ちょっと考え事してた」

「そ、そうか・・・」

ソラは立ち上がって手を真上に伸ばし背伸びすると、俺の方へ視線を向けた

「・・・仲間にするって言うてくれて、ありがとう。なんかとても

うれしかったよ。敵だった私にここまでしてくれるなんて・・・」

「いや、たいしたことじゃない、それに俺はソラの力を見込んで仲間を誘ったんだ」

「力？」

「ああ、俺はいつか魔王討伐をする！！そのためには強い仲間たちがいる、昨日のあの戦いを見て思った、ソラは強い、だからその強さと力が俺にとって必要だから、仲間に誘ったんだ」

「・・・魔王、討伐・・・あ、あは、あははははは！！」

するとソラはおなかを押さえ大笑いした

「そ、そんな笑うなよ！俺は本気だ！！仲間みんなで魔王を討伐するつもりだ！！」

しかし、それがつぼになったのかますます笑い出すソラ

そして落ち着きを取り戻し、俺の方へ向いた

「・・・でもね、もし・・・さ、その力がーーをするためだったとしたら？」

「ん？」

小さい声で何かをつぶやいたソラ、しかし強く吹いた風により大事な部分が聞き取れなかった

「い、いや！なんでもないんだ！！学園戻ろうか！」

「??.?、お、おう・・・」

不思議なソラに俺は戸惑いつつも、学園へ戻ろうと足を踏み出した
そのときだった

「みつけた、こんなところにいたんだな」

「・・・!!」

ある男が俺たちの目の前に現れた
その男は黒い髪で前髪に目立つ二本の赤い毛が生えている
年齢は20歳ほど、誰なのだろうか

「・・・あれ？君この子のお友達かな？」

そういうと男の視線は俺へと向いた

「君、この子何か知ってるの？」

その言葉で俺は直感した
こいつはソラのいた施設の仲間・・・ソラを取り返しにきたんだと

俺はソラをかばうようにして男の目の前に立った

「・・・ああ、昔お前たちがひでえことしたんだろ、そのために人工的な能力までとりつけられて」

「・・・うん、そうだけど、それだけじゃないよ?」

「・・・それだけじゃない?」

どういうことだろう

「なんだ、エミム1は言っていないのか、しょうがないから俺が教えてあげようかな」

「・・・や、やめて」

この男はソラの何かを知っている、それを言おうとしてるのをソラがとめている

「エミムはね・・・」

エミム、それはこの男たちがソラに対する呼び名か

「エミムは・・・対殺人用改造人間として俺たちの施設で作られた・・・いわゆる人間兵器なんだよ?」

「い、言うな!!!」

ソラが耐え切れず大粒の涙を流しながら叫んだ

・・・人間・・・兵器？

俺は言葉の意味を一瞬では理解し切れなかった

男はそのまま刻々と・・・ソラの過去を話し始めた

ソラの過去

ソラの過去がなぞの男によって語られ始めた

とある地下に大規模な研究所が存在した

表向きは最先端技術の研究をしているところなのだが裏では核兵器や殺人武器の発明をしているとても危険な施設だった

ある日、その研究所に一人の少女がやってきた

少女は生まれつき体に膨大な魔力を持っていたため危険視され、親から捨てられた子供だった

研究者たちはそれを利用して少女を改造した

そしてその改造少女を研究者たちはエミム1と呼んでいた

そして最先端によって発見された人工的能力をソラに取り付けた
そこからエミム1は殺人用兵器としてさまざまな研究に明け暮れた
あるときは魔物を殺し、あるときはさまざまな兵器と戦ったりした
そしていつしか、エミム1は感情をなくしかけていた

感情をなくすと暴れだす可能性があるとして、研究者たちは新人の
研究員、ライドという名の若い男にエミム1の世話係を言い渡した
新人だったため、彼はエミム1がどんな人物でどんな研究をしている
のか、まったく言っていないほどわからなかった

「や、やあ・・・」

「・・・・・・・・」

エミム1が待機している部屋にライドは入った

白い服を着て、まだ見た目が5、6歳のエミム1はまったく反応せず、近くにあった積み木で適当に重ね合わせ遊んでいる

「・・・・・・・・えっと、君の名前は？」

ライドはエミム1というのはただの呼び名だけであって、ほかに名前があると思っていた、だが

「・・・・・・・・」

それでも無反応なエミム1

「・・・・・・・・ぼ、僕はライドっていうんだ！最近この研究所に着たばかりでさ、よろしくね・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・」

それでも反応がないエミム1

「え、えっと・・・明日も来るね？それじゃあ・・・」

結局、この日は何も話さないままライドは部屋をあらわにした

ライドはあきらめず、その日から何回もエミム1の部屋を訪れた

反応のないエミム1に、昨日ない食べたとか、何をしたかとか、しつこく言ったライド

それが12日目になったところだった

ガチャ

いつものようにエミム1の部屋を訪れた

「やあ、今日も来たよ・・・えっと、エミム？」

「・・・」

反応がない・・・わけではなかった、

このとき、エミム1は初めてライドの方を向いた
いつも積み木だけ見ていたエミム1がはじめて首を動かし、ライドを見たのだ

ライドはうれしくなり、続けた

「やっと向いてくれたね」

「・・・・・・・・ら・・・・・・・・いど」

「!?!」

話かけると今度はライドの名を呼んだ

「そ、そうだよ！ライドだ！」

この日をはじめに、ライドはいろいろなことをエミム1に教えた
エミム1はすこしずつではあったがライドに確実に心を開いていた

そしてある日のこと

「名前がないの・・・？」

「・・・うん」

いつものように会話をしているとき、ライドが何のためらいもなく
本当の名を聞いたらないという返答が帰ってきた

「生まれたときから私はずっとエミム1って呼ばれてる、名前なん
か・・・ない」

そういうエミム1の顔はなんだかさびしげだった
ライドはそれを見て

「じゃあ、僕が名前をつけてあげるよ！」

「え？」

ライドが言ったことが予想外だったのか、エミム1は驚きの表情を
した

「そうだな・・・ソラ、っていうのはどう?」

「・・・そ、ら?」

「そう、空にちなんでね、知ってる?」

「ううん・・・」

「そっか・・・空って言うのは外の世界で上にあるものを空って言うんだ、とても青くて、広くで壮大で・・・とても美しいんだよ」

「・・・私、外にでたことない」

「え?」

「ずっとこの研究所にいたから」

そういつてうつむくエミム1

「なら、僕がいつか連れて行ってあげるよ! 外に、空の下に!! だから、この名前を誇りに思ってくれ!」

「・・・外に・・・空に・・・うん」

エミム1は、このときから、ソラという名をもらった
そしてかすかに、笑ったのだ

ソラは普通に笑うようになり、感情を持ち、ライドには明るく接す

るようになった

そしてライドがソラの世話係になって1年たったある日のこと

「・・・私、もうこんな生活いやだ」

魔物を数々殺し、そして徐々に強くなっていく自分に苦しみ始めたのだ

その姿を見て、ライドは胸が痛くなった

「・・・僕が、なんとかしてみるよ」

「ほ、本当に？」

「ああ、任せて！」

ライドは笑顔でソラにいった

そして心の中で思った、この子は守るべき人だと

ライドは、ソラを研究している上層部員に話を持ちかけた
すると、ある驚きの言葉が返ってきたのだ

「・・・え？ 殺人兵器？」

「君には教えていなかったな、エミム1の力は人類の源、そして大量殺戮兵器として今まで研究してきたのだ」

「そんな・・・」

「だが、その研究も大分たった、あのエミム1は・・・廃墟しなくてはな」

その言葉にライドはさらに驚愕したのだ

「・・・廃墟・・・捨てるってことですか？」

「正しく言えば壊す、彼女は危険な存在になりすぎた、私たちに研究をはるかに凌駕した」

「そんな・・・危険な存在にしたのはあなたたちでしょう!？」

「私たち、だけではない、君もだ・・・」

「・・・僕？」

「君がエミム1に正しい人の感情というものをいれてしまった、そのため、彼女は力を己の自由に使えてしまうんだよ」

「・・・人に感情が合って・・・何が悪いんだ・・・ソラは物じゃない!! 一人の、人間で、女の子だぞ!!!!」

「・・・面白いことをいうね、まあ、いい・・・君は今日限りでこの研究所から去りなさい」

「何!？」

「君はクビということだ、実はね、最近・・・彼女は反動で3人の研

究員に危害を加えたんだ」

「・・・やりたくないことを無理やりやらせ、危険なことをやらせ、自分の身を守るのは当然だろ!？」

「この話は終わりだ、連れて行け」

するとどこからともなく研究者2名がライドの両腕をかつぎ引っ張り出した

「まだ話は終わってない! まだ・・・まだあ!!」

そしてライドは研究所を追い出された

その2日後、エミム1に関するデータを保存して、エミム1を破壊することとなった

エミム1は必死に抵抗した

銃を向けられ、ナイフをちらつかせられ

それでも抵抗し、いつしか研究室は人の血で染まり、資料がばら撒かれ、周りにある機会はめっちゃめっちゃに壊れていた

「・・・う・・・うぐ・・・ぐす」

ソラは泣いていた

自分がなぜこのような苦しみを受けるのか
やはり自分は殺人兵器なのだろうか、と

すると、研究室の扉が開いた

ソラは警戒し、腕を刃にして扉のほうをむいた

「・・・ソラ」

そこには汗だくのライド

研究所に進入し、必死になってソラを探してたのだ

「・・・ライド」

「かわいそうに・・・怖かっただろ？安心しろ・・・僕が君を守るから・・・」

返り血を浴び、真っ赤に染まったソラをライドはやさしく抱きしめた

一瞬、びくつと反応したソラだったが、そのままおとなしくなりひしつとライドにしがみついた

そのとき、再び研究室の扉が開いた

「・・・どうだい？やはり兵器として危険だろうか？」

上層部員の人だ

彼は部屋の惨劇を見ても驚かずむしろやはりかというように目で見
ていた

「・・・彼女だって人間だっていったじゃないですか」

「そうだな・・・だから我々はさらなる兵器を誕生させたのだ」

そういうと男の両隣から奇妙な格好をした少女が二人現れた
頭にはヘッドホンのような機械をつけており、そして目には黒いサ
ングラスのようなものをかけている

何より驚いたのが右腕が銃だったということだ

「エイム1のデータと研究とともに完成した殺人ヒューマロイド、
エイム2だ・・・」

「・・・このために、もしかして・・・ソラはただの・・・!?」

「・・・実験台に過ぎないのだよ」

そういうとライドは怒り、下にめがけ何かをぶつけた

すると白い煙が勢い欲噴出し、研究室は煙で充満した

「・・・厄介なマネを」

「こっちだソラ!!」

そういうとライドはソラの腕を引っ張り走り出した

「はぁ・・・はぁ・・・」

ついたのは妙なカプセルのある部屋、そしてそのカプセルは妙な線路の上にのってる

「これを使えば外に逃げられる、もうすこしだ」

そういつて部屋に入って、扉を閉めようとしたときだった

先ほどのヒューマロイドがものすごいスピードでこちらに向かって
いる

そしてドンドンと腕についてる銃でこちらめがけ乱射していた

「・・・!!くそ・・・」

あわてて扉をしめ、鍵をかける
向こう側から発砲音と何かをたたきつける音がする、こじ開けられる前に脱出しなければいけない

ライドはソラをカプセルに入れるとそのままガラス張りの扉を閉めた

「・・・ライドは・・・?」

ソラはカプセルに入らないライドに不安を感じる

すると急に口から赤い血を吐き出したライド

「ごほ!!げほ・・・」

「ら、ライド!?!」

「・・・さっきの銃で撃たれたみたいだな・・・」

そういうライドのおなかあたりから赤い血が服ににじみ出ていた

「・・・僕はもうだめみたいだ」

「・・・そ、そんな・・・ライド!!」

「・・・ソラ、外はすげえぞ、こんな研究所なんかより広いし、いろんなものがあるし」

「じゃ、じゃあライドがそれを見せて!!お願いだから一人にしないで!!」

そういつてるソラだが、ライドは落ち着いてカプセルのスイッチをいれた

するとどこからか、出発音が聞こえ、カプセルの外側から煙が出始める

「・・・いいか・・・仲間を見つけるんだ・・・ソラ、信じられる仲間に・・・その仲間はきつとソラを助けてくれる・・・僕のかわりに、一生懸命・・・にね」

「いやだ・・・いやだいやだ!!!!」

「ソラ・・・逃げ延びろ・・・ソラ・・・お前は人殺しのための兵器じゃない、一人の人間だ」

そしてその場に倒れこむライド

「ライド!!!ライド!!!」

そしてそのまま、カプセルは勢い欲発射した

通路を猛スピードで走り、外へと飛んでいった

「・・・いつか・・・必ず、信じられる仲間とともに・・・生きろ、ソラ・・・」

それを最後に、ライドはその場に倒れ、動かなくなった

どれほど飛ばされたのだろうか、ここはどこなのだろうか

カプセルが着地と同時に外にほうりだされたソラ
そのまま地面に寝転がっている

カプセルは数メートル先で何かが引火したのか、燃え始めている

そして上からは雨が降り、地面は泥だらけとなった

空は青くて広くて壮大で美しい

ふとライドの言葉を思い出した

ソラは立ち上がると上を見上げた

そこには黒い雲が広がり、雨がざあざあと降っているだけ

「・・・ねえ？ライド・・・空、ぜんぜん青くないよ？・・・ぜんぜん美しく・・・な・・・いよ？」

そしてそのままソラは泣き続けた

何のために泣いているのかわからない、徐々に激しく降る雨は泣いているソラに容赦なく降り続いた

仲間というもの

ソラの過去を一通り話した男

この男も研究所の一人で間違いない

ってことは明らかにソラを連れ戻しにきた

そしてソラは・・・

「・・・ソラを連れ戻して・・・廃棄するきか？」

「ん？まあ、そんなところだね、このままにしていると危険だというのを研究所が判断したし、6年間よく行方をくらませたね・・・」

ソラはライドという男に助けられてその後どうしたのだろうか
きっと苦しい6年間を味わったに違いない
想像するだけで・・・胸が痛む

ソラは男を目の前にとっても動揺していた・・・

「・・・残念だけど、ソラは渡さないよ」

俺はトーチである剣を発動し、男とソラの間にはいった

「ん？どういう意味かな？」

「ソラは仲間なんだよ、渡すわけにはいかない」

「・・・聞いてなかった？それとも理解ができなかったのかな？彼女が兵器なんだよ？仲間なんてばかげたこと・・・」

ドゴー!!

そういいかけた男に俺は一気に走り出し、男の顔面に蹴りを入れた

「・・・!!」

「ソラは、兵器でもなんでもない、仲間だ・・・仲間に手を出すやつを俺はゆるさねえ・・・いいか、俺は仲間を守る・・・決して死なせるマネはさせねえよ!!」

口から血を流す男、表情は変わってないが、その体から恐ろしい殺気がわきでていた

「・・・面白いことをいうね、じゃあ・・・守ってみせろよ!!」

そういうと男は手を真上に伸ばした
するとどこからか黒い影がその手の平に集まり、丸くなる

・・・これは、トーチだ

その丸い形が崩れ別の形となる
黒い光が消え、武器の姿が露になった

それは、巨大なノコギリだった

「・・・俺のトーチ、“ギリコジャリ”・・・手足を切断して埋めてやるよ」

そして男はそのノコギリを振りかざし走り出した
俺も同じタイミングで剣を構え走り出す

ガキインッ！！！！

剣とノコギリが重なり金属音が響き渡る

「はああああ！！！」

男はノコギリを上下に振るととてもない衝撃が生まれ俺は思わずはじかれる

「うおお！？」

俺は後ずさり、男と距離をとった

「・・・まだお前はトーチを完全に使いこなせてねえな、使い方・・・
わかってねえのか！？」

そして再びノコギリを振り上げ走り出す

「使い方・・・？」

その言葉に何かと引っ掛かりがあるがいまは考えてる場合ではない
俺はこちらに向かってる男にめがけ剣を構えると・・・

「“魔人剣”！！！」

黒い斬撃を放った

すると男も武器を構え・・・

「“キリジャゴウ”!!!!」

といったのこぎりを振り下ろす

すると黒い何かがギザギザに上下にゆれながらこちらに向かって飛んでくる

俺の魔人剣とぶつかったが簡単に魔人剣が破壊された

「なに!?!」

そのままギザギザにゆれる攻撃が俺に直撃する

「があ!?!」

俺は吹っ飛んで地面に崩れ落ちる

傷口はノコギリで刻んだような切り口になっていた

「・・・弱いな・・・これで守るとかいつてるのかお前は」

そういつて俺のそばまで歩み寄り、ノコギリを振り上げる・・・

するとどこからかピピっという音になった

「・・・ああ? っち、タイミング悪いな」

男はノコギリを地面に刺し、ポケットから緑の石を取り出した

あれは確か連絡用エフィネア・・・離れた相手と連絡を取るための石だ

「・・・俺だ・・・なんだと？今日の前にいるのに・・・わかったよ」

そういうと再びポケットに石を入れると今度は赤い石を取り出した

「事情が変わってなあ・・・研究所に戻るようになった・・・運よかったな」

そういつてトーチをしまった男は俺たちに離れ・・・

「近いうち・・・にな・・・レイギスト」

そういうと石は光だし、目の前から男が消えた・・・

「・・・ソラ・・・大丈夫か・・・」

「・・・ごめ・・・」

「え？」

「ごめんなさい、ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・」

ソラは泣きじゃくりながらなぜかあやまり続いていた

子供のようにつつと・・・

「・・・つく」

ドサ

そのときに俺は出血がひどく、その場に倒れ気を失ってしまった

・・・・・・

ここは、どこだろうか

目を覚ますと、まずはじめに天井が目に入った

咄嗟に胸の辺りをさすったが切り傷がなかった

誰かが回復でもしてくれたのだろうか・・・

ベットに寝ているところを確認すると、ソラが助けを呼んでくれた
のだろうか・・・

起き上がり、俺は周りを見渡した

・・・さっきまで誰かいたのだろうか？
そこにはイスがおいてあった

そのとき、ガチャリと扉が開いた

「・・・レイ？」

そこにはとても不安な表情をしたレイがたっていたのだ

「よかった、目、覚めたんだね・・・？」

「・・・なあ、ソラは？」

ビク

ソラの名前を出すとレイは肩を震わせた

「・・・マサキが誰かと戦ったあとにね・・・」

レイは説明した

ソラの体が光って背中から白い翼が生えた
そしてそのままどこかに飛んでいってしまったそうだ

「・・・ソラ、泣いてた・・・とても」

「・・・なんだと？」

俺にはその行動の意味がまったくわからなかった

すっかり暗くなった外

そのくらい夜空をソラはとんでいた

大泣きをして、これ以上マサキには迷惑かけてはダメだと

そのまま飛び続け、ある草原で着地した

その草原はカプセルで逃げた更に不時着した場所

「・・・私は、兵器なんだ、危険なんだ・・・みんなに迷惑、かけちゃだめだ」

そのまま歩き出すソラ

その後ろを、研究員の男が・・・追っていた

居所

「・・・」

ソラはとぼとぼある気ながらあることを考えていた
今までいろんな組織にいたソラだったがこれほどまで仲間思いな一味には入ったことがない

ましてや、こんな人殺しの力を必要にしてくれたことも・・・

「・・・これ以上は」

これ以上はめいわくかけたくない

私のせいでマサキがあんな目にあうのはみたくない
私のせいで・・・もう人が死ぬのは見たくない

一瞬、ライドが打たれ、血を流し倒れる場面が脳裏を駆け回る

「・・・!!」

・・・もうあんな思いはいやだ

そのために私は・・・

「・・・研究所に戻るのかね？」

「!?!」

後ろから声がした

中年ほどの男性の声

その人は、上層部員の、ライドに私の世話係を言い渡した男だ
ひげを生やし、白衣を着ている

「・・・はい」

私は素直に答えた

研究所に戻って廃棄してもらえれば、私の人々にする危険は少なからずなくなるのだ

「・・・素直でいいな、では、いこうか」

研究所はここから遠くはない

私は追い越した白衣の男の背中を身ながら、前に進んだ

ごめんね、マサキ、みんな

「・・・わけがわかんねえよ」

目覚めたマサキはなぞの行動をとり行方がわからなくなったソラのことを考えていた

あのなぞの男が来て、そいつと戦闘し、男が途中で帰ったのは覚えている

その後俺は倒れ、ソラがおお泣きをして飛んでいったとみんなは言っていた

「マサキ・・・大丈夫？」

レイが心配そうにいう

何せ今は夜中の1時

普段レイは自分の家に帰っているのだが今日は帰っていない俺が食事もしない状態なのだ

「・・・レイは帰らなくていいのか？」

「私は一人暮らしだから、それに帰ってもすることはないし」

そういうながらレイは机にある飲み物を一口飲む

「・・・ソラの行方を探さない」と

一応、レイにはソラの身におきたのか説明はしておいた

「・・・もしかしてさ、研究所に向かったんじゃないの？」

「・・・はあ？ 今研究所に行けば死に行くようなものだぞ!？」

俺はレイの答えに不満をもち、否定する

「いや、だからさ・・・死に行くつもりじゃないの？」

その答えにますます俺は不満になった

「・・・なんで死ににいくんだよ!？」

「そうとしか考えられない、きっと・・・マサキが倒れたとき、ソラは昔助けた恩人さんをマサキとかぶらせてみちゃったんじゃないかな?それであの人の性格だと、きっと自分のせいで人が死んでしまうって思ったんだと思う。だから・・・自分が死んで終わらせようとしてるのかも」

「・・・」

レイが言っているのはあくまで予想、でもそんな気がする

俺はソラの想いを深くは考えなかったのに、レイはソラの気持ちになっただけで考えているなんて・・・

「・・・じゃあ・・・助けにいこう」

「・・・」

「・・・今回は、最先端技術で人を殺すことをする敵だ、危険かもしれない・・・みんな過去のだったんだから不満に思うこともあるかもしれない、でも俺は仲間を見捨てたくない・・・だから」

「・・・うん、わかってるよ」

レイが静かにいう

「マサキはお人よしというか、なんというか・・・他人の危険を助けるためには自分から危険に突っ込むようなひとだからね、とめても無駄だってわかっているよ」

「・・・レイ」

「・・・言っておいで、私はみんなに伝えておくから」

「・・・ありがとう」

そういつて俺はベットから起き上がり、走り出した

行方は・・・場所は・・・たしか・・・

レイギスト

あの男が転送するときいていた場所

俺は部屋に戻り、地図を広げた

ランブドラから南西25キロ地点・・・遠くはない

俺は地図を握りしめると、外を飛び出した

レイはそのころ、リドのところに向かっていた

リドはいつも学園中庭の噴水近くにいます

この時間はいるかどうか分からないけど・・・

レイは全力で走り、噴水についたときには息がものすごく切れていた

「はぁ・・・はぁ・・・」

噴水を見るが空が曇っているため、よく見えない

よく近づいてみた、すると・・・

「・・・おう、レイっていったか？」

ポニーテールに縛った髪に刀を肩にかけている

「・・・リド、話があるの」

「なんだ？」

リドはいたって落ち着いている

「・・・ソラのことなんだけど」

「・・・ああ」

「ソラ、過去いろいろあって、それで今、自分の命落とそうとしてるかもしれないの・・・」

「・・・」

レイが説明し始めた

リドは黙って聞いている

「・・・それをマサキは阻止しようと、ソラのところに向かった」

「・・・ああ」

「だから・・・こういうのあれなんだけど、仲間として・・・助けにいかない!？」

「・・・」

レイの問いに、リドはしばらく黙っていた

「・・・おかえり、といっておこうか、エミム1」

「・・・」

ソラは研究所に到着した

だが、研究所は想像以上に活発していたのだ

見たことない機械や機能

そして働いているものたちは、明らかにヒューマロイドだ

ソラは、研究所の中心に連れて行かれた

そこはとてつもなく巨大な空間が広がっており、通路は細い道が中心に向かって6つある

中心には光がたまっていた

多分だがこの研究所のエネルギーとなる部分だろう

天井は見えない

地面の底も光り輝いているためまったく見えない

本当に地下にいるのか不思議なくらいの光景だった

「驚いただろう？ 新たな技術でできた核エネルギーだ」

「核・・・エネルギー？」

「ああ、この星の中心にはものすごい力の魔力が含まれている、その力を利用した装置なのだ」

「・・・」

確かにすごい技術だと思う

しかし、今から命を落とす私にとっては関係ない

だが、次の一言でその思考が停止する

「・・・このエネルギーを費やせば、貴様はさらなる兵器に進化する！」

「・・・え？」

新たなる・・・兵器？

「傑作のお前をそう簡単に消すわけないだろう？」

「そんな・・・私は死ぬ気でここに來たのに・・・約束が違うじゃない!？」

「なに、記憶、意識、感情・・・それらのものすべてなくすことが可能・・・貴様は何も考えない、ただ人殺しするだけの殺人兵器に生まれ変わるのだ!!」

「そんなのいやだ!!」

人が死ぬところも見たくないのに、記憶を消されてまで私は兵器として生きていくのはいやだ

「・・・そうだなあ。はじめに、あの黒の剣士一味を・・・殺害に

するか」

その言葉に私は気が動転した

いつの間にか右手を剣の形として、白衣の男を刺しにかかったのだ

「無駄だよ」

しかし、男はソラの右手の剣を軽々片手で止めたのだ

「・・・え？」

白衣の男からとてつもない魔力が流れているのがわかる

「驚いただろう？これは核エネルギーによって実現されたさらなる人口魔力だ・・・」

「・・・！！」

そしてそのまま吹っ飛ばされたソラ

中心の核装置まで飛ばされ、地面にうずくまる

「・・・こんなの・・・いやだ・・・」

私のせいで、人が死ぬ

私のせいで、マサキやリドが死ぬ

もう・・・人が死ぬのは・・・いやだ

「もともと、貴様は腐敗品、廃墟品、捨てるものとなるはずだったのだ、だがみる・・・私の研究がここまで進んだおかげで・・・生きられるのだ!!」

「・・・そこまで・・・して・・・私は・・・」

涙が止まらない

自分が必要とする仲間を殺すことになってしまう
どうなるんだろう・・・私

「腐敗品をリサイクルするだけさ・・・」

そういつて私に近づいてくる男

リサイクル、腐敗品、廃墟品、捨てるもの・・・そうか。私は

「私は・・・はじめから、兵器なんだ・・・こうなる・・・運命だったのかな」

涙を流し、絶望のまま・・・未来をあきらめた・・・

「ふざけたことやってんじゃねえよ!!」

そのときに、高らかに声が響いた

「……え？」

私は涙を流しながらも目の前に立っている人を見た

黒い服、黒い髪、黒い剣……

マサキだ

「お前が腐敗品？ 廃墟品？ 兵器？ 捨てるもの！？ ふざけたこというな！」

マサキはかなり怒っている様子だった

「俺はお前を……兵器でも、人殺しでも、ましてや廃墟腐敗品だとも思ったことは一度もねえ、はじめから一人の人間として俺はお前と接してるんだ！ ソラ！！」

「……」

私は涙が止まらなかった

ここまでして……ここまできて……私を……

「……もう俺たちは仲間なんだ、つらいことがあれば……言えよ」

そういうと、マサキは私に背を向け、白衣の男をにらんだ

「・・・お前が親玉みたいだな」

「・・・そこをどけ」

二人はしばらくにらみあったままだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4092v/>

黒の剣士の物語

2011年11月8日22時46分発行